熊本県文化財調査報告　第１０４集

北上原古墳・瀬戸口横穴墓群

１９８９

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第１０４集

北上原古墳・瀬戸口横穴墓群

１９８９

熊本県教育委員会

序　文

農業の近代化をめざす各種の農業基盤整備事業は、県下の各地で実施されており、施工面積が広範囲におよぶため、その区域内に文化財が含まれることが多くなってきております。

施工区域内に文化財が含まれる場合、事前に農政部局や地元と協議を行い、保存できるものについては極力保存に努めているところでありますが、止むを得ず破壊を受ける部分については発掘調査を行い、記録保存の措置をとっております。

ここに報告する北上原古墳は、畑地帯総合土地改良事業の幹線道路の部分にあたり、保存が困難なため、道路敷地部分について発掘調査を実施いたしました。

瀬戸口横穴墓群は、総数300基にも達する県下最大の横穴墓群で、古くから注目を集めており、七城町の史跡指定を受けております。

昭和62年10月、この横穴墓群の一画で個人による採土が行われ、それまで埋没して存在の知られていなかった横穴墓6基が発見されました。事業者、七城町教育委員会と協議の結果、発見された横穴墓は保存されることとなりましたが、そのうちの4基について応急的に調査を実施いたしました。

北上原古墳・瀬戸口横穴墓群の調査成果を報告するにあたり、この成果が学術研究のみならず、広く県民の皆様に活用され、文化財愛護などに役立てられることを期待いたします。

最後に、調査等について終始御協力を受けた七城町教育委員会をはじめ、七城町役場、県農政部耕地第一課、県菊池事務所耕地課、及び地元の関係者の方々に対し、心から感謝の意を表します。

平成元年3月31日

熊本県教育長　松　村　敏　人

―― 例　言 ――

1．本書は、昭和62年度に発掘調査を実施した北上原（きたかんばら）古墳（所在地：熊本県菊池郡七城町瀬戸口）、瀬戸口（せとぐち）横穴墓群（所在地：七城町台）の発掘調査報告書である。

2．北上原古墳は、県営畑地帯総合土地改良事業（うてな台地地区）に伴い、熊本県農政部耕地第一課（熊本県菊池事務所）の依頼により、瀬戸口横穴墓群は民間の採土中に発見され、菊池郡七城町教育委員会の依頼により熊本県教育庁文化課が調査を実施した。

3．本書の執筆は、松本健郎・西住欣一郎・高木正文が下記のとおり分担して行った。Ⅴは、専門調査員の松下孝幸・分部哲秋・佐伯和信（長崎大学医学部解剖学第２教室）による。

Ⅰ－１・２、Ⅱ－１（１）・２・３（１）、Ⅲ……松本
Ⅱ－１（２）・３（２）、Ⅳ－１～７……西住
Ⅳ－８……高木
Ⅴ……松下・分部・佐伯

4．挿図・図版等の作成は、調査・執筆者で行ったが、挿図作成、原稿整理、写真関係については、木﨑康弘・白石　巌・本山千絵・瀬丸延子・深水美保子・加来恭子・小島由美子の協力を受けた。

5．調査に使用した地形図は、熊本県菊池事務所耕地課から提供を受けた。航空写真は、共立航空撮影株式会社九州運航所（所長　武田　寛）に委託して撮影したものである。

6．本書で使用したレベル数値（Ｌ＝）は、すべて海抜高である。方位は、磁北である。

7．出土品、実測図、写真等の資料は、熊本県文化財収蔵庫で保管している。

8．本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、松本健郎・西住欣一郎が担当した。

本　文　目　次

Ⅰ　北上原古墳・瀬戸口横穴墓群とその周辺

1．北上原古墳・瀬戸口横穴墓群の位置……1

2．周辺遺跡の概要……2

Ⅱ　調査の経過

1．調査に至る経過……7

2．調査の組織……8

3．調査経過……9

Ⅲ　北上原古墳の調査

1．古墳の立地……11

2．墳丘……11

3．主体部……13

4．その他の遺構……16

5．出土遺物……17

6．付編（山崎古墳・上梶迫古墳）……20

7．小結……23

Ⅳ　瀬戸口横穴墓群の調査

1．調査対象横穴墓の概要……25

2．49号－b横穴墓……27

3．49号－c横穴墓……31

4．49号－d横穴墓……34

5．49号－e横穴墓……39

6．前庭部の調査……41

7．小結……75

8．49号－c横穴墓の彩色について……92

Ⅴ　熊本県七城町瀬戸口横穴墓出土の古墳時代人骨……97

挿　図　目　次

第１図　北上原古墳・瀬戸口横穴墓群位置図……1
第２図　周辺遺跡（古墳・横穴墓）分布図……3
第３図　北上原古墳地形図……12
第４図　北上原古墳遺構図……13
第５図　北上原古墳墳丘等断面図……14
第６図　北上原古墳舟形石棺実測図……15
第７図　北上原古墳石棺加工痕拓影……16
第８図　北上原古墳出土遺物実測図……17
第９図　北上原古墳出土遺物実測図……18
第10図　山崎古墳３号石棺実測図……20
第11図　上梶迫石棺実測図……21
第12図　横穴墓配置図……25
第13図　横穴墓の部分名称説明図……26
第14図　49号－ｂ横穴墓実測図……28
第15図　49号－ｂ横穴墓内人骨検出状況実測図……29
第16図　貝輪……30
第17図　直刀実測図……30
第18図　須恵器実測図……31
第19図　49号－ｃ横穴墓実測図……32
第20図　49号－ｃ横穴墓内人骨検出状況実測図……33
第21図　49号－ｄ横穴墓実測図……35
第22図　49号－ｄ横穴墓の玄室内出土遺物分布図……36
第23図　49号－ｄ横穴墓右屍床出土丸玉実測図……37
第24図　49号－ｄ横穴墓奥屍床出土丸玉実測図……38
第25図　耳環実測図……39
第26図　49号－ｅ横穴墓実測図……40
第27図　鍔実測図……41
第28図　土層実測地点位置図……42
第29図　土層実測図……42
第30図　Ⅴ層遺物出土状況実測図……44
第31図　Ⅳ層遺物出土状況実測図……46
第32図　Ⅳ層出土遺物分布図……47
第33図　Ⅲ層遺物出土状況実測図……49
第34図　Ⅲ層出土遺物分布図……50
第35図　Ⅱ層遺物出土状況実測図……52
第36図　Ⅴ層出土須恵器実測図……53
第37図　Ⅳ層出土須恵器実測図……55
第38図　Ⅳ層出土須恵器実測図……56
第39図　Ⅲ層出土須恵器実測図……59

第40図　Ⅲ層出土須恵器実測図……60
第41図　Ⅲ層出土須恵器実測図……61
第42図　Ⅲ層出土須恵器実測図……62
第43図　Ⅱ層出土須恵器実測図……65
第44図　表採須恵器実測図……67
第45図　表採須恵器実測図……68
第46図　土師器実測図……70
第47図　土師器・土製品実測図……71
第48図　前庭部出土鉄器実測図……73
第49図　石材実測図……74
第50図　横穴墓の築造時期と追葬期間の想定模式図……78
第51図　Ⅱ層～Ⅴ層での遺物接合関係図……80
第52図　Ⅲ層出土遺物配置状況復元図……83
第53図　Ⅳ層出土遺物配置状況復元図……84
第54図　ヘラ記号集成図……89
第55図　ヘラ記号をもつ須恵器分布図……91
第56図　49号－c横穴墓彩色実測図(1)……93
第57図　49号－c横穴墓彩色実測図(2)……94
第58図　49号－c横穴墓彩色復元図……95
第59図　桜ノ上横穴墓と岩原横穴墓の彩色実測図……95

表　目　次

第1表　北上原古墳調査工程表……9
第2表　瀬戸口横穴墓群調査工程表……10
第3表　Ⅴ層出土須恵器観察表……53
第4表　Ⅳ層出土須恵器観察表……56
第5表　Ⅲ層出土須恵器観察表……63
第6表　Ⅱ層出土須恵器観察表……65
第7表　表採須恵器観察表……68
第8表　土師器・土製品観察表……71
第9表　遺物間の接合平均距離測定表……81

図　版　目　次

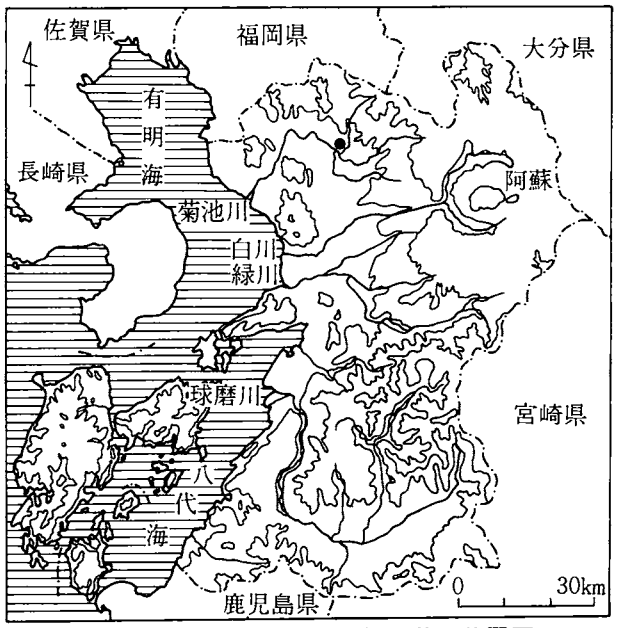
図版１　うてな台地航空写真
図版２　北上原古墳　墳丘断面・舟形石棺
図版３　北上原古墳の墳丘
図版４　北上原古墳　調査前の主体部状況・墳丘東西断面
図版５　北上原古墳　墳丘南北断面
図版６　北上原古墳　北側周溝
図版７　北上原古墳　南側周溝
図版８　北上原古墳　舟形石棺棺蓋
図版９　北上原古墳　舟形石棺棺身
図版10　北上原古墳　舟形石棺棺身
図版11　北上原古墳　舟形石棺棺身加工痕
図版12　北上原古墳　出土遺物
図版13　瀬戸口横穴墓群　調査地遠景・49号－ｂ・ｃ・ｄ横穴墓
図版14　瀬戸口横穴墓群　49号－ｂ横穴墓
図版15　瀬戸口横穴墓群　49号－ｂ横穴墓
図版16　瀬戸口横穴墓群　49号－ｂ横穴墓
図版17　瀬戸口横穴墓群　49号－ｂ・ｃ横穴墓
図版18　瀬戸口横穴墓群　49号－ｃ横穴墓
図版19　瀬戸口横穴墓群　49号－ｃ横穴墓
図版20　瀬戸口横穴墓群　49号－ｄ横穴墓
図版21　瀬戸口横穴墓群　49号－ｄ横穴墓
図版22　瀬戸口横穴墓群　49号－ｅ横穴墓
図版23　瀬戸口横穴墓群　前庭部
図版24　瀬戸口横穴墓群　前庭部
図版25　瀬戸口横穴墓群　前庭部・完掘後全景
図版26　瀬戸口横穴墓群　出土遺物
図版27　瀬戸口横穴墓群　出土遺物
図版28　瀬戸口横穴墓群　出土遺物
図版29　瀬戸口横穴墓群　出土遺物
図版30　瀬戸口横穴墓群　出土遺物
図版31　瀬戸口横穴墓群　出土遺物
図版32　瀬戸口横穴墓群　出土遺物
図版33　瀬戸口横穴墓群　出土遺物
図版34　瀬戸口横穴墓群　出土遺物
図版35　瀬戸口横穴墓群　出土遺物
図版36　瀬戸口横穴墓群　出土遺物
図版37　瀬戸口横穴墓群　出土遺物
図版38　瀬戸口横穴墓群　出土遺物
図版39　瀬戸口横穴墓群　出土遺物

Ⅰ　北上原古墳・瀬戸口横穴墓群とその周辺

1．北上原古墳・瀬戸口横穴墓群の位置　（第1・2図）

北上原古墳・瀬戸口横穴墓群は、共に熊本県菊池郡七城町の台台地西端部に所在する。

北上原古墳は、台（うてな）台地の西北端部の台地上に位置し、所在地は瀬戸口字北上原である。瀬戸口横穴墓群は、同一台地の西側崖面にあり、約1kmにわたって横穴墓が点在する。北上原古墳の直下にも横穴墓があり、この付近は瀬戸口横穴墓群の北端にあたる。横穴墓の調査地点は台字城の下にあたり、横穴墓群の中では比較的南部に位置する。横穴墓群は、さらに南の方にもみられ、調査した横穴墓は南から数えて49号横穴墓の下部に位置している。



第1図　北上原古墳・瀬戸口横穴墓群位置図

両古墳の位置する台台地は、菊池川の中流右岸にほぼ東西にのびた洪積台地である。現在の行政区分では、台地の東側約3分の1は菊池市、西側の約3分の2は、菊池郡七城町に属している。

台台地は、四方を川で囲まれている。東側には迫間（はざま）川が北から南に流れ、台地の東南端で西に折れ、台地の裾を流れている。その西側には、菊池川がほぼ平行して流れている。台地の南面は、いくつかの浅い谷が刻まれているが比較的緩やかな斜面となっている。台台地の西側には、内田川・木野川が平行して南流し、台地の西方で合流する。さらに台地の西南方で内田川・迫間川が菊池川に合流している。台地の西側斜面は急斜面が多く、ここに横穴墓群が並んでいる。台地の北側には、木野川の小支流である豊水（そうず）川が東から流れている。豊水川は、幅10mにも満たない小河川であるが、河川による浸食が著しく、台地の北側は複雑な地勢を呈している。

2．周辺遺跡の概要　（第２図）

菊池川等の河川に面した台地・丘陵は文化財の宝庫であり、各時代、各種の遺跡が点在している。ここでは、北上原古墳・瀬戸口横穴墓群の所在する台台地の古墳と、台台地と木野川・内田川を間に西に対峙する御宇田（みうた）台地、迫間川・菊池川を間に南に対峙する花房台地北縁部の古墳を中心とした遺跡について概観する。

台台地の古墳

台台地は、東西約５km、南北約1.2～1.5kmの大きさで、台地の西側では、標高70～100mの平坦面が多い。台地の中央部には遺跡は少ないが、周縁部には縄文時代～歴史時代の遺跡が多い。

台地の東方には袈裟尾古墳群、その背後に堀切周辺の横穴墓群、台地の南縁の山崎から水次の古墳群がある。袈裟尾古墳群は、袈裟尾高塚[1]（装飾古墳、県指定史跡）、石製品（靫）を伴ったと考えられる袈裟尾丸山古墳[2]、袈裟尾茶臼塚[3]の３円墳からなる。これら袈裟尾古墳群は、主体部の構造や出土遺物からみて、丸山（竪穴式石室）→高塚（横穴式石室）→茶臼塚（横穴式石室）の変遷を辿るものと考えられる[4]。

山崎・水次周辺の古墳は、石棺を内蔵するものが多い。山崎古墳は、１号石棺（舟形石棺）、２号石棺（箱式石棺）、３号石棺（家形石棺）が知られている。いずれも昭和初期[5]に発見されており、１・２号石棺は調査後埋戻され詳細は不明な点もあるが、３号石棺の棺材の一部（第10図）が現地に保存されている。

さらに西側の水次の周辺には十五社宮古墳（円墳、箱式石棺）、十蓮寺石棺[6]（墳丘不明、家形石棺）、昭和63年度に発掘調査されたハヤマ塚古墳（円墳、箱式石棺）がある。ハヤマ塚古墳

〔遺跡地名表〕（第２図対照）

1	袈裟尾丸山古墳	16	日渡横穴墓群	31	小町塚古墳	46	阿高横穴墓群
2	袈裟尾高塚古墳	17	長谷古墳群	32	茶臼塚古墳	47	大塚古墳
3	袈裟尾茶臼塚古墳	18	大塚古墳	33	湯の口横穴墓群	48	東浦田平横穴墓群
4	樋之口(B)横穴墓群	19	儀平山古墳	34	坂東石棺	49	木柑子横穴墓群
5	山田・樋之口(A)横穴墓群	20	熊崎古墳	35	原部石棺	50	フタツカ古墳
6	井樋谷・大井樋横穴墓群	21	山の井古墳	36	今山石棺群	51	木柑子舟形石棺
7	山崎古墳	22	徳塚古墳	37	陳の釜古墳	52	岩瀬チョウ塚古墳
8	十蓮寺石棺	23	立山古墳	38	陳の内古墳	53	岩瀬横穴墓群
9	十五社宮古墳	24	千年塚古墳	39	灰塚古墳	54	亀尾横穴墓群
10	ハヤマ塚古墳	25	朱塚古墳	40	尾迫古墳	55	上梶迫古墳
11	**北上原古墳**	26	平原古墳	41	銭亀塚古墳群	56	長明寺坂古墳群
12	うてな方形周溝墓	27	頂塚古墳	42	スズメ迫横穴墓群	57	蛇塚古墳
13	台古墳	28	五社宮古墳	43	鬼の竈古墳	58	打越古墳群
14	**瀬戸口横穴墓群**	29	津袋大塚古墳	44	黄金塚古墳	59	年賀塚古墳
15	豊水横穴墓群	30	御霊塚古墳	45	頭合古墳		

第２図　周辺遺跡（古墳・横穴墓）分布図

の東側には方形周溝墓も２基検出され、現在調査中[7]である。

山崎・水次の古墳群は、すべて箱式石棺・舟形石棺・家形石棺を主体部とするもので、袈裟尾古墳群に先行するものであろう。

横穴墓群は、袈裟尾古墳群の北西、菊池市木野（堀切）に２大群、９小群がある。組織的な調査は行われていないが、昭和62年に踏査した際には50数基を数えた。破壊されたものや埋没しているものもあり、本来は100基を超えるものと考えられる。

台台地の西部には、台地の北西端に北上原古墳、台地の西南端に台古墳があり、台地の西斜面に瀬戸口横穴墓群がある。台古墳の東方のうてな遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期の大規模な環濠集落と方形周溝墓が発見され、現在も調査継続中[8]である。台台地では、今のところ唯一明らかな古墳時代集落である。

台古墳は、未調査のため、墳丘の正確な規模、内部主体等の詳細は不明であるが、直径が30ｍに近い規模の大きな円墳である。周辺部の古墳の状態からみて、石棺が内蔵される可能性が強い。台古墳と北上原古墳は、台地の西南端と西北端に対称的に位置し、眼下に木野川・内田川の平野を見下ろし、斜め前方には菊池川本流の平野も望むことができる。

台台地の西端は直線的で、比較的急な崖となっている。崖面には随所に軟質の阿蘇溶結凝灰岩が露呈しており、そこに横穴墓群が並んでいる。

内田川右岸の古墳

内田川の右岸、御宇田台地の東縁に津袋古墳群と呼ばれる古墳群がある。西方の高い所に茶臼塚古墳[9]・小町塚古墳[10]があり、東に下って津袋大塚古墳[11]がある。そこから北に折れ、五社宮古墳[12]、頂塚古墳[13]と並ぶ。さらに北方に平原塚古墳[14]、朱塚古墳[15]がある。頂塚古墳までは丘陵の頂部に立地しているが、平原塚・朱塚は下位の段丘上に立地している。大塚古墳の東方の平野に面した段丘には御霊塚古墳[16]がある。

墳形は、茶臼塚が方墳の可能性が指摘されているが、他は円墳である。主体部は、茶臼塚は不明であるが、石棺を内蔵するものが多いのが特色である。小町塚・頂塚・平原塚は舟形石棺、大塚は箱式石棺と舟形石棺の複数埋葬、五社宮古墳は家形石棺が主体部である。朱塚は竪穴系横口式石室、御霊塚は横穴式石室である。これらの古墳は、小地域での古墳の変遷が模式的に理解できる好資料である。

木野川・内田川上流域の古墳

この地域は、津袋古墳群ほどのまとまりは見られないが、両河川が山間部から流れ出て平野を形成するあたりの丘陵部に古墳が点在する。調査等の行われた古墳は少なく、内容の不明な部分も多いが、前期様式の古墳から横穴式石室、横穴墓等の後期古墳がある。

昭和63年度に調査中[17]の灰塚古墳は、円墳に木棺直葬と家形棺蓋の石蓋土壙とを併置しており、この地域では最も古い時期に属する。陳の釜古墳、陳の内古墳、尾迫古墳、鬼の竈古墳、黄金塚古墳は、いずれも横穴式石室を内部主体とする古墳で、6世紀代を中心とし、一部は7世紀に及ぶと考えられる。

花房台地北縁部の古墳

菊池川本流の左岸に面した花房台地の北縁部に、東西に並ぶ古墳群がある。

フタツカ古墳は、横穴式石室を内部主体とする円墳で、石人を有する。台地の斜面には東浦田平横穴墓群、木柑子横穴墓群、岩瀬横穴墓群等が点在する。

さらに下流に下り、上梶迫古墳、長明寺坂古墳群[18]、蛇塚古墳[19]、打越古墳群、年賀塚古墳がある。上梶迫古墳については後で詳述するが、家形石棺（第11図）と横穴式石室の2基がある。長明寺坂古墳群は、4基の円墳からなる。1号墳から3号墳までは県指定史跡になっているが、その後最も規模の大きな4号墳の存在が知られた。1号墳は古式の横穴式石室で、2・3号墳は未調査である。蛇塚はこの地域では唯一の前方後円墳であったが、現在は消滅している。これらの古墳群の背後にある大久保遺跡では、古墳時代前期の住居跡があることが確認されている。

さらに西方に、打越古墳群（円墳、家形石棺）、年賀塚古墳（円墳）がある。

註（1）　文化財保存計画協会編『県史跡・袈裟尾高塚古墳保存修理工事報告書』菊池市教育委員会　1981

（2）　松本健郎・古森政次・坂田和弘『袈裟尾丸山古墳』熊本県文化財調査報告第98集　1987

（3）　富田紘一「袈裟尾茶臼塚古墳」『袈裟尾丸山古墳』熊本県文化財調査報告第98集　1987

（4）　註（2）に同

（5）　1・2号石棺は昭和7年、開墾中に発見。3号石棺はそれより古く、道路拡幅工事によって発見された。

九州日報　昭和7年9月9日記事

九州日日新聞　昭和7年9月11日記事

（6）　昭和40年、熊日学術調査団の松本雅明氏らにより調査。

熊本日日新聞　昭和40年4月15日記事

（7）　昭和63年度、熊本県教育委員会調査

（8）　註（7）に同

（9）　中村幸史郎「茶臼塚古墳発掘調査報告」『頂塚古墳発掘調査報告書』鹿本町文化財調査研究報告第1集　1986

（10）　墳丘は大きく削平され、主体部の舟形石棺の一部が露出している。かつて、赤色顔料を塗布した安山岩を採集したことがあり、竪穴式石室の可能性も考えられる。

富田紘一「原始・古代」『鹿本町史』1976

（11）　直径約32m、高さ約5mの円墳。舟形石棺、箱式石棺を並列に埋葬。盗掘を受けていたが、碧玉製石釧片など、注目すべき遺物を出土している。

（12）　富田紘一「原始・古代」『鹿本町史』1976

（13）　富田紘一『頂塚古墳発掘調査報告書』鹿本町文化財調査研究報告第1集　1986

(14)　註（12）に同
(15)　註（12）に同
(16)　原口長之「御霊塚古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集　1984
(17)　熊本県教育委員会調査
(18)　田辺哲夫編『熊本の上代遺跡』熊本の風土とこころ第２集　1980
(19)　墳丘・主体部は壊滅状態であるが、埴輪、馬具の出土が知られる。

II　調査の経過

1．調査に至る経過

（1）北上原古墳

昭和62年2月6日、県営畑地帯総合土地改良事業（うてな台地地区）の幹線道路工事中に石棺が出土したとの連絡が、県菊池事務所耕地課から県文化課にあった。当時、同じ七城町の大久保遺跡の発掘調査に従事していた松本健郎が即日現地に赴き、状況を把握し、その取扱いについて県事務所・七城町役場・七城町教育委員会・施工業者と打合せを行った。

この古墳は、遺跡地図には登載されておらず、施工中に石棺が出現してその存在が確認されたものである。地元の人達の話では、かつてここに小さな祠があり（現在は他の場所に移転されている)、「馬頭さん」と呼ばれて、馬の神として信仰されていたという。

文化課から現地での現状保存を提言し、関係者でその検討を行ったが、工事が僅か一部分を残して進行しており、設計変更による現状保存は困難であるとのことであった。

県事務所からは年度内の調査要請があったが、年度末のことでもあり、調査工程・予算面から年度内の調査は不可能であったので、一定区域を指定して工事を中止し、翌年度に発掘調査を実施することとした。

（2）瀬戸口横穴墓群

昭和62年10月30日、七城町教育委員会から県文化課に、瀬戸口横穴墓群の件で連絡があった。その内容は、以前から露出している横穴墓の下段から、採土工事中に新たな横穴墓が発見され、玄室内に人骨や遺物があるというものであった。連絡を受け、近隣のうてな遺跡の発掘に従事していた文化課の中原幸博が11月2日に現地確認を行った。

11月4日、七城町教育委員会の石渕実氏から、文化課において詳細な状況の説明があった。それを受けて、七城町教育委員会に対して、発見者からの遺跡発見届の提出、保存問題と発掘調査の検討を指示した。

七城町教育委員会の調整により、発見された横穴墓は現状で保存されることとなったが、6基発見された横穴墓のうちの4基は開口し、内部に人骨・副葬品が露出しており、応急的な発掘調査が必要であった。

町の教育委員会では十分な調査体制が取れず、七城町教育委員会からの依頼により県文化課から調査員を派遣して緊急に発掘調査を行うこととなった。

2．調査の組織

昭和62年度の現地調査、昭和63年度の整理・報告書作成の組織は下記のとおりである。

昭和62年度（現地調査）

調査主体　　熊本県教育委員会

調査責任者　　丸木保賢（文化課長）　　林田敏嗣（文化課課長補佐）

　　隈　昭志（文化課課長補佐・文化財調査係長）

調査総務　　松崎厚生（文化課主幹・経理係長）

　　谷喜美子（文化課主任主事）　　上村祐司（文化課主事）

調査員（北上原古墳）

　　松本健郎（文化課参事）　　坂本重義（文化課嘱託）

　　藤崎伸子（文化課嘱託）

（瀬戸口横穴墓群）

　　西住欣一郎・丸山伸治（文化課文化財保護主事）

　　原　葉子（文化課嘱託）　　本山千絵（文化課臨時職員）

専門調査員（北上原古墳）

　　木下洋介（宇土市教育委員会）

（瀬戸口横穴墓群）

　　松下孝幸（長崎大学医学部助教授）

　　分部哲秋（　　同　　講師）

　　佐伯和信（　　同　　助手）

昭和63年度（報告書作成）

調査責任者　　江崎　正（文化課長）　　林田敏嗣（文化課課長補佐）

　　隈　昭志（文化課課長補佐）

調査総務　　松崎厚生（文化課主幹・経理係長）

　　上村祐司・泉野順子（文化課主事）

調査員　（北上原古墳）

　　松本健郎（文化課文化財調査第１係長）

（瀬戸口横穴墓群）

　　西住欣一郎（文化課文化財保護主事）　本山千絵（文化課嘱託）

2．調査の組織

専門調査員（瀬戸口横穴墓群）

松下孝幸（長崎大学医学部助教授）

分部哲秋（　　同　　講師）

佐伯和信（　　同　　助手）

瀬戸口横穴墓群調査事務局　（七城町教育委員会）

林　正夫（教育長）　　林　瑞穂（教育課長）

石渕　実（社会教育係長）

調査協力者（昭和62・63年度）

県農政部耕地第一課　　県菊池事務所耕地課・菊池台地土地改良推進室

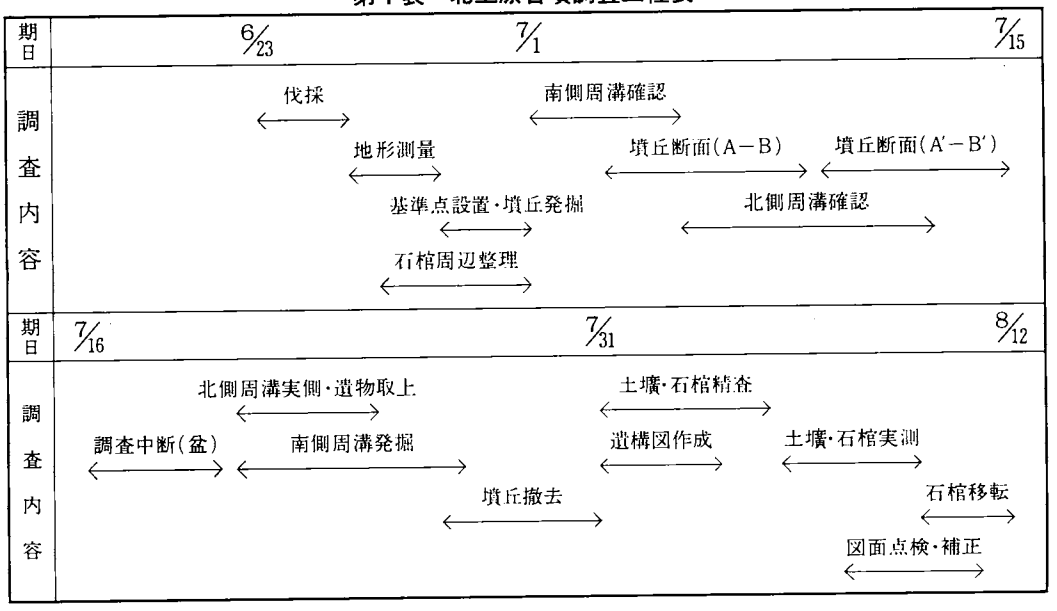
七城町役場　　七城町教育委員会　　七城町文化財保護委員会

3．調査経過

（1）北上原古墳

北上原古墳の現地調査は、昭和62年6月23日から8月12日まで実施した。現地調査の工程は第1表のとおりである。調査と並行して、再度設計変更の検討を行い、石棺だけでも現地で保存できないかどうかについて検討したが、用地買上げ、整備後の換地の点で無理があり、西側

第1表　北上原古墳調査工程表



に急崖が迫っていることもあり、僅かに西側へ路線を変更することは可能であったが、石棺を避けて迂回することは不可能であった。西側へ路線を変更することにより、道路と畑地の間に残地が生じたので、そこに石棺を移動した。

現地での調査が終了した後、昭和62年度中に遺物の整理作業までを行い、昭和63年度に遺物実測、製図、執筆等、報告書作成作業を行った。

（２）瀬戸口横穴墓群

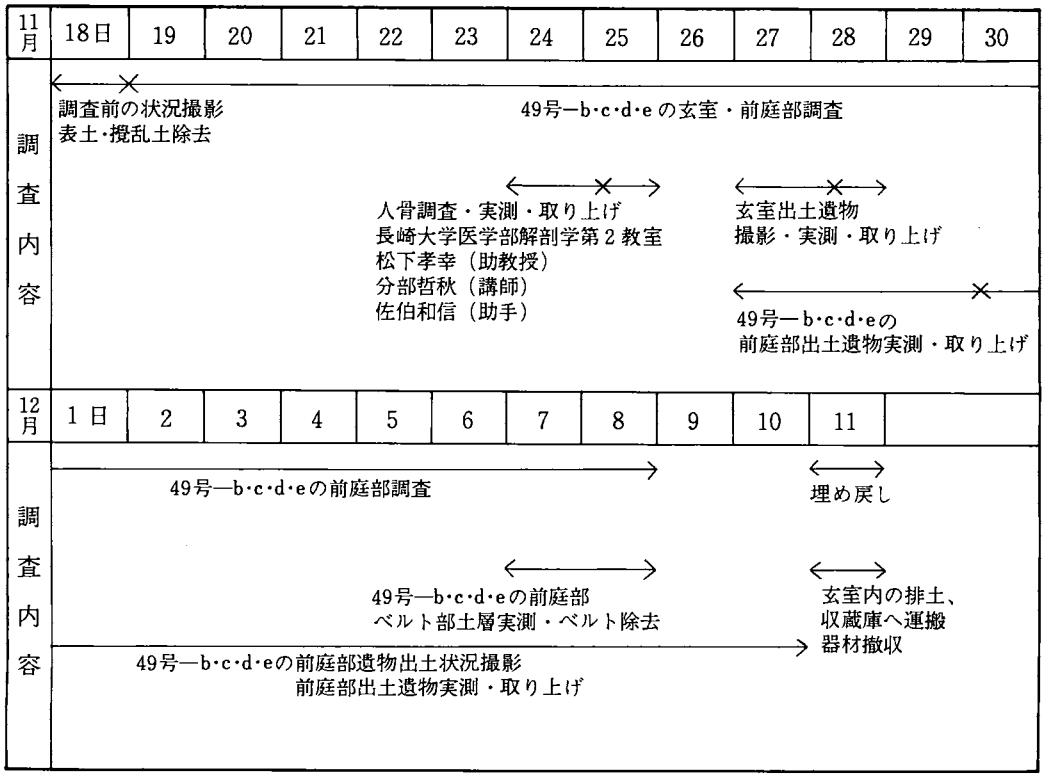
瀬戸口横穴墓群の調査は、昭和62年11月18日から12月11日まで行った。採土工事によって新たに発見された横穴墓は６基であるが、２基については羨道部が埋没し、当面崩壊等の恐れもないため調査対象から除き、開口している４基について調査を実施した。

出土した人骨については、長崎大学医学部解剖学第２教室に調査を依頼し、松下孝幸助教授、分部哲秋講師、佐伯和信助手に調査・原稿執筆をお願いした。

調査終了後、開口していた横穴墓の玄門部を土嚢袋で密閉し、崩壊を防ぐとともに、危険防止策を講じた。

昭和62年度の現地調査の工程は第２表に示したとおりであるが、遺物整理・報告書作成等は昭和63年度に行った。

第２表　瀬戸口横穴墓群調査工程表



Ⅲ　北上原古墳の調査

1．古墳の立地（第2図）

周辺遺跡の概要で述べたとおり、北上原古墳はうてな台地の北西端に位置している。西側は残丘の裾部ぎりぎりが台地の端になり、かなり急な崖となっている。その崖面に瀬戸口横穴墓群が並ぶ。古墳の周辺の台地面はほとんど平坦で、標高は73～74m前後である。西側崖下の木野川左岸の水田面の標高は38～39m前後で、その比高差は約35mほどである。古墳の北側は、約100mで台地の北端となり、崖下には豊水川という小川が東西に流れている。台地北側の斜面もかなりの急斜面である。

台地の西側の周縁部には、雑木や杉、竹などが繁り、現在はあまり眺望がきかないが、木々の間から内田川流域の平野や対峙する御宇田台地等が望め、本来は眺望に優れた立地である。

2．墳　　丘（第3～5図）

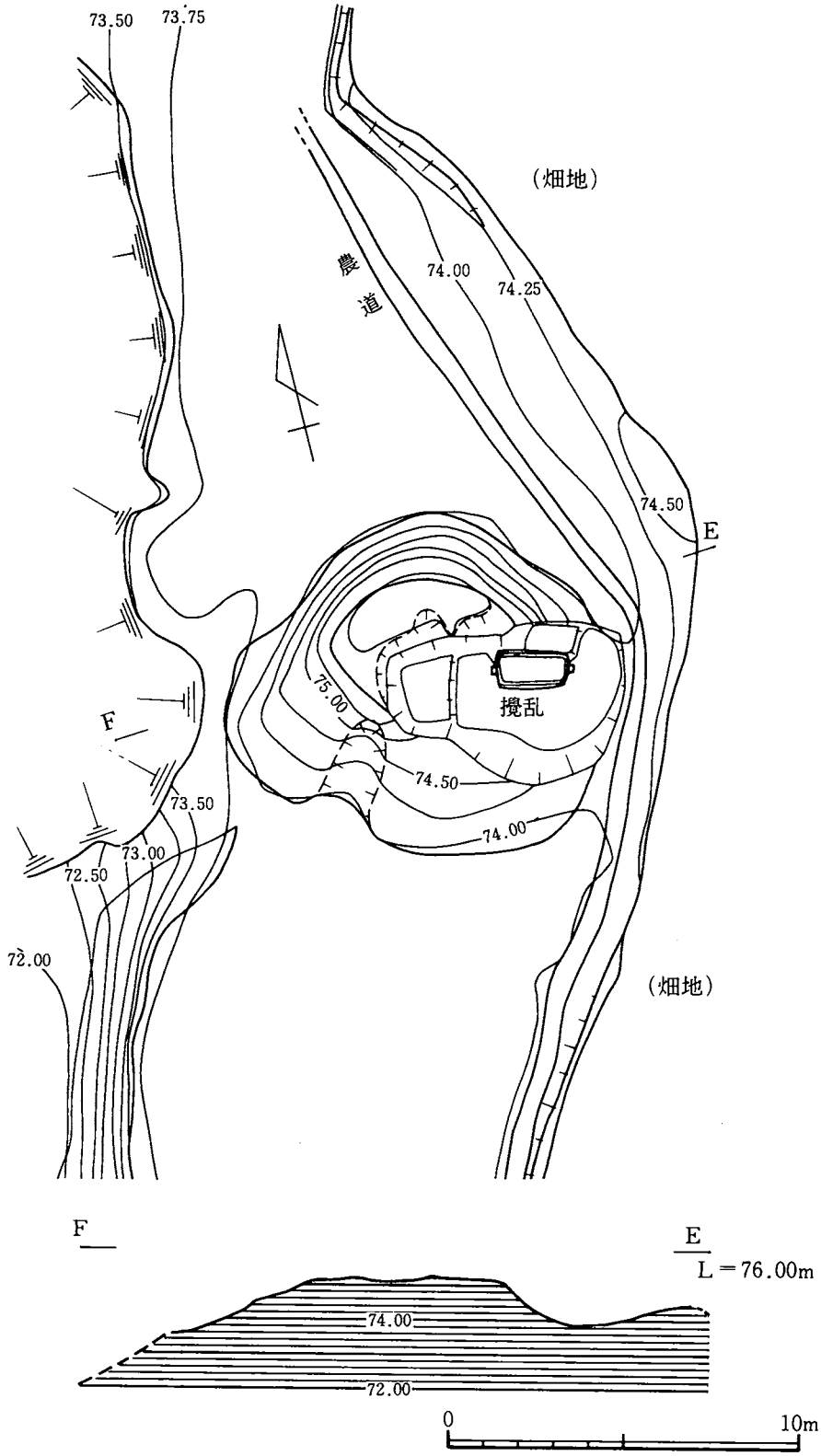
北上原古墳の墳丘は、周辺部の開墾や西側の崖面崩壊により大きく変形し、東西約11m、南北約9.7m、高さ約1.4mの不整な楕円形を呈していた。さらに、工事の際に重機により中心部から東側にかけて掘削を受け、主体部の石棺が露出していた。

墳丘に関する調査は、残丘の南北に調査区を設けて周溝の状況、本来の墳丘規模等の確認、残丘の断面による墳丘築成状況等の確認を行った。

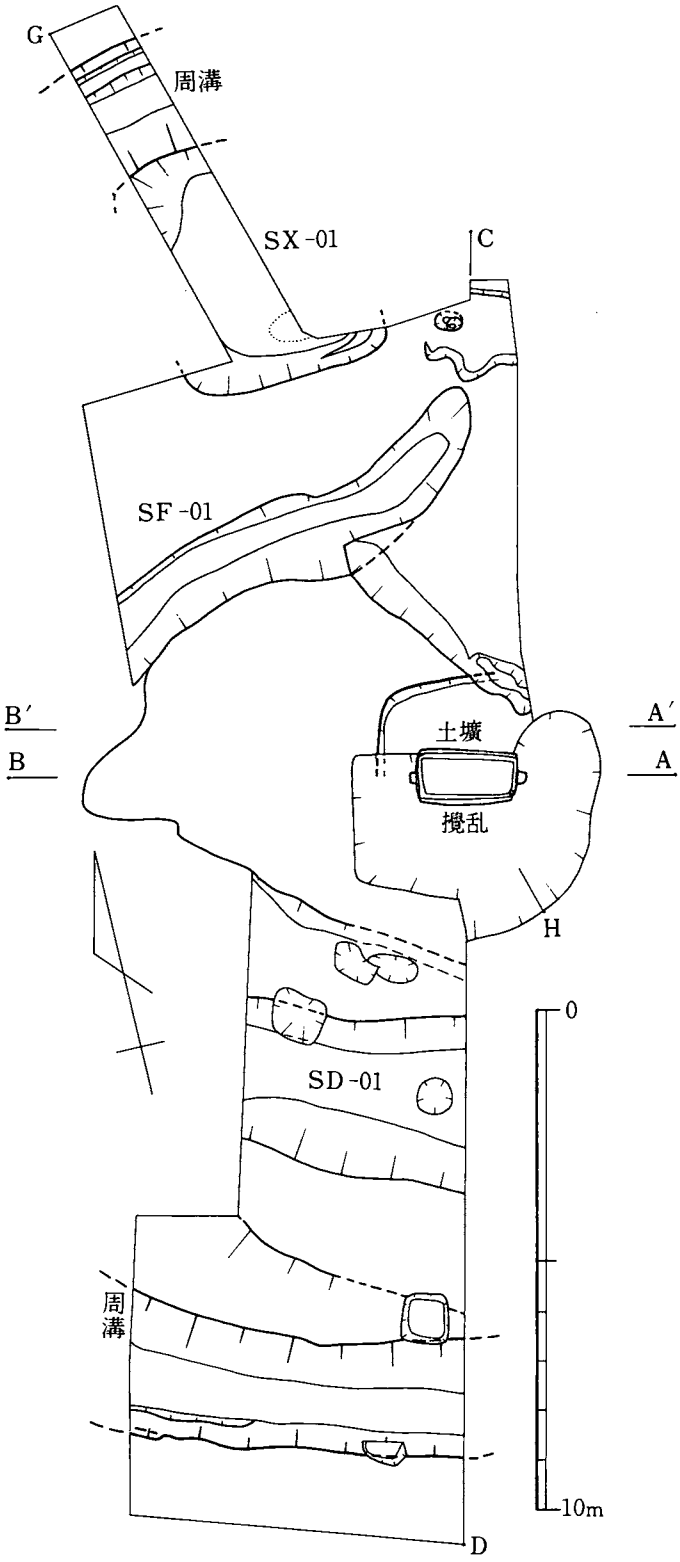
墳丘の北側、南側の調査区でそれぞれ周溝が確認できた。周溝は、北側では排土等の関係で、長さ1.5mの範囲で確認したにすぎない。周溝はＳＸ－01により削平を受けているが、遺存部分で幅約2.5m、深さは約65cmである。内側の法面はやや緩やかな傾斜であるが、外側の法面は2段掘り状になっており、内側に比べると傾斜が強い。周溝内堆積土は北も南も基本的には同一で、最下部には掘削時に堆積した黄褐色土、その上に暗褐色土、黒褐色土の順に堆積している。北側の周溝内からは、土師器の小型壺が1点出土した。

南側の調査区では、長さ約6.7mにわたって周溝を検出した。北側と同様、かなり改変されているが、幅は2.1～2.5m、深さは約80cmである。北側と同様に内側の傾斜は緩やかで、外側の傾斜が急である。周溝内から土師器、砥石が出土した。

墳丘の築成は、基底面の黒色土（黒ニガ）を平坦に整地し、周辺部から中窪みに盛土し、その後中央部を埋め、さらに全体を覆うように盛土している。



第3図　北上原古墳地形図



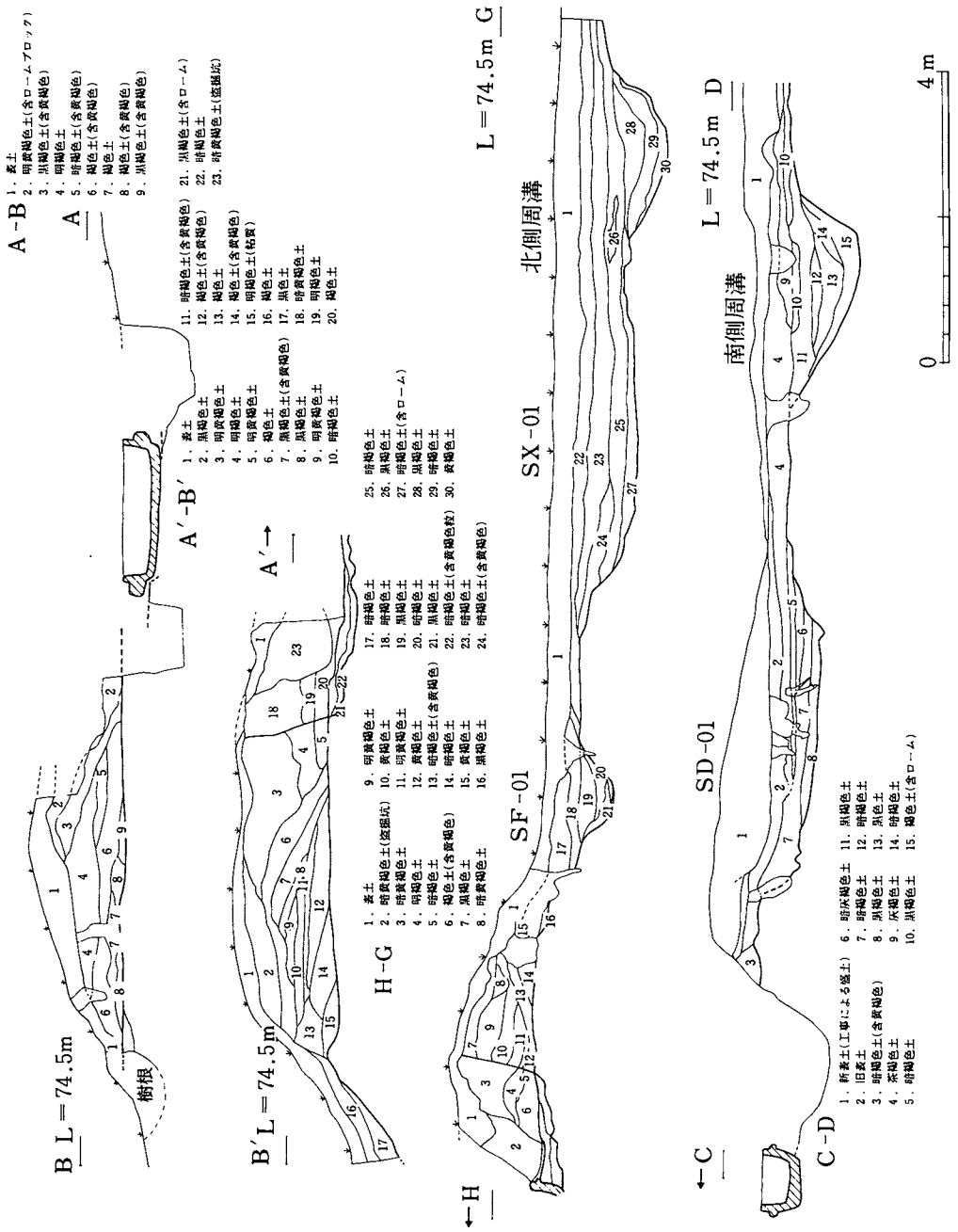
第４図　北上原古墳遺構図

３．主 体 部

（第６・７図）

北上原古墳の主体部は、墳丘に直葬された舟形石棺である。石棺は以前にも盗掘を受けた形跡があり、さらに今回の工事に際して重機によって一部を破壊されていた。

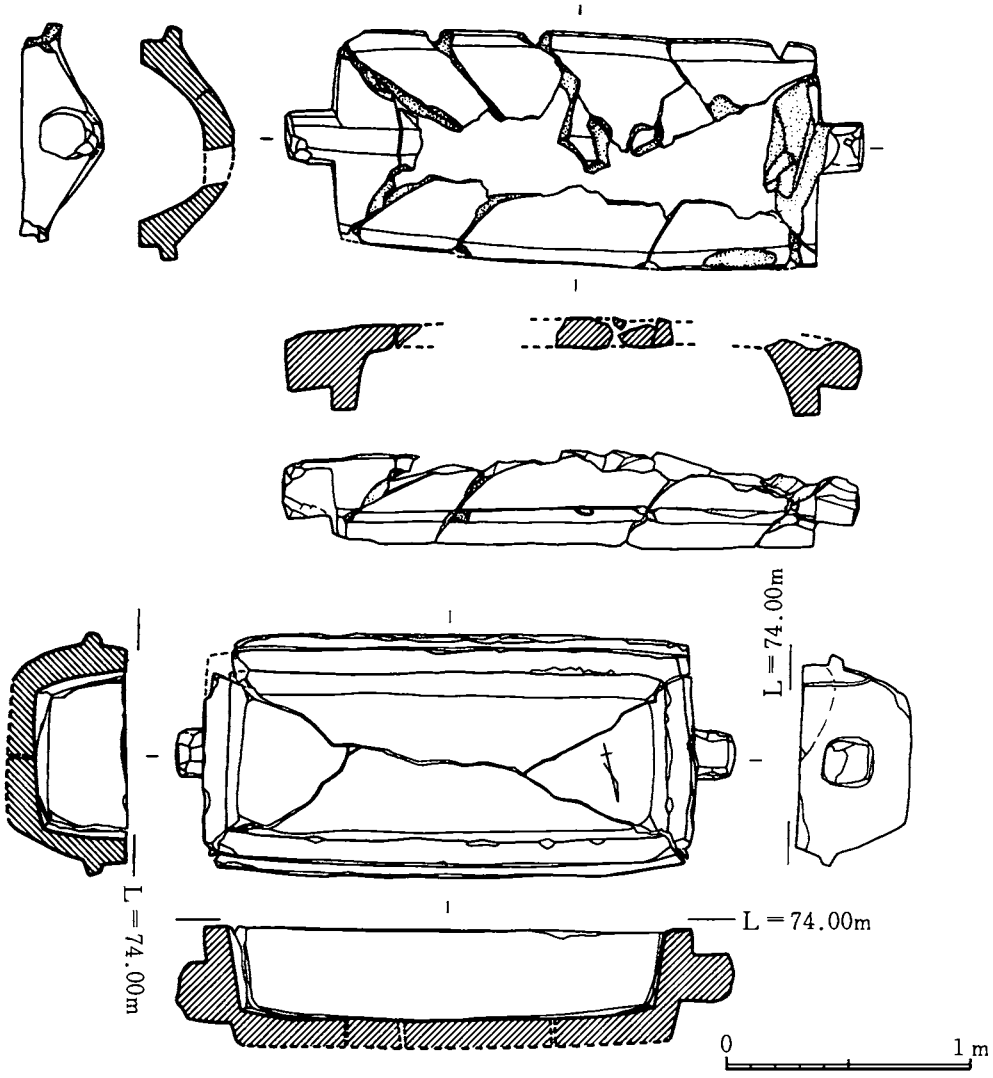
石棺を納める土壙は、工事によりほとんどが破壊されていたが、北西の隅で一部が確認できた（第４図）。土壙の正確な形や規模については不明であるが、遺存部からみて長さ4.6m、幅４m前後の隅丸長方形であったと推定される。墳丘断面で明らかなように、土壙は墳丘を盛土した後で急角度で掘られている。深さは墳丘基底面よりわずかに深い（第５図、図版４）。土壙壁は直線的だが、土壙底は荒掘りで凹凸が多く、中心部（石棺）ほど深く掘られている。石棺の部分もとくに丁寧に掘ったのではなく、適宜土を突き固めながら安定を図っている。その後、棺身の突帯の下あたりまで埋め、突き固められてその面が硬化していた。棺内に赤色顔料を塗る作業はこの段階で行われたもので、硬化面に赤色顔料が点在していた。



第５図　北上原古墳墳丘等断面図

この面は、埋葬直前の作業面である。

棺蓋は破損が著しく、調査に赴いたときには十数片に割れ、工事関係者や地元の人達によって動かされ、原位置を止めているものはない状態であった（図版４）。棺材を集めて復元したところ、小口部と側縁部はほとんど復元が可能であったが、棟の部分は破砕が進み、復元ができなかった。破損面には今回の新しいものもあったが、多くは古いもので、墳丘で確認された盗掘の痕跡と符号する。

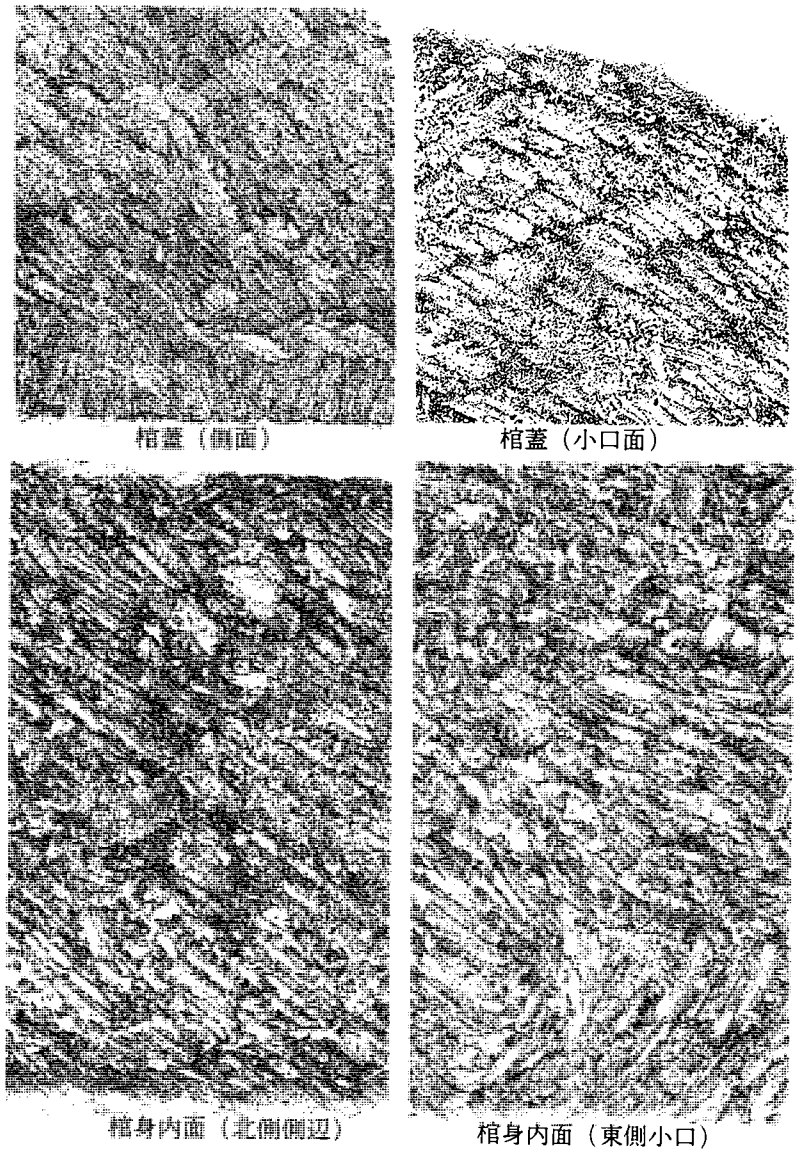


第6図　北上原古墳舟形石棺実測図

棺蓋には小口部にやや大きめの縄掛突起がつき、棟には幅10cm前後の平坦面がある。棟と縄掛突起の上面とはほとんど高低差がなく、小口面は垂直に近い。縄掛突起を含めた全長は約2.4m、幅は88～95cmで西側がやや広い。側辺部には6～8cmの平坦面があり、突帯状をなす。

棺身には大きな亀裂が生じてはいたが、ほぼ原型を止めていた。両小口面に大ぶりの縄掛突起があり、突起を含めた全長は2.3mを測る。突起を除く長さは2.02m、幅は小口部分がやや狭く約90cm、中央部では99cmを測る。高さは小口部では45cm、中央部では48cm前後である。棺の内法は上面で長さ1.8m前後、幅65～68cm、深さ45cm前後を測り、底面は5～10cmほど小さくなる。内部には石枕等はなく、長辺部には突帯があり、底面は平坦に近い。

石材は棺蓋・棺身とも阿蘇溶結凝灰岩であるが、棺身に比べて棺蓋は軟質であり、色もやや白味が強い。棺の内面には蓋・身とも赤色顔料が塗られ、棺の合わせ目は白粘土で固められて



第７図　北上原古墳石棺加工痕拓影

と周溝との間にあり、古墳を破壊している。

北側の調査区では周溝のすぐ内側にＳＸ－01と、残丘の北裾に接してＳＦ－01がある。ＳＸ－01は、長さ約５ｍ、幅４ｍ前後の隅丸長方形の浅い土壙状のもので、底は一部硬化している部分がある。出土遺物はなく、時期等不明であるが、堆積土の状況からみると近世の可能性が強い。

ＳＦ－01は、幅1.5m前後の道路で、西側の斜面から古墳に上り、調査区の東端で終わっている。底面は強く硬化しており、残丘の裾にほぼ接して迂回するような状態で、この遺構の開削時には墳丘がかなり削平されていたと考えられる。ＳＦ－01は、堆積土層の状態から、ＳＸ－01より後で掘られている。ＳＦ－01の堆積土上層から、明治時代と思われる染付磁器（湯呑）

おり、北側の長辺部に粘土が残っていた。

棺の加工痕は基本的に２種類あり、幅1.5cm前後のやや丸味のある工具と、先端の平らな工具がある。前者の加工は平滑で、棺蓋、棺身の棺底以外の内面、突帯より上の外面に見られる。この工具痕は、ほとんどが右下から左上に削られている。後者は棺身の棺底内面、突帯以下の外面の荒加工に見られる。

４．その他の遺構

（第４・５図）

調査区の中で、古墳より後の時代の遺構が検出された。位置的には墳丘の残丘

が出土した。

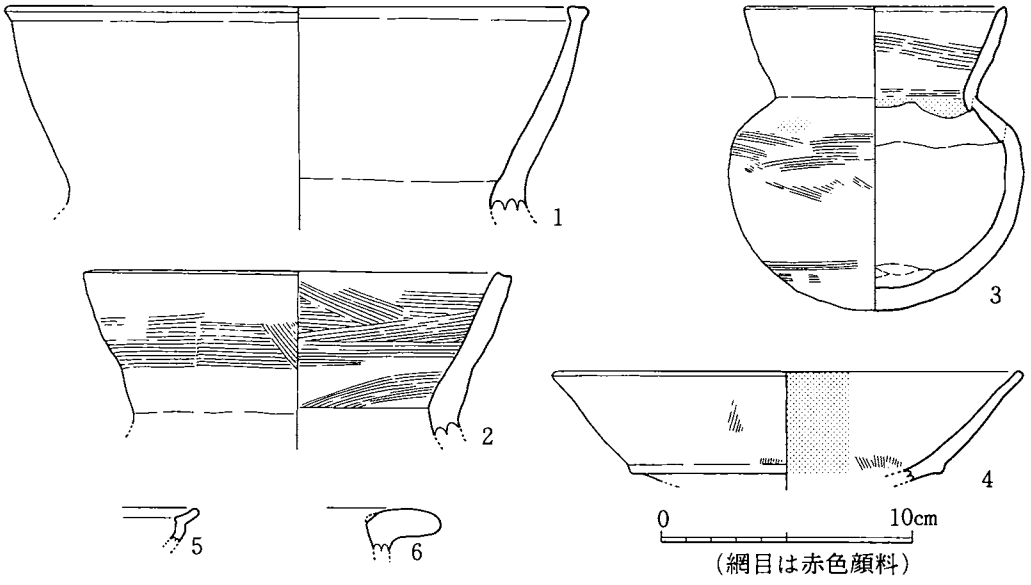
残丘と南側周溝との間もかなり削平等を受けている。遺構としては、溝（ＳＤ－01）とイモ穴があった。ＳＤ－01は、残丘の南裾近くにあり、幅３～４ｍ、深さ50cm前後を測る。遺物の出土がなく、正確な時期等は不明である。

５．出土遺物（第８・９図）

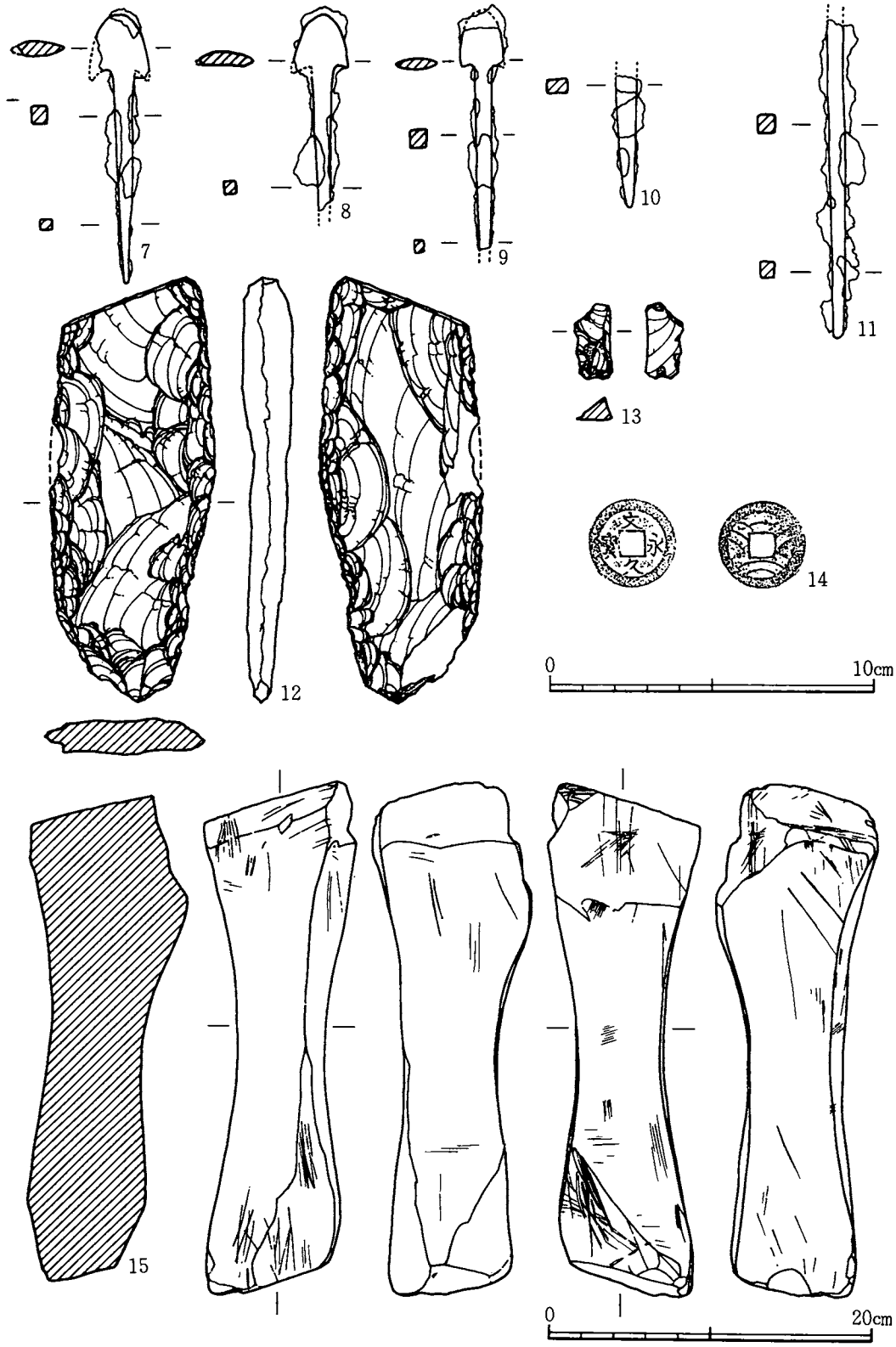
墳丘は大きく削られ、主体部も盗掘を受けており、周溝の調査も限られた範囲で行ったため、出土遺物の量は少ない。出土場所ごとにみると、周溝から出土したもの、主体部から出土したもの、主体部の周辺から出土したもの、墳丘から出土したもの、道路や溝など後世の遺構から出土したものがある。遺物の種別では、縄文土器、土師器、鉄器、銭貨、石器、砥石、青磁、近世陶磁器がある。

古墳に伴う遺物は鉄器、土師器、砥石である。鉄器は11以外は石棺から掻き出された土の中から検出した。本来は棺内に副葬されていたものである(1)が、原位置等は不明である。3点（７～９）はほぼ全形を窺え、両丸造りの心葉形を呈する鉄鏃である。10は茎の端部であろう。11は断面が方形の棒で、墳丘北側の調査区から出土した。出土状態や錆化の状態などから、古墳に伴うものではないと考えられる。

土師器は周溝と主体部の周辺から出土した。１・２は南側の周溝、３は北側の周溝、４は石棺の周辺部からの出土である。１・２とも壺の口縁部である。１は内弯し、口唇部は内外に張りだし、端部は押さえられて平坦である。二次的な熱を受け、変色している。２も内弯気味の



第８図　北上原古墳出土遺物実測図



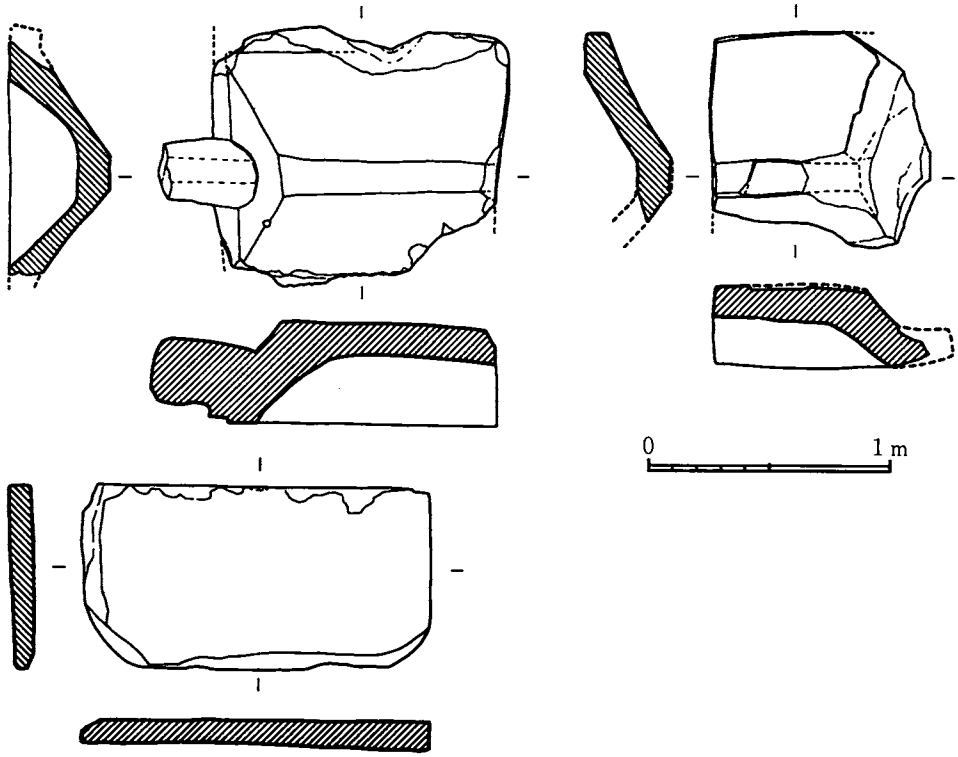
第９図　北上原古墳出土遺物実測図

口縁であるが、1より弯曲度は弱く、口唇部の形態も異なり、厚手である。内外面とも刷毛の上を横ナデしているが、刷毛目も残っている。壺と考えられる胴部、底部の破片が他にも周溝と石棺の周辺部から数点出土している。底部は尖り気味の丸底で、内面調整は刷毛とヘラ削り、外面は刷毛とナデ調整のものが多い。3は、胴部の約3分の1を欠く。口径10.5cm、器高12cmの小型壺で、肩部外面と頸部内面にわずかに赤色顔料が付着しているが、人為的に塗布したような状態ではない。4は、高杯の杯部で、内面に赤色顔料が付着している。3と異なり、意識的に塗られたものである。他に高杯の脚部の小破片も出土している。

砥石（15）は、南側の周溝から出土した。乳白色の天草砥石と呼ばれるもので、長さ32cm、最大幅9cmの大型で、四面ともよく使用されており中央部はかなり磨り減っている。

その他の種類のものは、古墳に伴わない遺物である。5は縄文土器の小破片で、浅鉢の口縁部である。形態からみて、晩期であろう。12・13は5に伴うもので、古墳の周辺部にこの時期の包含層があるものと予測される。6は土師器であるが、口縁部の小破片で詳細は不明であるが、形態からみて7世紀以降のものである。14は墳丘の表土から出土した文久永寶で、幕末に近い文久3年（1863）から慶応元年（1865）に鋳造されたものである。先に述べた馬頭信仰と関係するものであろうか。

他に明代の青磁、近世陶磁器が少量出土している。古墳を破壊している溝、道路などから出土したもので、古墳の破壊が中世・近世を通じて行われたことが窺える。



第10図　山崎古墳３号石棺実測図

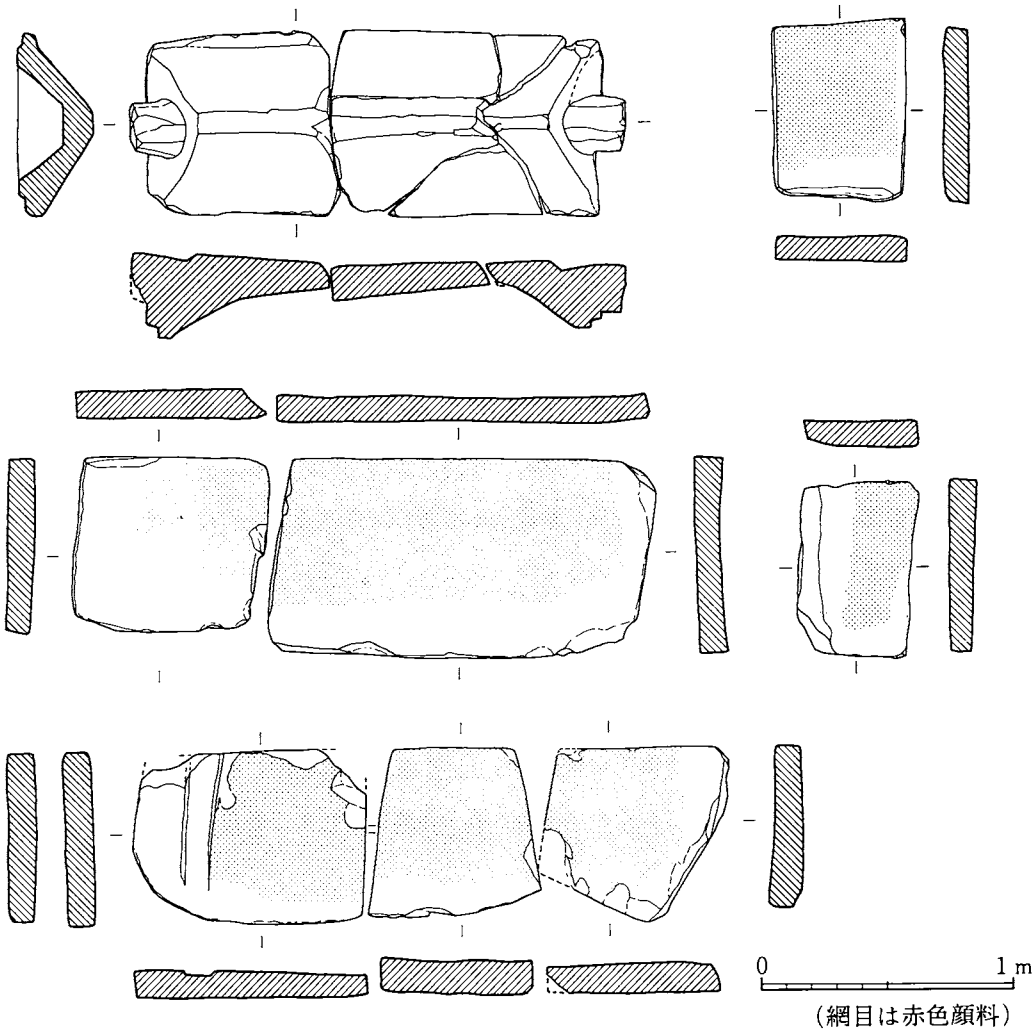
６．付　　編（山崎古墳・上梶迫古墳）

七城町の大久保遺跡や北上原古墳の調査と関連して、近隣に所在する山崎古墳、上梶迫古墳の資料化を行ったので、ここにその概要を収録する。

山崎古墳（第２・10図）

山崎古墳は、台台地の南縁部、山崎の集落の北側（七城町山崎字屋敷）にあり、３基の石棺が知られている。１号石棺（舟形石棺）、２号石棺（箱式石棺）は昭和７年、開墾中に発見されたもので、２尺（約60cm）の間隔で並んでいたという。１号石棺から人骨１体と鉄鏃８本、２号石棺から人骨２体が出土している。両棺とも埋戻されており、棺の詳細な構造等は不明である。３号石棺の発見は１・２号石棺より古く、１・２号石棺の南西約20mの所から道路拡幅に際して出土したという。出土品等は不明である。３号石棺の棺材の一部が、１・２号石棺の出土地点の近くに保存されていたので、1987年４月、松本健郎、坂本重義、黒田裕司で実測図等を作成した。残っている棺材は、棺蓋の部分２片と棺身の板石１枚である。

棺蓋はもともと二つの石材で造られ、小口部に大型の縄掛突起をもつが、一方のものは欠失している。小口面は斜面となる寄棟で、棟には幅15cm前後の平坦面がある。縄掛突起の残る石



第11図　上梶迫石棺実測図

材には小口、長側辺とも周縁部に平坦面があり、下面にも僅かに段があるが、他の石材にはない。棺身の石材は、長さ1.43m、幅75cm前後で、石材はいずれも阿蘇溶結凝灰岩である。棺蓋の裏側や棺身の一部に、赤色顔料が残っている。

上梶迫古墳（第２・11図）

菊池川左岸、花房台地の北縁部の丘陵上（七城町亀尾字上梶迫）に位置する。1986年10月、個人の採土工事中に発見されたもので、七城町教育委員会からの連絡で松本健郎が現地を踏査した時には棺材が掘起こされ、一カ所に寄集められていた。棺身の板石は保存が良かったが、棺蓋は幾つかに割れていた。七城町教育委員会と協議し、発見者から遺跡発見届を提出し、後日調査を行うまで現状を保存してもらうよう依頼した。

1987年４月、近くの大久保遺跡の調査が終了した後、松本健郎、園村辰実、坂本重義、黒田

裕司が簡単な調査を行い、石棺の復元図化等を行った。

石棺の出土地点は、花房台地の北縁部に東から西に延びる小丘陵の先端部である。採土により旧微地形や墳丘については不明であるが、以前は小規模な墳丘が存在したようである(2)。

石棺は家形石棺である。棺蓋は数片に割れていたが、比較的簡単に復元することができた。もともと二つの石材で造られ、短い方の部分はほぼ原形を止めていた。小口部の両端には大型の縄掛突起があり、小口部は傾斜して寄棟である。棟には幅10cm前後の平坦面がある。長側辺の縁にはわずかに平坦面があるが、明瞭ではない。復元した全長は約２ｍで、二つの蓋の比率は１：1.5である。蓋の内面には、全面に赤色顔料が塗られている。

棺身は計７枚の切石で、部分的な破損はあるがほぼ原形を止めていた。形状、規模、赤色顔料の状態等から原形を復元した。第11図のうち、中段の左端と下段の右端とは入れ替わる可能性もある。復元での内法は長さ約1.95m、幅約50cmである。長側辺の１枚には接合の溝を設けているが、他にはない。出土遺物は、何もなかったということである。

この家形石棺の出土地点から約20m南側に、石材が２カ所に積んである。石材の横に１ｍほどの板碑があり、「文政十二年丑　十月二十四日」とある。他に銘文はないが、古墳を破壊し、それを祀ったものであろう。破壊された古墳は、残された石材からみると横穴式石室である。以上のように、上梶迫古墳は、２基の古墳からなり、１基は家形石棺、他の１基は横穴式石室である。２基とも新発見の古墳で、この地域の古墳を理解するうえで新たな知見を加えたことになる。

7．小　　結

北上原古墳は、墳丘、主体部とも大きく破壊を受け、石棺の棺身を除いてほとんど原形を止めていなかったが、調査の結果、周溝の検出、墳丘盛土の状況、石棺を納める土壙等の状況を知ることができた。また、主体部と周溝から少量ではあるが遺物を検出することができた。

周溝は残丘の北と南とで確認した。北側も南側も後世の削平等を受けており、本来の形状、規模ではないが、周溝は幅２～2.5mを測る。検出した周溝から本来の墳丘規模を復元すると、直径約24mとなる。この場合、円の中心は、石棺の中心部ではなく、中心部から約１m北側にずれている。

残丘の高さは約1.4mであった。墳丘の元の高さを知る手掛りはないが、石棺の位置が完全には盛土内になく、土壙底は墳丘基底面より深く掘られていたことから、３mを大きく越えるものではなかったと推定される。

墳丘築成と石棺埋葬等の関係は、墳丘断面のA′－B′、G－H等の観察から次の順序が想定される。古墳予定地の表土等を除去し、墳丘基底面をほぼ平坦に整地し、古墳の中央部を除いて同心円状に盛土を行う。この段階では、盛土は古墳の中央部と墳裾部とに向かって両方に傾斜する。盛土はやや厚みがあり、丁寧な版築ではない。その後、中央部の窪地を水平に埋めている。この埋め方は、第１段階の盛土よりさらに厚みがあり、上部ほど急激に埋めている。この後、全体を覆うように仕上げの盛土を行っている。

墳丘を築いた後、中央部に石棺を納める隅丸長方形の土壙を急角度（約75度）で掘っている。掘った土壙に石棺を据え、棺身の突帯の部分まで土を埋め、その面を固めている。石棺に顔料を塗る作業はこの段階で行っており、硬い面の上面に赤色顔料が飛散していた。この作業は、遺体の埋葬直前に行われたものであろう。埋葬し、蓋をした石棺の周辺で埋葬に伴う儀礼を行ったらしく、原位置等は不明であったが石棺周辺から土師器の高杯と壺の破片が出土した。最後に、土壙を水平な埋め土で埋め戻している。

刳抜式の石棺は相当な重量で、石棺を据えた後に盛土をするのが合理的であるが、土壙等の断面観察により、盛土をした後で土壙を掘り、石棺を据付けている。

石棺は、所謂家形棺蓋の舟形石棺で、棺蓋・棺身とも刳抜式である。棺蓋・棺身の小口面に大型の縄掛突起をもち、棺身底部は平坦である。

石枕や人骨の出土がなく、埋葬者についての具体的な手掛りはない。

古墳の年代については、石棺の形態、出土した土器及び鉄器により推定することができる。石棺の形態についてはすでに述べたが、家形棺蓋、棺身の平底化、棺の長さに対する幅の増大（棺身の縄掛突起を除いた比率は約１（幅）：２（長））を特徴とする。出土した土器、鉄器（鉄鏃）の特徴とも考え合わせ、古墳の年代を５世紀の中葉前後に比定しておきたい[3]。

同じうてな台地の西部に位置するうてな遺跡は、弥生時代後期～古墳時代前期の大規模な環濠集落であるが、時代的には北上原古墳に先行する。この環濠集落に後続する古墳と同時代の集落は、台地上では未発見であるがおそらく台地の西方の一画に存在するものであろう。

註（１）　棺内の土などは発見時にほとんど外に掻きだされていたが、幸い一ヵ所に集めてあり、赤色顔料の着色により他と区別することができた。

（２）　1986年２月、文化課の島津義昭が現地を踏査した時には、小規模な墳丘（円墳）が認められたという。

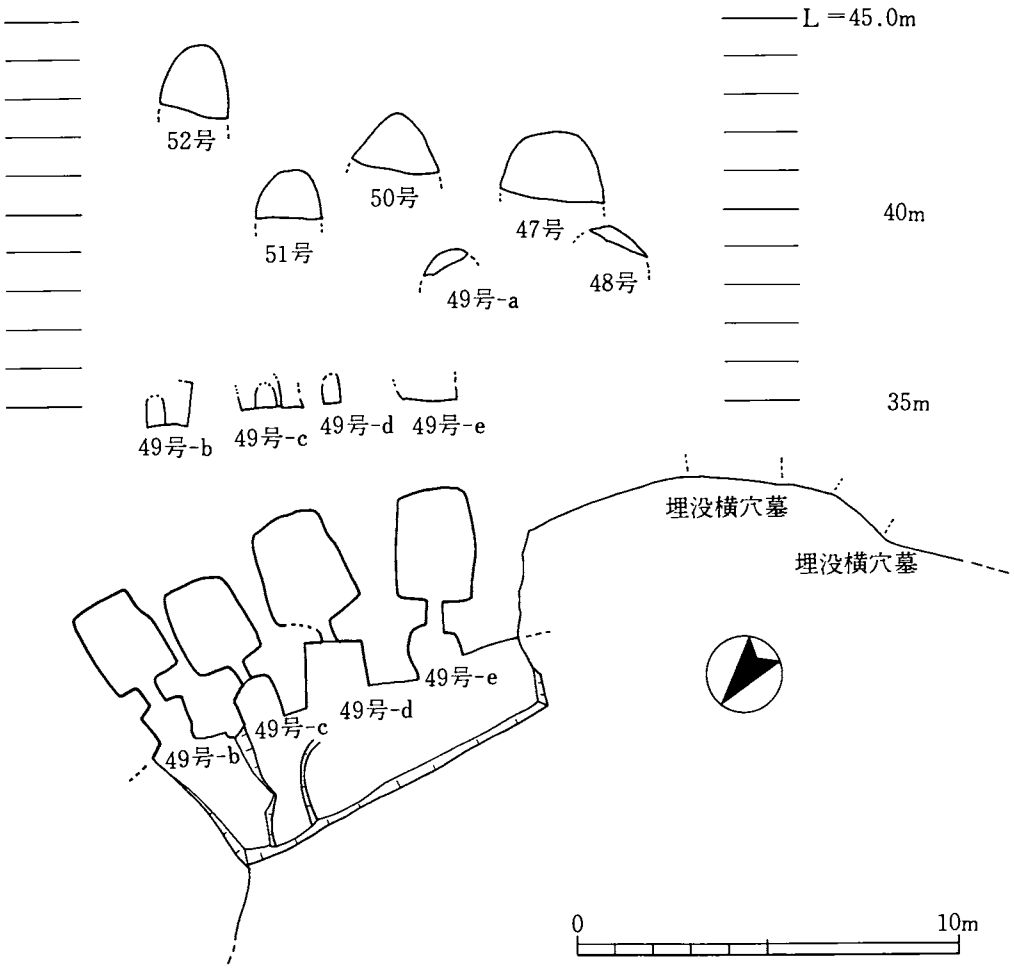
（３）　舟形石棺の形態変遷（編年）については、いくつかの研究があるが、それらを要約すると５世紀の中葉を境にして棺の長さと幅の比率、棺底の形状、突帯・石枕の有無等に大きな変化がある。北上原古墳の石棺をこの変化に照らすと、棺身底の平底化、石枕の消失、幅の増大化など、新しい要素が多いが、突帯は残り、新旧の要素を備えている。

Ⅳ　瀬戸口横穴墓群の調査

1．調査対象横穴墓の概要（第12図）

今回の調査は、採土工事中、新たに発見された4基の横穴墓を対象にした。前庭部については、前庭部全面でなく、採土箇所に限って調査した。新発見の4基の横穴墓より約5ｍ南東側の地点に、完全に埋まった状態の横穴墓が2基あるが、今回は調査を行わなかった（第12図－埋没横穴墓）。

横穴墓玄室内の壁・天井部分が崩壊したものを除いて、横穴墓玄室内の排土については、熊



第12図　横穴墓配置図

本県文化財収蔵庫にもちかえり、水洗を行った。水洗による検出遺物は、丸玉だけである。

調査を行った横穴墓の号数については、以前の基数確認調査の際、横穴墓に付した号数に枝番号を付けることにした。調査した４基の横穴墓に最も近く斜め上方にある横穴墓は、以前の基数確認調査の時に、49号としてある。それで、今回の調査では、この横穴墓を49号－ａとした。調査した４基の横穴墓ついては、東側より49号－ｂ・49号－ｃ・49号－ｄ・49号－ｅの号数を付した。

49号－ｂ・49号－ｃ・49号－ｄ・49号－ｅ横穴墓は、標高約34～35ｍの高さにあり、49号－ｂ横穴墓は他の横穴墓より僅かに低く、49号－ｂ以外の横穴墓はほぼ一直線に並ぶ。48号・49号－ａ横穴墓は、標高約38ｍの所にあり、47・50・51号横穴墓は、標高約40～41ｍの高さに位置する。52号横穴墓は、標高約42ｍの所に占地している。47～52号横穴墓の分布で見る限り、瀬戸口横穴墓群は、４段の垂直分布になる(1)。

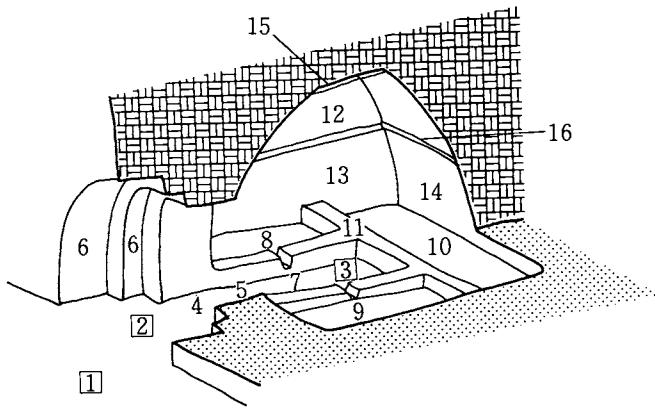
最下段にある横穴墓の平面分布を見ると、49号－ｂ・49号－ｃ・49号－ｄ・49号－ｅ横穴墓と２基の埋没横穴墓は、それぞれ１小群を形成している(2)。

註（１）　４段の垂直分布は、現状での横穴墓分布である。埋もれている横穴墓が存在する可能性があり、垂直分布の段数が増えるかもしれない。

（２）　49号－ｅ横穴墓と埋没横穴墓との間に破壊された横穴墓が存在したかもしれない。また、49号－ｂ横穴墓の東側にも埋もれている横穴墓が存在する可能性がある。

（１）　横穴墓の部分名称について（第13図）

これから報告する横穴墓の部分名称については、第13図に示す通りである。ここでは、分かりにくい横穴墓の部分名称だけについて説明する。



1．前庭部　9．右屍床
2．羨道　10．奥屍床
3．玄室　11．仕切
4．羨門　12．天井部
5．玄門　13．左側壁
6．飾縁　14．奥壁
7．通路　15．棟線
8．左屍床　16．軒先線

第13図　横穴墓の部分名称説明図

羨門の外に造られた階段状を呈する門が飾縁である。玄室内は、仕切によって「コ」の字形に三区分してある。その三区分してある屍床については、羨門から玄室に向かって左側にあるものを左屍床、右側にあるものを右屍床、奥にあるものを奥屍床とする。壁については、屍床と同様に、羨門から玄室に向かって左側にある壁を左側壁、右側にある壁を右側壁、奥にある壁を奥壁と呼ぶ。左右側壁と奥壁の上方にあるものが天井部である。

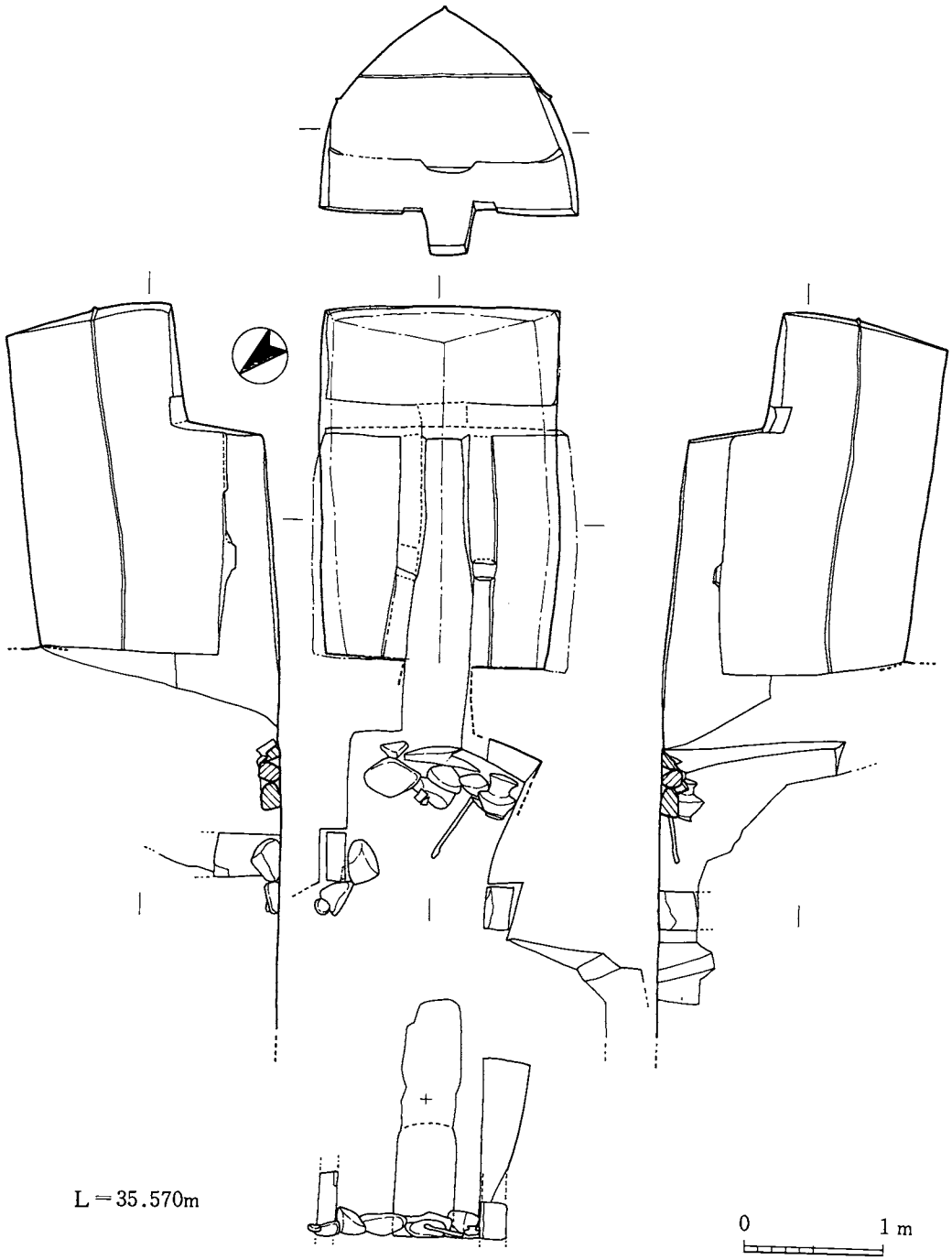
2．49号－b横穴墓（第14・15図）

〔構造〕　49号－b横穴墓は、玄門から飾縁にかけての上半分が破損している。玄室の平面形は、ほぼ長方形である（約2.5×1.7m）。玄室内は、仕切によって三区分され、三つの屍床は、ほぼ長方形を呈する。奥屍床は約1.68×0.68m、左屍床は約1.58×0.58m、右屍床は約1.64×0.58mを測る。左右屍床の大きさと比較すると、奥屍床は僅かに長く広い。しかも、奥屍床は左右屍床より一段高めの所にある。左右屍床は通路より一段高い場所に設けられる。奥屍床の仕切の稜は不明瞭であるが、仕切のほぼ中央部に断面形がU字形を呈する排水溝が造られている。左右屍床の排水溝は、断面形がU字形を呈するように、屍床の中央からやや羨門よりの所の仕切を加工してある。

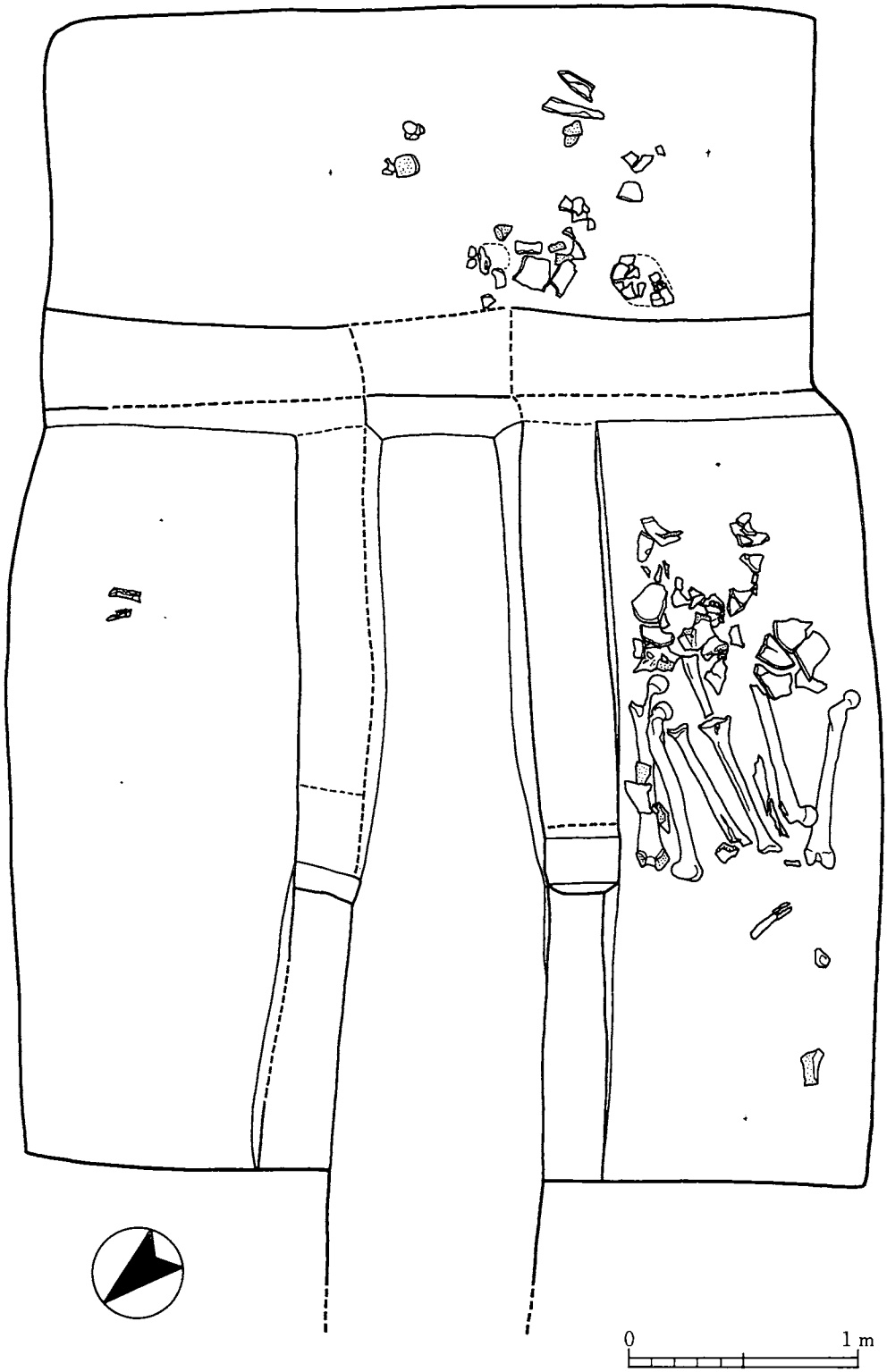
天井部は、断面形がV字形を呈する凹線によって、棟線・軒先線・棟から軒先へのびる線を明瞭に表現してあり、家形（切妻形）を呈する。軒先線より下部の左右側壁・奥壁は、ほぼ直線的にのび僅かに内傾する。天井部は奥屍床中央の上部が最も高く、玄門上部に向かって緩やかに低くなる。天井部の高さは、奥屍床中央の上部で屍床面より約1.2m、通路中央部の上部で通路面より約1.8mを測る。

49号－b横穴墓の飾縁は、他の横穴墓にない構造をもつ。左右飾縁の前面部が刳り込まれ、その部分に加工した凝灰岩の角柱が据えられる。角柱の正面形は長方形で、左右角柱の残存部は、それぞれ約0.34×0.15m、約0.31×0.19mを測る。凝灰岩の角柱は硬質で、横穴墓が穿たれている凝灰岩とは石質が異なり、別地点の凝灰岩を使用している。凝灰岩の角柱は大部分を欠失し、その石材が周囲に散在する。調査した4基の横穴墓の南西方向にある2基の埋没横穴墓のうち、東側の横穴墓の飾縁部分には、二本の角柱が据えられ、その上部に角柱が載せられていた痕跡（スタンプ）がある。この痕跡と散在する石材の量より判断すると、49号－b横穴墓の飾縁前面には、二本の角柱が立てられ、その上部にもう一本の角柱が載せられていたと思われる。閉塞状況は、長方形の凝灰岩の切り石を羨門部に立て、その前面に安山岩の礫を置き、間隙を粘土で密閉している。

〔埋葬人骨〕　埋葬人骨は奥屍床に1体、右屍床に2体、左屍床に四肢骨片を検出した。埋葬人骨の詳細についてはVを参照願いたい。



第14図　49号-b 横穴墓実測図



第15図　49号-b 横穴墓内人骨検出状況実測図

〔出土遺物〕

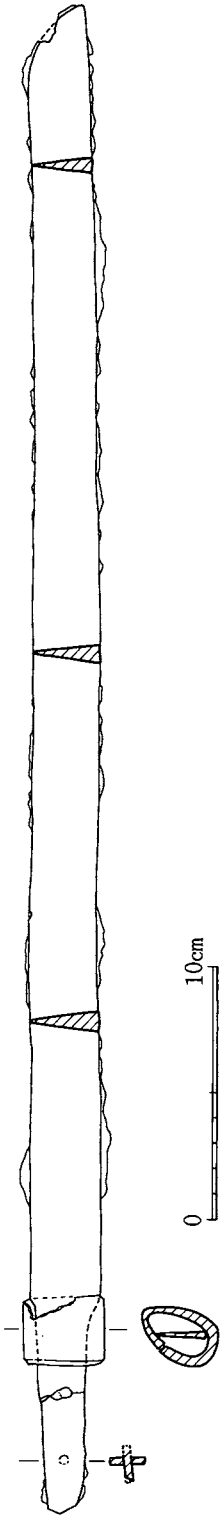
貝輪（第16図）　貝輪は奥屍床で検出された。しかし、発見時に貝輪が動かされているため、奥屍床内での貝輪の出土位置は不明である。貝輪はイモガイを横切りにしたもので、ほぼ円形を呈する。貝輪の径は約5.5cm（内径約５cm）を測る。貝輪はかなり風化が進んでおり、部分的に欠損している。

直刀（第17図）　直刀は羨門部の閉塞石の前面で、羨道の側壁とほぼ並列に横位の状態で検出された。直刀が検出されたのは、羨道部・前庭部層位のⅡ層である。

直刀は平造り平棟で、ふくらんだ鋒の一部を欠くが、ほぼ完形である。全長約59.8cm、刃部長約51cm、刃部幅約2.3～2.9cm、茎部長約8.8cm、茎部幅約1.5～1.9cmを測る。関は刃関・棟関を浅く斜めに切り込んだ両関である。茎には目釘孔(径約0.3～0.4cm)が二つあり、茎先側にある目釘孔には、目釘が残る。鞘口金具は一部を欠き、下端部に割れ目がある。鞘口金具は断面形が倒卵形を呈し、ずれた位置で刀身と錆化して固着する。鞘口金具の表面には金箔を被せた痕が部分的にある。

長頸壺（第18図）　長頸壺は、羨道の右側壁と羨門から羨道右側壁へのびる壁とがほぼ直角に交わる箇所の前面で、右側壁と密接して、つぶれた状態で出土した。出土状態から判断すると、長頸壺は、据えてあったものが横倒しになったと思われる。長頸壺が出土したのは、羨道部・前庭部層位のⅡ層であり、直刀よりも約６～７cm上位である。長頸壺は口径約23.2cm、器高約30.5cm、高台径約18.3cm、高台高約0.6～1.2cmを測る。最大径は肩部と体部の境にあり、約29.3cmを測る。口縁部は短く外反しながら立ち、口縁内側端部が外側端部より、やや低くなる。口唇部直下の外器面には、二条の凸帯が巡り、凸帯下部より強く外反する頸部につづく。直線的にのびる肩部は、その中位に

第16図　貝輪（原寸）

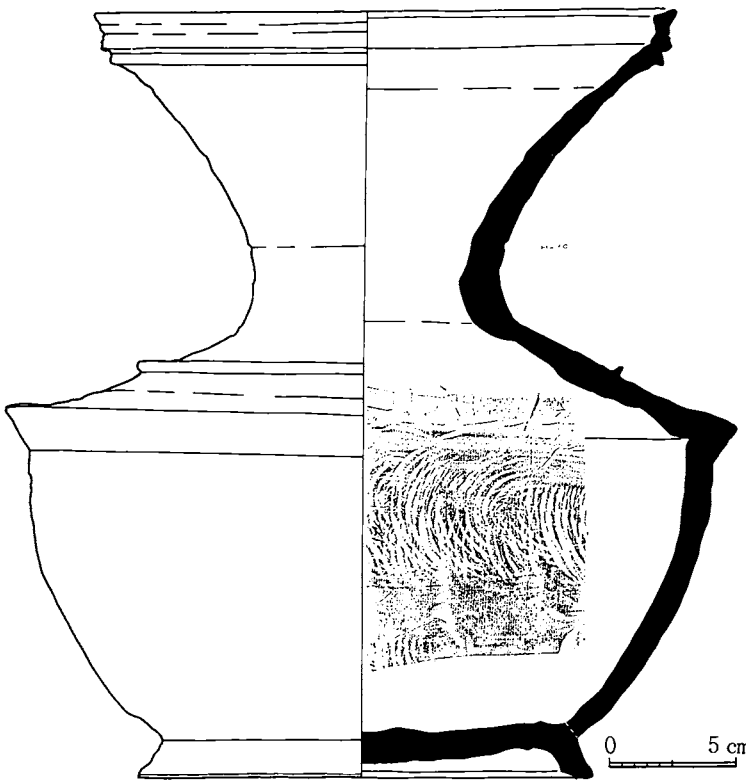


第17図　直刀実測図

一条巡る凸帯をもち、丸みをもちながら外反する体部と外方に突出する鋭い稜を形成する。高台部はハの字形に外方に開き、端部は斜めになり外側で接地する。

体部内器面は、同心円タタキを施した後にナデ消しを行う。体部上半部のナデ消しは、雑であり、体部下半部のナデ消しは、丁寧である。体部内器面以外は、丁寧な横ナデ調整を施す。

胎土は混入物が殆どなく、密である。色調は内外器面とも白灰色を呈し、体部下半部の一部に自然釉がかかる。焼成は良好である。



第18図　須恵器実測図

3．49号－c横穴墓（第19・20図）

〔構造〕　49号－c横穴墓は、玄室内に装飾がある（Ⅳ-8参照）。この横穴墓は、玄門上部から飾縁にかけての3分の2以上が欠損している。49号－c横穴墓は、49号－b横穴墓に類似した構造をもつ。玄室の平面形は、ほぼ長方形で約2.3×1.7～1.94mを測り、玄門部側の玄室幅がやや広い。玄室内には、仕切によって区分されたほぼ長方形を呈する三つの屍床がある。奥屍床は約1.7×0.7m、左屍床は約1.3～1.4×0.6m、右屍床は約1.4×0.5mを測る。各屍床の大きさは、奥屍床が最大で、左屍床、右屍床の順に小さくなる。奥屍床は左右屍床より、左右屍床は通路より一段高い場所に設けられる。奥屍床の右側仕切は不明瞭である。

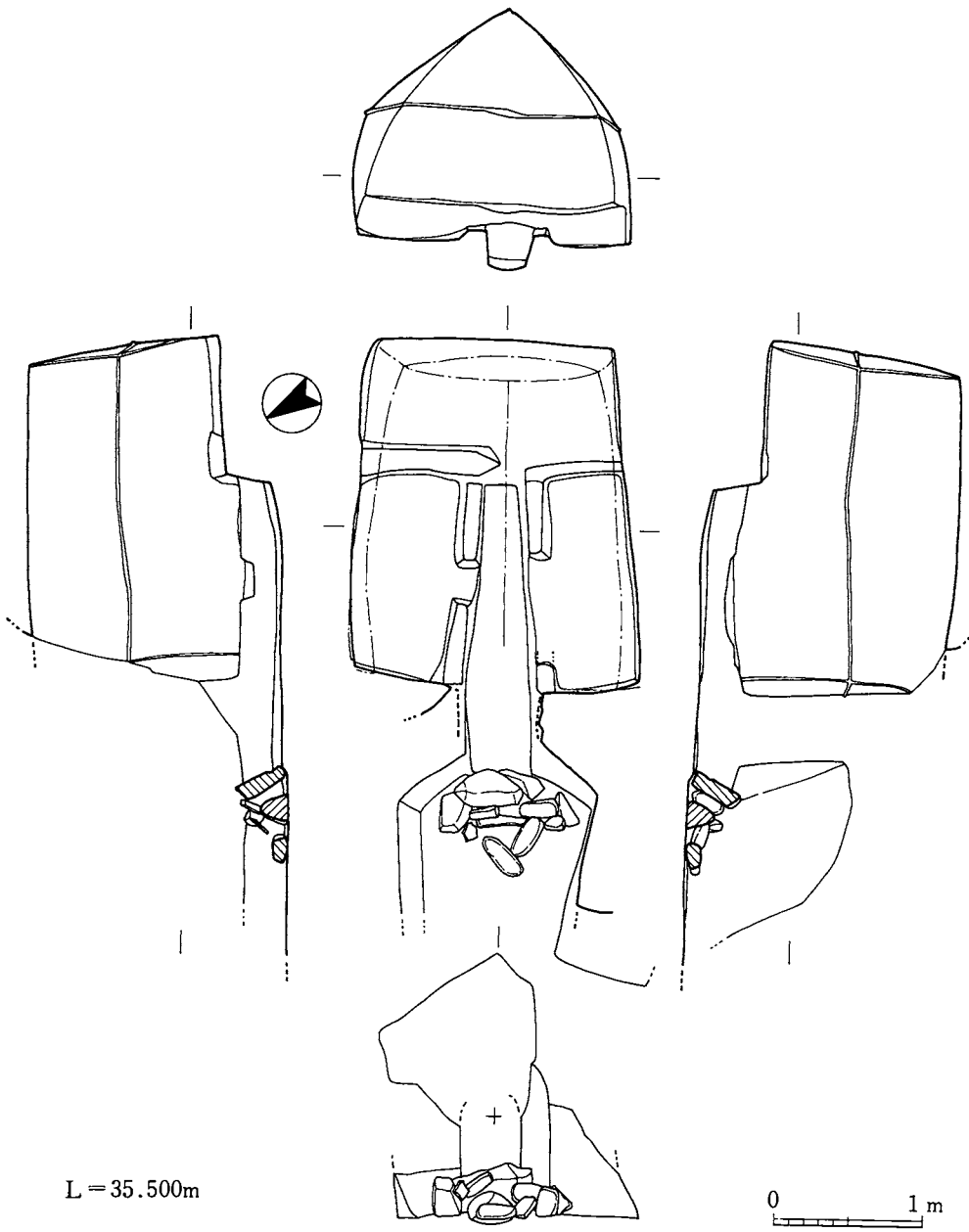
左屍床の排水溝は、断面形がU字形を呈するように、仕切のほぼ中央部を加工してある。右屍床の排水溝は、玄門よりの仕切が途中で消失しているため、不明である。

天井部は、V字形の断面形をもつ凹線によって、棟線・軒先線・棟から軒先へのびる線を明確に表現してあり、切妻形の家形になる。玄門部上部の棟から軒先へのびる線は、欠損している。軒先線より下部の左右壁・奥壁は、緩やかに内傾する。天井部は奥屍床上部から玄門部上

部まで、ほぼ水平にのびる。天井部の高さは、奥屍床中央の上部で屍床面より約1.3mを測る。羨道部は前面と上半分を失う。羨道部の右側壁は玄室の主軸寄りに造られる。

閉塞は羨門部閉塞である。閉塞状況は、凝灰岩の切り石を羨門部に立て、その前面に安山岩の礫を配置し、間隙を粘土で埋めている。凝灰岩の切り石は長方形を呈すると思われる。

〔埋葬人骨〕　埋葬人骨は奥屍床に5体（幼小児3体・成人2体）、左屍床に1体を検出した。



第19図　49号-c 横穴墓実測図

第20図　49号-c 横穴墓内人骨検出状況実測図

奥屍床のものは、散在状態である。埋葬人骨の詳細についてはⅤを参照願いたい。

〔**出土遺物**〕　玄室内での遺物は、検出されなかった。

4．49号－ｄ横穴墓（第21図）

〔**構造**〕　49号－ｄ横穴墓は、玄門上部から羨道部にかけての大半を欠損している。羨門と玄門の間は、通路の床面のみを残す。玄室の平面形は台形状を呈し、玄室の長さ約2.9ｍ、玄室の幅約1.84～2.26ｍを測る。玄室の幅は、玄門側が最も広く、奥壁に向かうほど徐々に狭くなる。

玄室内は、仕切によって奥屍床・左屍床・右屍床の三つに区分される。左右屍床は通路床面より、奥屍床は左右屍床より一段高い位置にある。三つの屍床は、ほぼ長方形を呈し、奥屍床約1.9×0.88～0.98ｍ、左屍床約1.51×0.68～0.81ｍ、右屍床約1.52～1.62×0.63～0.75ｍを測る。左右屍床はほぼ同じ大きさであるが、奥屍床は左右屍床より少し大きい。

奥屍床・左屍床・右屍床には、仕切を加工した排水溝がそれぞれ設けられる。排水溝は、Ｕ字形の断面形をもち、奥屍床が仕切のほぼ中央、左右屍床が仕切の中央よりやや奥屍床寄りに位置する。

奥壁は直線的に内傾しながら立ち上がり、左右側壁は中程でふくらみをもち全体的に丸く立ち上がる。奥壁・左右側壁と天井部との境は、軒先線・棟線がないため不明瞭であり角ばらない。

縦断面形で見る天井部は、奥屍床上部（屍床床面より約1.18ｍを測る。）で最も高く通路中央付近の上部まで僅かに低くなりながらほぼ直線的にのびる。通路中央付近の上部から玄門上部までの天井部は、外に丸くなりながら傾斜する。

横断面形での天井部は、通路上部で最も高く、左右側壁に向かって丸く緩やかに低くなる。屍床床面より上部の玄室横断面形は、蒲鉾形に類似する。

玄室の四隅には、床面から壁と天井部の境まで凹線がのびる。凹線は浅く弱い線であり、49号－ｂ・ｃ横穴墓のような断面形がＶ字状を呈したものではない。

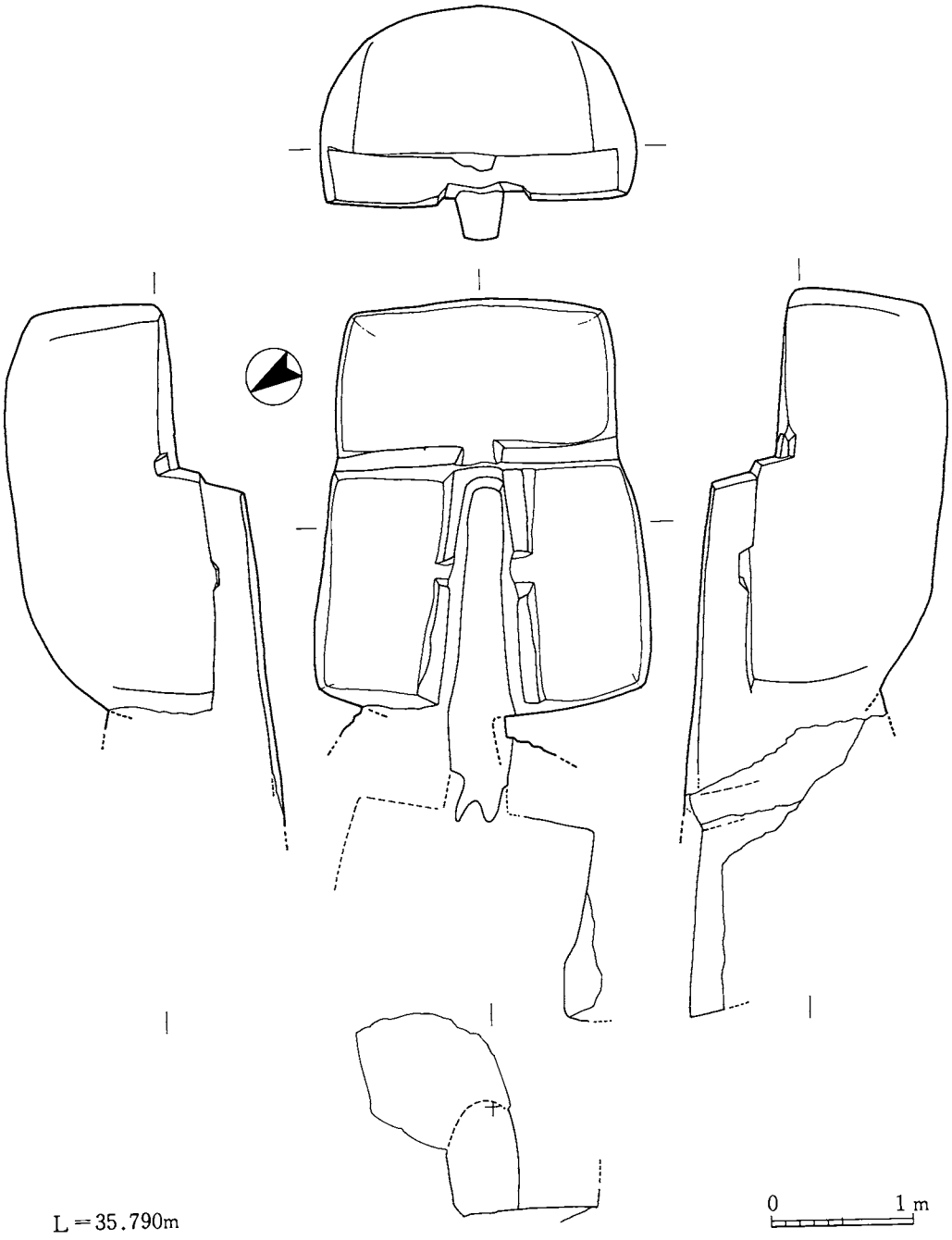
羨道部は、右側壁・奥壁の底面の一部が残存する。残存部より判断すると、羨道部の主軸は、玄室の主軸より少し東側に振れる。

閉塞の詳細な状況は不明である。ただ、凝灰岩の切り石が調査地の周辺に散在することより、凝灰岩の切り石を用いた閉塞であったと思われる。

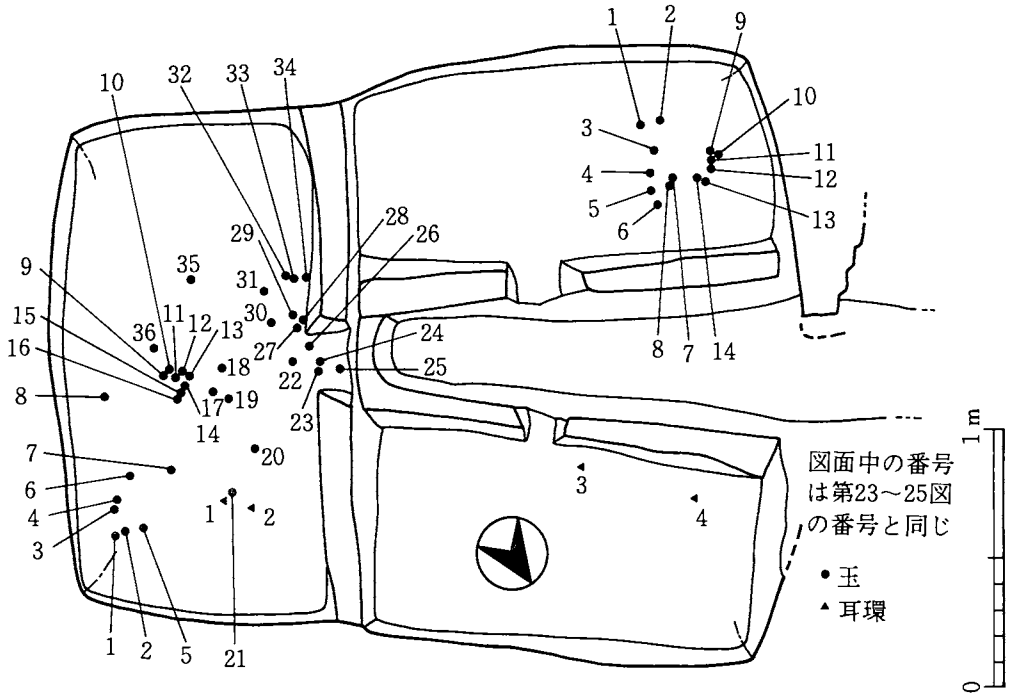
〔**埋葬人骨**〕　奥屍床の右側壁寄りの箇所に、歯が検出された。埋葬人骨の詳細についてはⅤを参照願いたい。

〔**出土遺物**〕（第22図）　遺物は奥屍床・左屍床・右屍床より出土した。奥屍床では、丸玉36個・耳環２個を検出した。排水溝の周囲で出土した丸玉13個は、流れ込んだ状態である（第22

図－奥屍床22～34)。残り23個の丸玉の出土位置は、屍床のほぼ中央部と奥壁寄りの屍床左側との二箇所である（第22図－奥屍床１～21・35・36)。このことより、奥屍床の丸玉は、屍床のほぼ中央部から奥壁寄りの屍床左側にかけての範囲に本来あったと思われる。耳環２個は、屍床



第21図　49号－d 横穴墓実測図



第22図　49号-d横穴墓の玄室内出土遺物分布図

左側の左側壁寄りの所で検出した（第20図－奥屍床１・２）。

左屍床では、屍床右側の仕切の近くで耳環２個を検出した（第22図－左屍床３・４）。

右屍床での出土遺物は、丸玉14個である。丸玉は、屍床の玄門寄りの箇所で環状を呈して出土した（第22図－右屍床１～14）。

埋葬人骨については、奥屍床の歯だけであるが、出土遺物より左屍床・右屍床にも埋葬された可能性がある。奥屍床での歯と遺物の出土位置を考えると、右側壁寄りの頭位で１体が埋葬され、左側壁寄りの頭位で１～２体が埋葬されたと思われる。また、右屍床では、丸玉の出土位置より、玄門方向の頭位で１体が埋葬されたと考えられる。左屍床では耳環２個だけの出土であるが、右屍床と同様の頭位で１体が埋葬されたと推定できる。

右屍床出土の丸玉（第23図）　出土した丸玉はすべて土製で、表面は黒色を呈する。丸玉14個（第23図－１～14）は、原位置で検出された。右屍床の排土中より、68個の丸玉が出土し、その中で55個の丸玉（第23図－15～69）が完形で、13個の丸玉が欠損している。

丸玉の平面形は略円形（径約0.65～0.90cm）や楕円形（長径約0.70～0.80cm、短径約0.65～0.70cm）を呈し、立面形は上下両端が扁平で、左右両端が丸くなる（厚さ約0.50～0.75cm）。

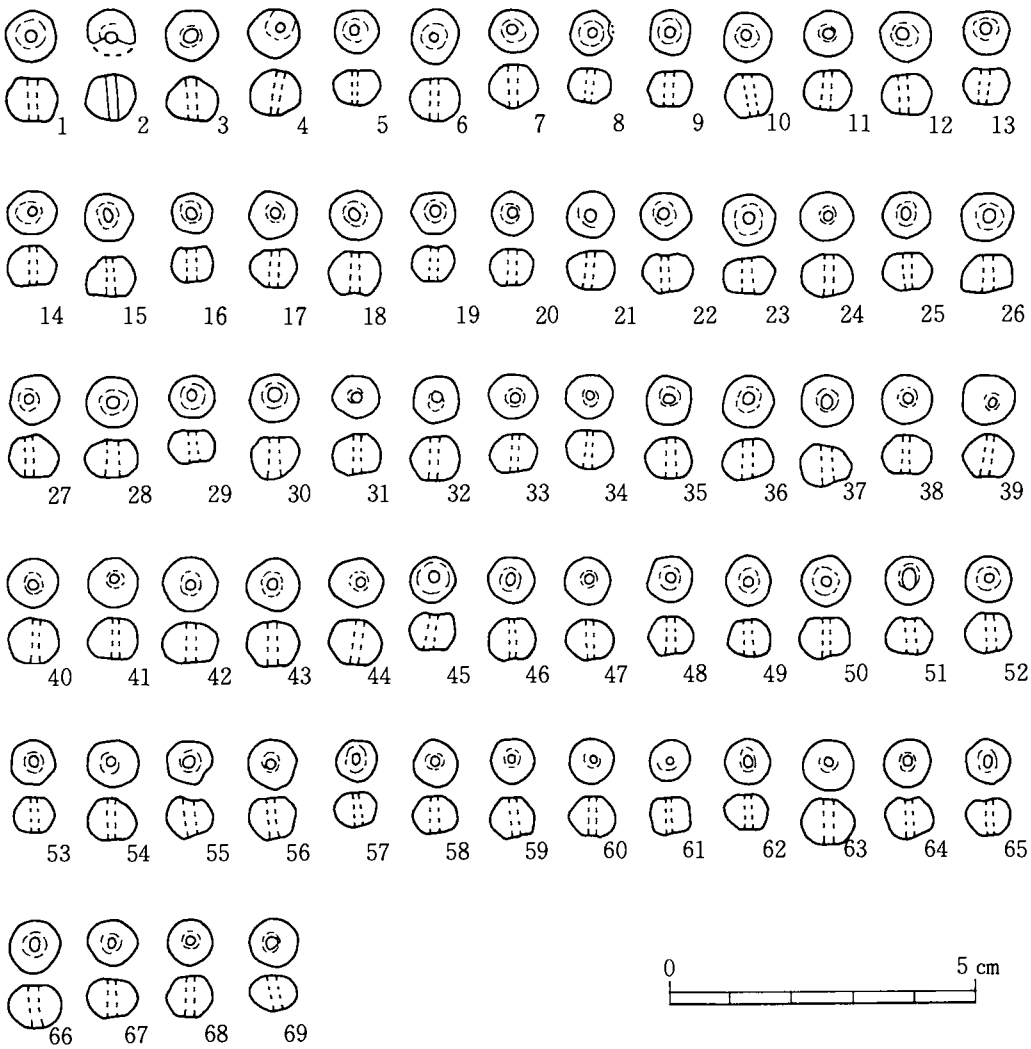
孔は玉のほぼ中央にあり、まっすぐにのびるものが殆どであるが、孔全体が斜めに穿たれた玉も少数ある（孔径約0.10～0.30cm）。

右屍床で出土した丸玉の中で、69個の玉の厚さが計測可能で、その合計は約40.85cmである。

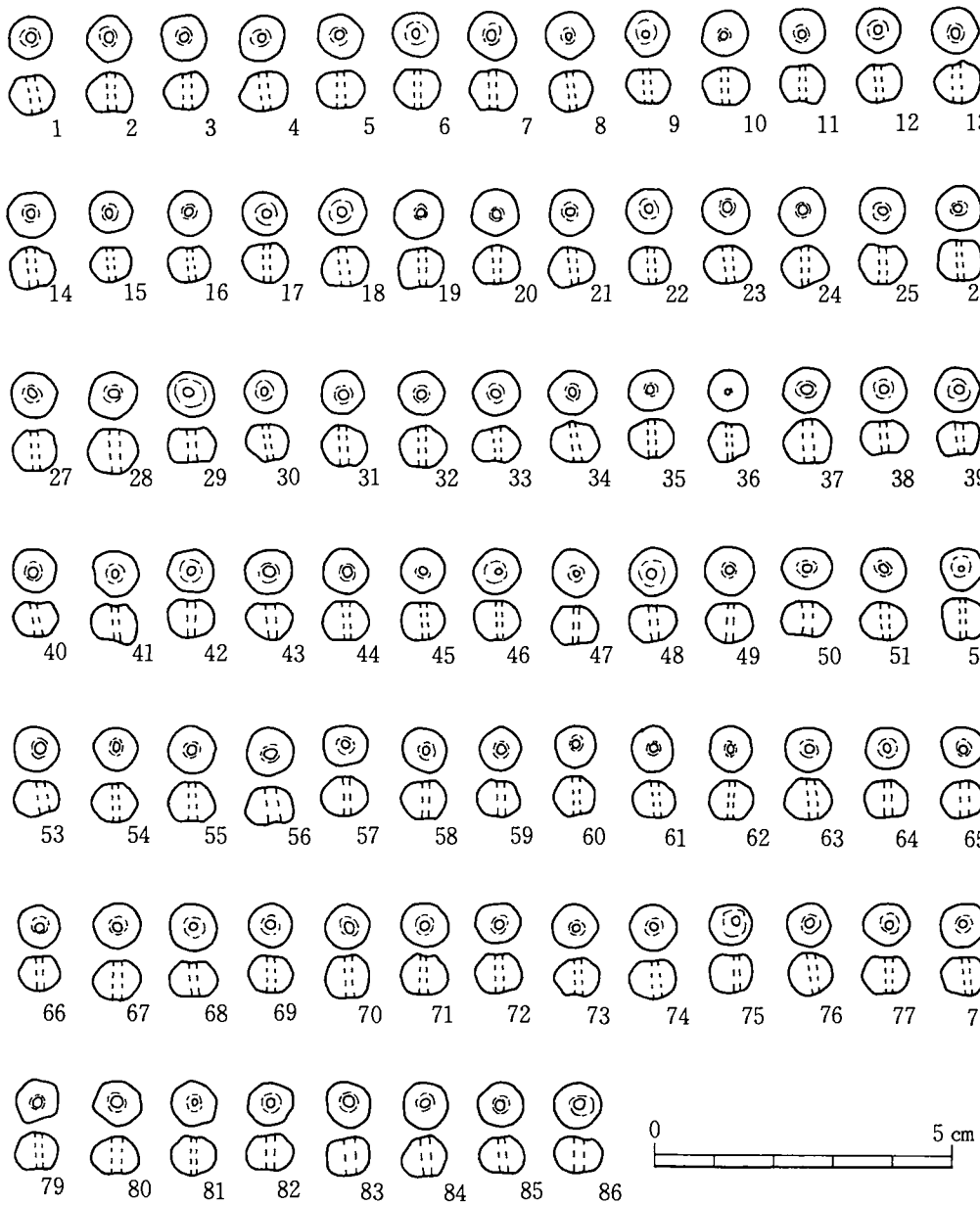
欠損している玉が13個あり、仮に玉の厚さを約0.60cm（厚さ約0.60cmの玉が最も多い。）とすると、欠損している玉13個の厚さの合計は、約7.80cmになる。計測可能な玉の厚さと欠損している玉の厚さの合計は、約48.65cmである。この数値より推定すれば、右屍床で出土した丸玉は、一連の首飾りとして用いたのであろう。

奥屍床出土の丸玉（第24図）　出土した玉は、すべて表面が黒色を呈する土製の丸玉である。36個の丸玉（第24図－１～36）は、原位置で検出され、52個の丸玉が奥屍床の排土中より出土した。排土中より出土した玉の中で、50個の丸玉（第24図－37～86）が完形で、２個の丸玉が欠損している。

丸玉の平面形は略円形（径約0.65～0.80cm）で、立面形は上下両端が扁平で、左右両端が丸



第23図　49号-d 横穴墓右屍床出土丸玉実測図



第24図　49号-d 横穴墓奥屍床出土丸玉実測図

くなる（厚さ約0.55～0.75cm）。

孔は玉のほぼ中央部分をまっすぐに穿たれたものが殆どであるが、斜めに穿たれたものも少数ある（孔径約0.15～0.20cm）。

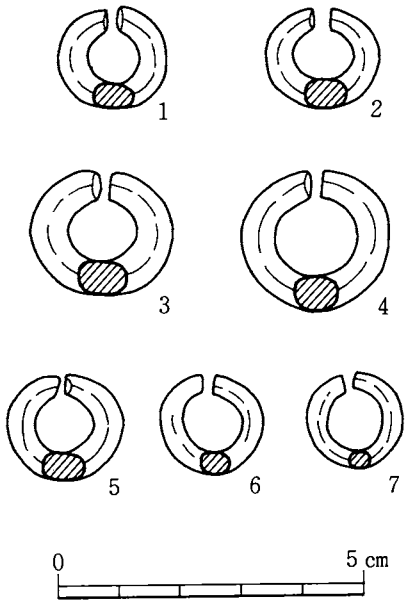
奥屍床で出土した計測可能な丸玉86個の玉の厚さの合計は約56.25cmである。欠損している玉の厚さを仮に約0.60cm（厚さ約0.60cmの玉が最も多い。）とすると、欠損している玉２個の厚さの合計は、約1.20cmになる。計測可能な玉の厚さと欠損している玉の厚さの合計は、約57.45cm

である。この推定値より、奥屍床で出土した丸玉は、一連の首飾りとして想定できる。

耳環（第25図）　出土したすべての耳環は、銅の棒を環状にまげて表面に金をかぶせたものである。

1・2は奥屍床で出土したもので、出土状況から一対の耳環である。1の平面形は略円形(径約1.8cm)で、断面形は楕円形を呈し、厚さ約0.60cmを測る。2は楕円の平面形・断面形を呈し、長径約1.90cm、短径約1.70cm、厚さ約0.70cmを測る。

3・4は左屍床で互いに少し離れた位置で出土しているが、一対の耳環と考えられる。3の平面形・断面形はともに楕円形で、長径約2.30cm、短径約2.0cm、厚さ約0.60cmを測る。4は平面形・断面形ともに楕円形を呈し、長径約2.40cm、短径約2.30cm、厚さ約0.70cmを測る。



第25図　耳環実測図

5・6・7は玄室の排土中より出土した耳環である。5は楕円の平面形・断面形を呈し、長径約1.80cm、短径約1.70cm、厚さ約0.60cmを測る。6の平面形は略円形（径約1.65cm）で、断面形は楕円形を呈し、厚さ約0.40cmを測る。7の平面形・断面形はほぼ円形で、径約1.60cm、厚さ約0.30cmを測る。

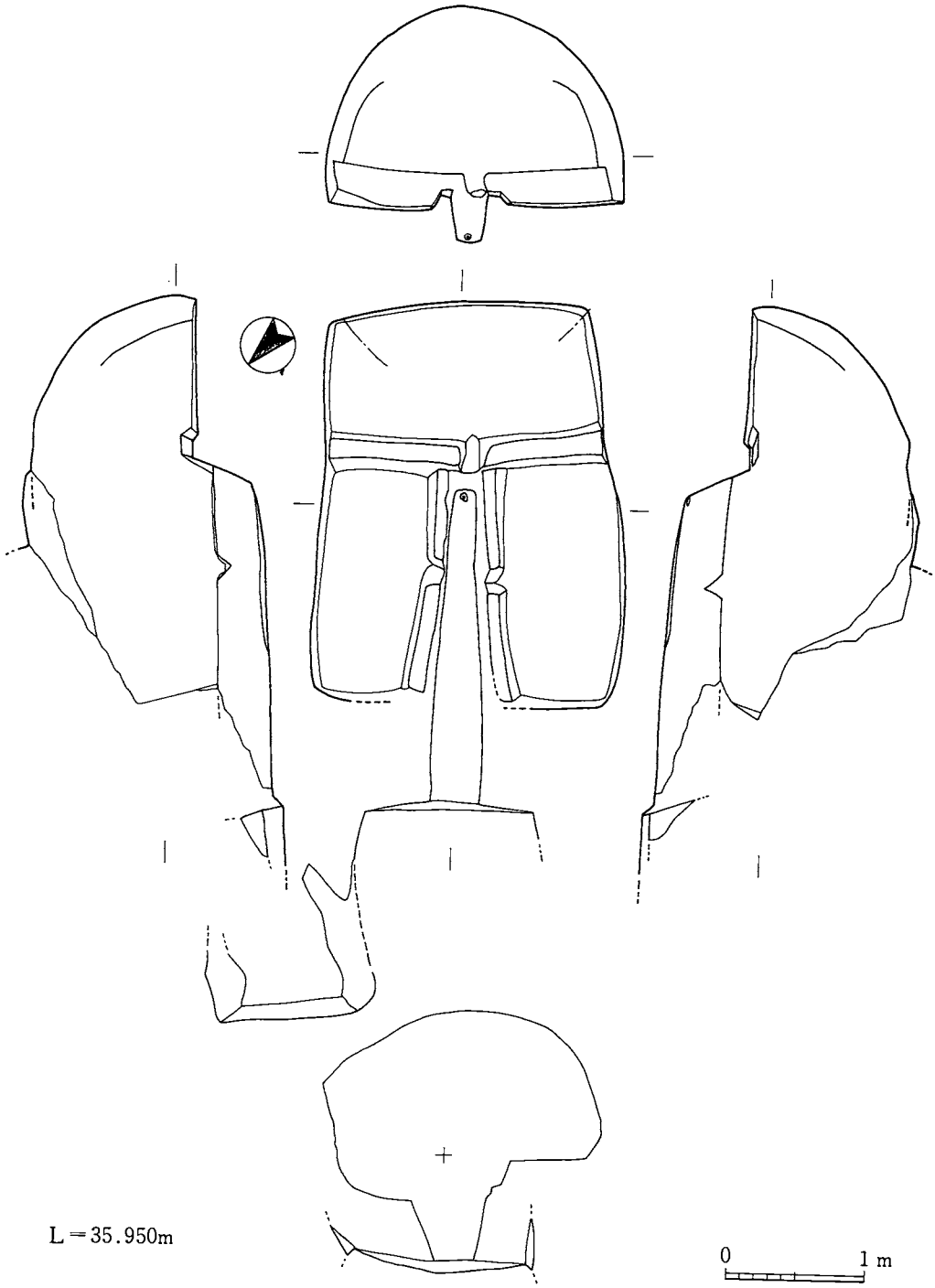
5．49号－e横穴墓（第24図）

〔構造〕　49号－e横穴墓は、通路上部の天井部から羨道部にかけての大半を欠損している。羨門から羨道部にかけては、その下半部が僅かに残る。49号－e横穴墓の構造・規模は、49号－d横穴墓に類似する。玄室の平面形は台形状を呈し、玄室の長さ約2.84m、玄室の幅約1.86～2.20mを測る。玄門側から玄室中央部にかけて、玄室の幅が最も広く、奥壁に向かうにつれて玄室の幅が少しずつ狭くなる。

玄室内は、仕切によって奥屍床・左屍床・右屍床の三つに区分される。左右屍床は通路床面より、奥屍床は左右屍床より一段高い位置にあり、三つの屍床は、ほぼ長方形を呈する。奥屍床約1.94×0.78～0.98m、左屍床約1.61×0.56～0.74m、右屍床約1.68×0.59～0.84mを測る。奥屍床は左右屍床に比べて大きく、奥壁側の長辺が胴張りになる。右屍床は左右の長辺がふくらむ胴張りプランである。

奥屍床・左屍床・右屍床には、排水溝がそれぞれ設けられる。三つの屍床の排水溝は、断面形がU字形になるように仕切を加工したもので、仕切のほぼ中央部にある。

奥壁は、直線的な立ち上がりがなく、床面から丸くなりながら内傾し天井部までのびる。左右側壁は、中程でふくらみをもち全体的に丸く立ち上がり天井部とつながる。奥壁・左右側壁



第26図　49号-e 横穴墓実測図

と天井部との境は、軒先線・棟線がないため不明瞭であり角ばらない。

縦断面形での天井部は、玄室のほぼ中央部で最も高く、通路床面より約1.62mを測る。最高部より玄門上部にかけての天井部は、欠損しているが、最高部とほぼ同じ高さで通路中央の上部まで直線的にのび、玄門上部にかけて丸くなりながら低くなると思われる。

横断面形で見る天井の最高部は、通路上部であり、その部分から左右側壁に向かって丸く緩やかに低くなる。屍床床面より上部の玄室横断面形は、蒲鉾形に類似する。

玄室の奥壁側の二隅には、浅く弱い凹線が床面から壁と天井部の境までのびる。凹線は49号－b・c横穴墓のような断面形がV字状を呈したものではない。

羨道部は、左側壁・奥壁の下半部が残存する。左側壁は僅かに玄室の主軸よりに造られ、49号－d横穴墓の羨道部右側壁からのびる壁とつながる。

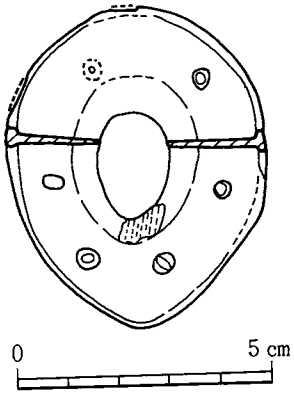
閉塞状況の詳細は不明である。ただ、調査地の周辺に凝灰岩の切り石があることより、閉塞は、凝灰岩の切り石を用いたものであったと推定できる。

〔埋葬人骨〕　49号－e横穴墓の埋葬人骨は、検出できなかった。

〔出土遺物〕　49号－e横穴墓の玄室内からの出土遺物は、鍔である。

鍔（第27図）　鍔は通路奥の床面上で出土した。鍔はもともとこの場所にあったのであろうか。屍床上にあった鍔が追葬時に通路に落ちたのだろうか。刀が出土していないため、詳細は不明である。鍔は鉄製で、倒卵形を呈する。（最大長約6.3cm、最大幅約5.1cm）。鍔には円形（径約0.30cm）、楕円形（長径約0.50、短径約0.30cm）を呈する透かし孔が六つあり、縁には覆輪をもつ。

中央孔の下端部近くに木質が残る。



第27図　鍔実測図

6．前庭部の調査（第28・29図）

（1）　前庭部の層序について

前庭部の層序については、A～C地点で土層観察を行った。A地点の土層図は調査区の西壁のものであり、B・C地点の土層図は、49号－b・49号－c横穴墓それぞれの羨道部から前庭部までの土層観察用のベルト部分である。土層観察用のベルトは、玄室の主軸にほぼ沿った状態で設けた。A～C地点で確認された土層は、Ⅰ～Ⅴ層・①～③層である。

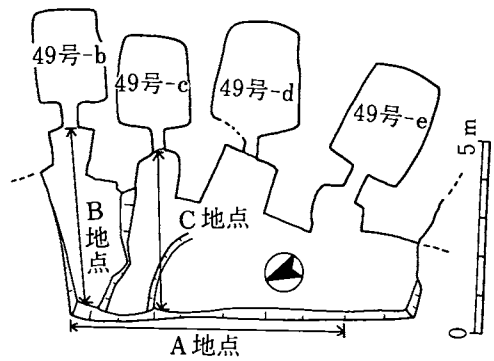
Ⅰ層　灰茶褐色土。Ⅰ層は攪乱層である。

Ⅱ層　暗茶褐色粘質土。Ⅱ層の厚さは約12～24cmある。第18図－C地点にⅡ層がないのは、

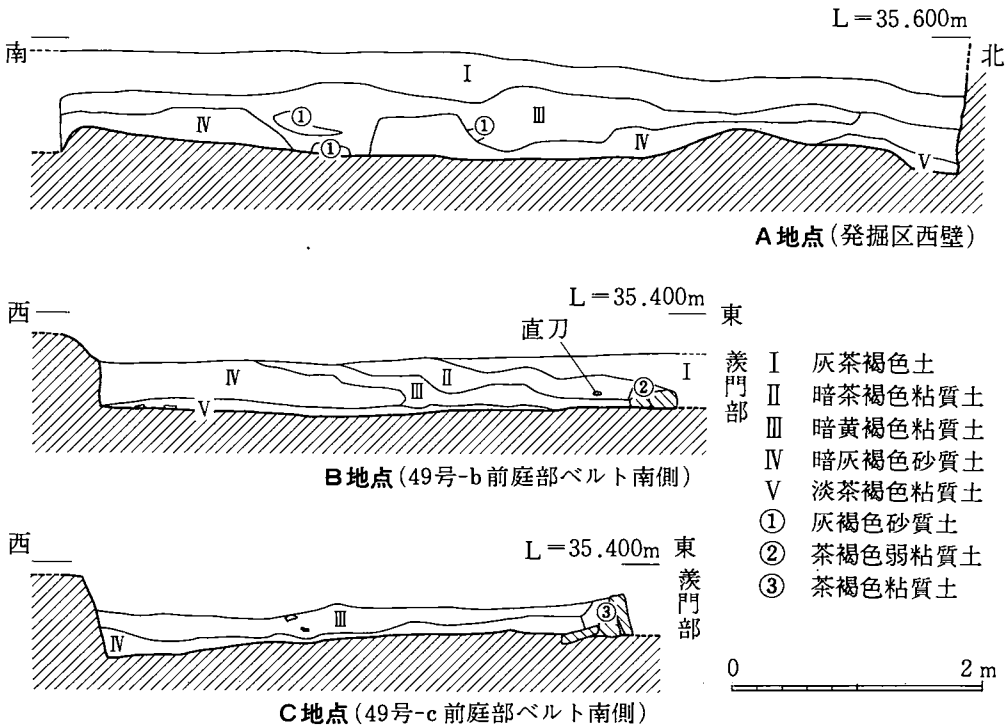
II層調査後にベルトを設定したためである。B地点でのII層は、羨門部に向かって低く傾斜し、上・下面には凹凸が見られる。II層本来の西端部は、攪乱のため不明である。しかし、II層はA地点で確認できないことより、調査区の西壁まではのびていない。

III層　暗黄褐色粘質土。III層はII層より粘性が強い。III層は調査区のほぼ全面に存在し、凹凸が認められ厚さ約8～50cmを測る。B地点でのIII層はII層と同様に羨門部に向かって低く傾斜する。C地点でのIII層は多少の凹凸があるが、前庭部の床面とほぼ平行状態で堆積している。

IV層　暗灰褐色砂質土。IV層には凝灰岩の小破片が含まれ、厚さ約5～34cmを測る。A地点でのIV層は、上面の凹凸が著しく部分的に存在しない。B地点で見られるIV層は、前庭部の中程まで羨門部に向かって低く傾斜する。IV層の上面には凹凸が見られる。C地点でのIV層は、前庭部の床面にほぼ平行した状態で、上面には凹凸が認められる。



第28図　土層実測地点位置図



A地点（発掘区西壁）

B地点（49号-b前庭部ベルト南側）

C地点（49号-c前庭部ベルト南側）

第29図　土層実測図

V層　淡茶褐色粘質土。V層は49号－b横穴墓の前庭部の凹みだけに存在する。B地点で見られるV層は、厚さ約4～10cmを測り、他の層に比べて薄い。前庭部のほぼ中央部から閉塞石の約70cm前面までのV層上面には、僅かに凹凸がある。

①層　灰褐色砂質土。①層はIII層中でブロック状に見られる。

②層　茶褐色弱粘質土。②層は49号－b横穴墓の閉塞石の間隙に見られる土層である。

③層　茶褐色粘質土。③層は49号－c横穴墓の閉塞石の間隙につめられたものである。

（2）　II層～V層の遺物出土状況

II層～V層で出土した須恵器・土師器を接合してみると、単一層での接合以外に異なる層から出土し、接合関係にある須恵器・土師器が22点ある。その内訳は、II・III層での接合が3点、II層・IV層での接合が5点、III・IV層での接合が9点、IV・V層での接合が5点である。異なる二つの層での接合は、II層～V層の層の凹凸に関連するものと思われ、層の凹凸は追葬時に起こった層の撹乱であろう。追葬時に前庭部で行われた何らかの行為によって、下位層にあるべき遺物が上位層に移動したり、上位層にあるべき遺物が下位層に移動したために、異なる二層間で遺物接合が見られると解釈したい。それで、異なる二層間で接合関係にある須恵器・土師器22点については、遺物の接合状況より、本来の包含層を判断して、実測図を作成した。

V層の遺物出土状況（第30図）

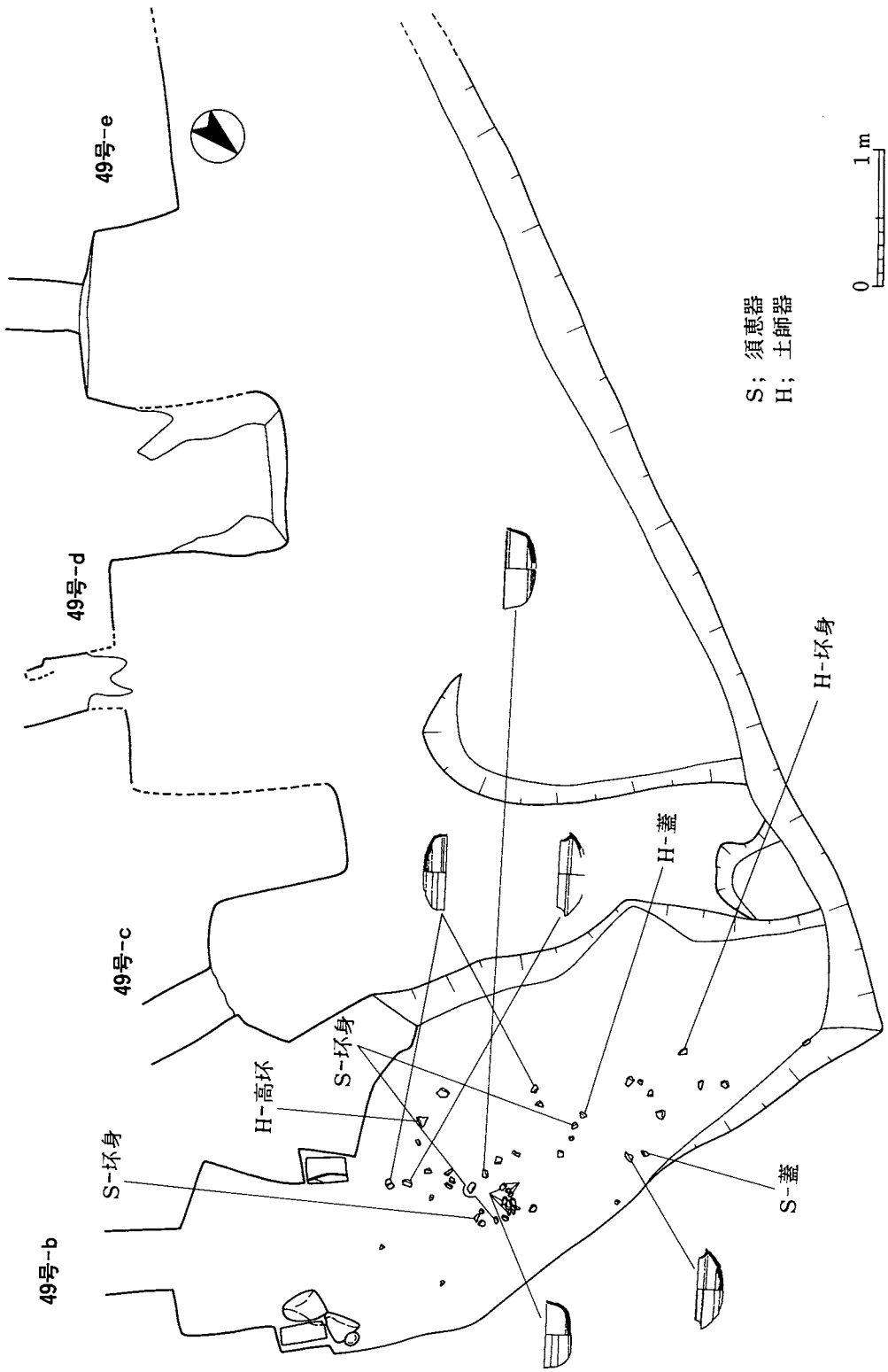
49号－c横穴墓の前庭部は、他の横穴墓の前庭部より一段上にあり、この段は、49号－b・c横穴墓と49号－c・d横穴墓の前庭部の境で、軟質の凝灰岩を加工して造られたものである。北側の段は明瞭で、約10～20cmの高低差があり、南側の段の傾斜は緩やかである。

V層から出土した遺物は、49号－b横穴墓の全体が低く窪んだ前庭部だけに存在し、49号－b横穴墓に伴うものである。遺物は前庭部のほぼ中央部に集まる傾向がある。出土した遺物の殆どは小片で、須恵器が多く、土師器が少ない。器種が判るものの中で、須恵器の坏身6点・蓋2点が出土し、土師器の坏身・蓋・高坏が1点ずつ出土した。

遺物の接合状況　V層出土遺物の接合状況には、二種類ある。一つは、一個体がつぶれ密集して出土したものが接合する須恵器の坏身1点で、もう一つは、離れた地点で出土した破片が接合する。接合する二つの破片の直線距離は、須恵器の坏身で約0.94m・0.24m、須恵器の蓋で約1.3mを測る。

IV層の遺物出土状況（第31・32図）

IV層より出土した遺物は、前庭部の調査区全面に広がるのでなく、大きく三つのまとまりをもつ。(1) 49号－bの前庭部、(2) 49号－cの前庭部、(3) 49号－dの前庭部から49号－eの



第30図　Ⅴ層遺物出土状況実測図

前庭部にかけての部分より、遺物が出土した。前庭部より出土した遺物は、その出土位置より、どの横穴墓に伴うものかの大まかな判断はつく。しかし、出土した遺物間に明確な線引きができないものがある。特に、49号－dの前庭部と49号－eの前庭部との中間地点より出土した遺物は、どちらの横穴墓に伴うかの判断が困難である。

(1) ～ (3) のⅣ層遺物分布範囲ごとの出土状況について、下記に述べる。

(1) の遺物分布範囲　前庭部のほぼ中央部に須恵器の坏身・蓋片が集まる。その周囲に、須恵器の甕片、土師器の蓋・高坏の破片が散在する。鉄鏃が前庭部のほぼ中央部の調査区北端で出土した。

(2) の遺物分布範囲　須恵器の甕の破片が多く、羨道部の左側壁の前面と前庭部のほぼ中央部に分布する。羨道部の左側壁前面にある甕の破片の西側に、須恵器の坏身・蓋の破片（(1) の遺物分布範囲より出土した破片と接合)、土師器の蓋の破片（(3) の遺物分布範囲より出土した破片と接合）がある。羨道部の右側壁寄りの所に、土師器の坏身片が出土した。

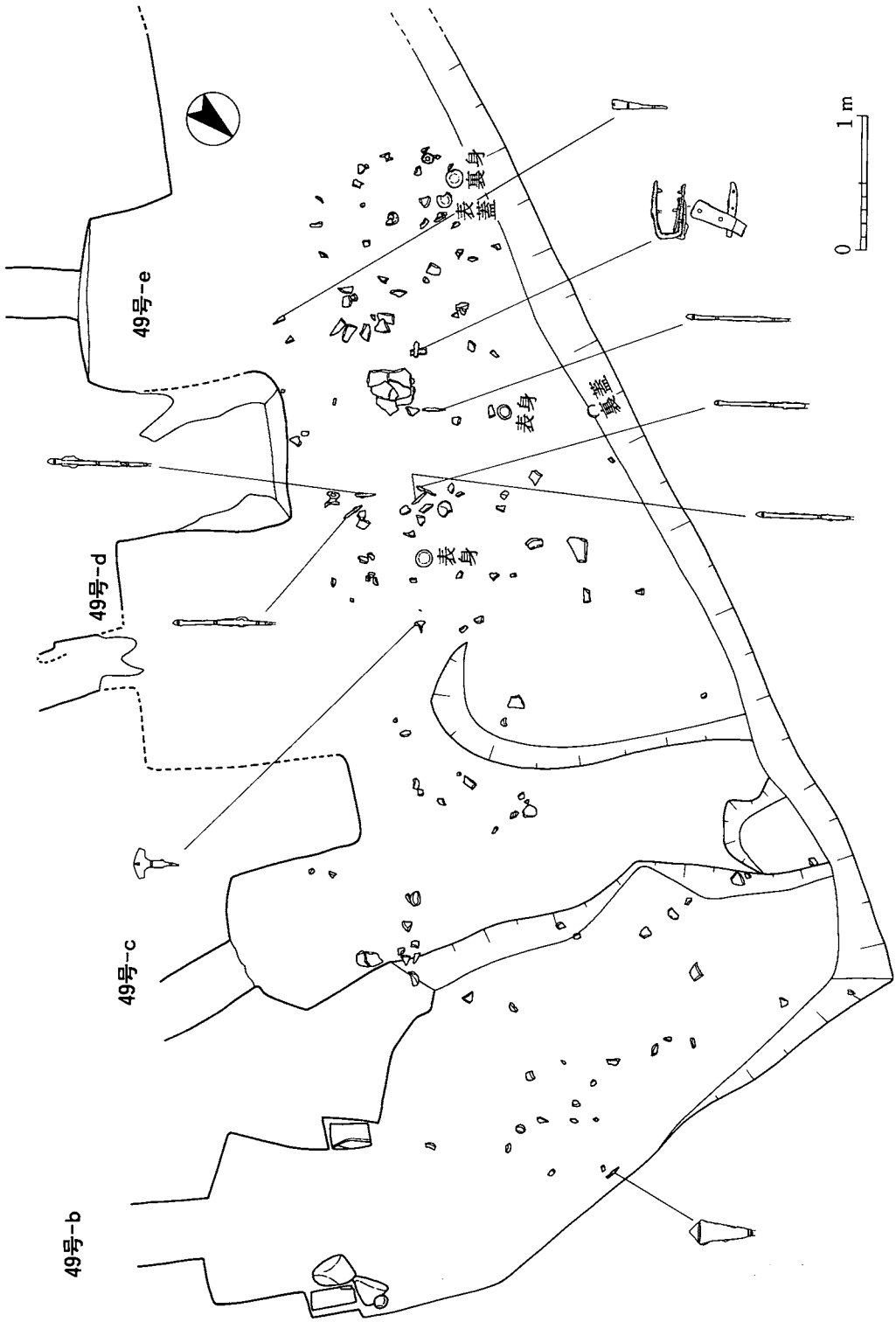
(3) の遺物分布範囲　(1)・(2) の遺物分布範囲の遺物出土状況と比較すると、(3) の遺物分布範囲より出土した遺物は、密集度が高い。49号－eの羨道部左側壁の前面と49号－d・eの前庭部中間地点で、須恵器の甕の破片が集中して出土した。その集中出土地点の周囲に、甕以外の器種の須恵器・土師器や鉄器が分布する。甕の集中出土地点の北側で、須恵器の坏身（うち1点は (1) の遺物分布範囲で出土した破片と接合）・蓋・高坏の破片、土師器の高坏片が出土した。甕の集中出土地点の北西側から西側にかけての所で、須恵器の坏身片、土師器の高坏・蓋片が分布している。甕の集中出土地点の南西側では、須恵器の坏身・蓋・高坏片、ふいごの羽口片が出土した。

また、甕の集中出土地点の周囲に、鉄鏃・馬具がほぼ環状を呈して分布する。異形飛燕式の鉄鏃は、ほぼ環状に分布する鉄鏃・馬具より離れた49号－dの前庭部から出土した。

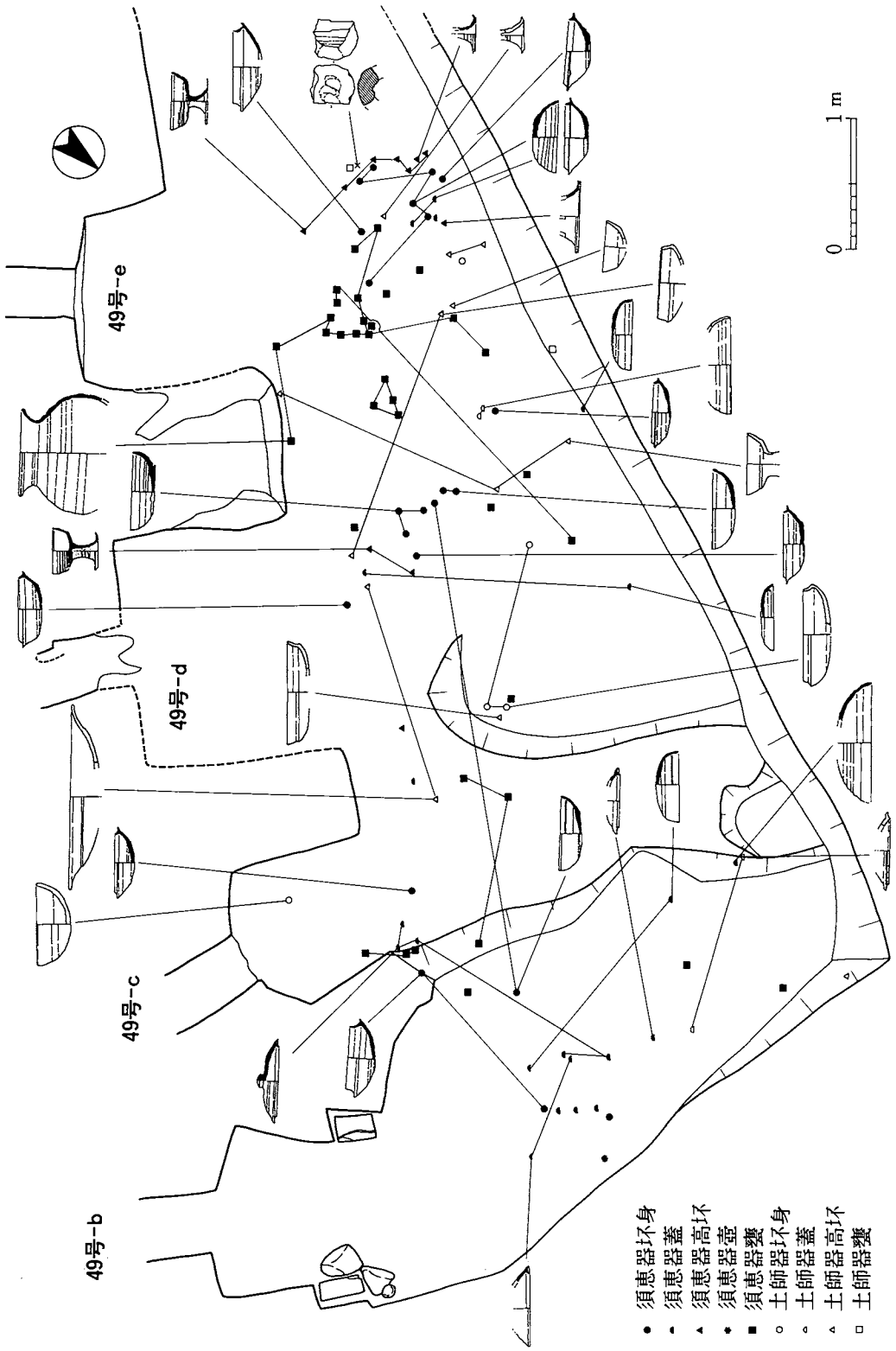
(3) の遺物分布範囲より出土した遺物の中で、完形かほぼ完形の須恵器の坏身・蓋は、斜位・立位状態でなく、すべて置いた状態で出土した。坏身は底部を下に、蓋は天井部を上にした状態であった。

遺物の接合状況　(3) の遺物分布範囲で出土した須恵器の甕胴部片は、つぶれた状態で出土したものが接合する。この甕片以外の遺物は、離れた地点で出土した破片が接合する。接合する破片は、その殆どが同じ遺物分布範囲内で出土したものである。異なる遺物分布範囲で出土した破片が接合するのが2点ある。接合する破片の直線距離（2点以上の接合がある場合は、最も離れている破片間の距離）を測り、その平均値をだすと次のようになる。

須恵器の坏身 (1.36m)・蓋 (1.34m)・高坏 (0.75m)・甕 (1.67m)、土師器の坏身 (1.30m)・蓋 (1.29m)・高坏 (1.50m) である。須恵器の甕が最も離れた距離で接合し、その次に離れた距離で接合するのが土師器の高坏である。その次に、須恵器の坏身・蓋、土師器の坏身・



第31図　Ⅳ層遺物出土状況実測図



第32図　Ⅳ層出土遺物分布図

蓋がほぼ同じ距離で接合している。須恵器の高坏が最も短い距離で接合する。

Ⅲ層の遺物出土状況（第33・34図）

Ⅲ層より出土した遺物は、大きく四つのまとまりをもち、前庭部の調査区全面には広がらない。その四つのまとまりは、(1) 49号－bの前庭部、(2) 49号－cの前庭部から49号－dの前庭部西側にかけての部分、(3) 49号－dの羨道部右側壁の前面から49号－d・eの前庭部中間地点にかけての部分、(4) 49号－eの前庭部である。(3) の49号－d・eの前庭部中間地点より出土した遺物は、どちらの横穴墓に伴うか不明である。

(2)・(3) の遺物分布範囲より、横穴墓の閉塞石の破片が2個出土した。2個の閉塞石の破片は、別個体である。(3) の遺物分布範囲より出土した閉塞石の破片の上から、Ⅲ層に包含される遺物が検出された。Ⅲ層に包含される遺物を用いた何らかの行為が行われる以前に、閉塞石が出土位置にあったと考えられる。この閉塞石は、49号－d・e横穴墓のどちらかのもので、追葬時に外した際、欠損したために放置したのか、49号－b～e横穴墓より高い位置にある横穴墓の閉塞石が落下したものかのどちらかであろう。

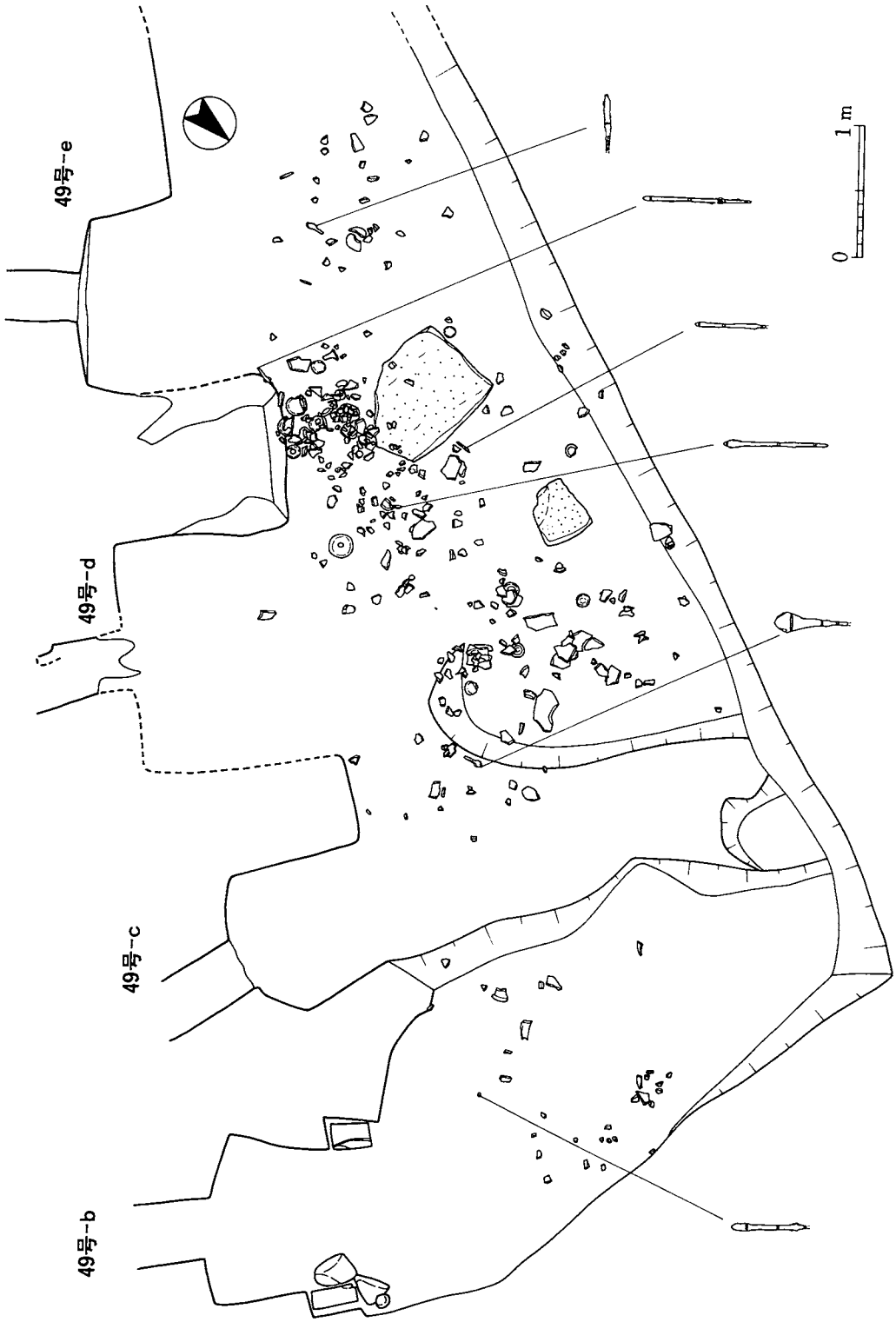
(1)～(4) の遺物分布範囲での出土状況は、下記の通りである。

(1) の遺物分布範囲　前庭部のほぼ中央部に須恵器の破片が散在する。甕の破片が多く、他に坏身・蓋・高坏の破片が出土した。遺物の大部分は、(1) の遺物分布範囲内で接合するが、高坏が (2) の遺物分布範囲で出土した1点と接合する。また、鉄鏃1本が出土した。

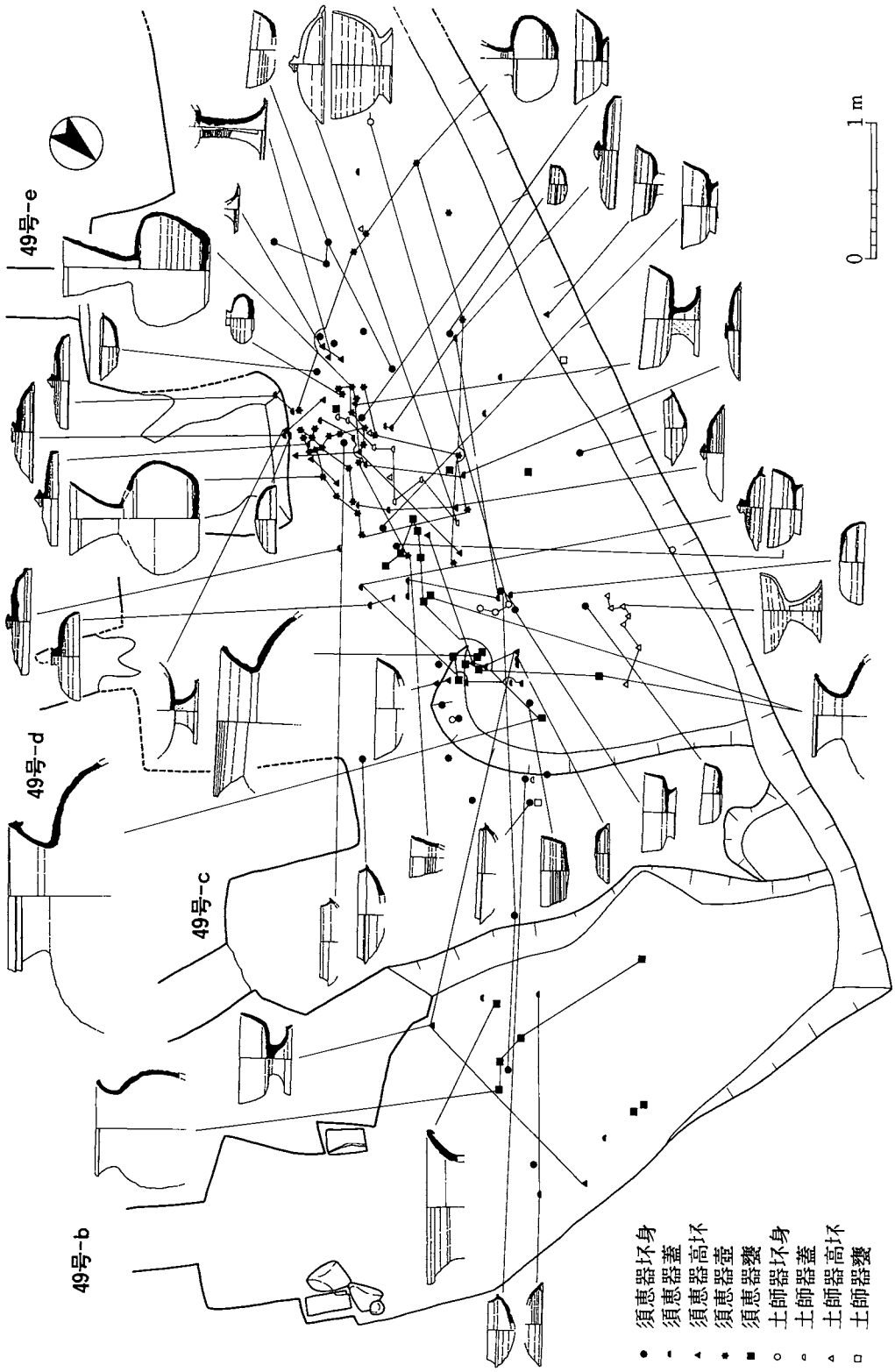
(2) の遺物分布範囲　この遺物分布範囲は、さらに二つに細分できる。前庭部の段の上に分布する遺物群と前庭部の段の斜面及び段の下に分布する遺物群である。前者の遺物群は、49号－c横穴墓に、後者の遺物群は、49号－d横穴墓に伴うと考えられる。前者の遺物群は、須恵器の坏身、土師器の蓋・甕、鉄鏃で構成される。後者の遺物群は、須恵器の甕・坏身・蓋・高坏が集まる。甕・蓋・高坏の破片は、(3) の遺物分布範囲で49号－d前庭部よりに分布する破片と接合する。須恵器の集中出土地点の西側に土師器の高坏の破片がまとまって出土した。

後者の遺物群より出土した須恵器の坏身・蓋の中で、完形かほぼ完形のものは、据えた状態で出土した。坏身は底部を下に、蓋は天井部を上にして据えてあった。

(3) の遺物分布範囲　(3) の遺物分布範囲は、他の三つの遺物分布範囲と比べて、遺物分布密度が高い。中でも、最も密集度が高いのは、49号－d・eの前庭部中間地点と閉塞石とに挟まれた所である。この部分では、須恵器の坏の破片が多く、接合できたもので四個体ある((3)の遺物分布範囲外にある破片も含む)。坏の破片に混じって、須恵器の坏身・蓋・高坏の破片、土師器の蓋の破片、鉄鏃が分布する。この遺物が密集する部分の北側に、須恵器の坏身・蓋・



第33図　Ⅲ層遺物出土状況実測図



第34図　Ⅲ層出土遺物分布図

高坏・甕片、土師器の坏身片、鉄鏃が出土した。

(3) の遺物分布範囲にある完形かほぼ完形の須恵器の坏身・蓋は、据えた状態で出土した。蓋1点が天井部を下にした状態以外は、すべて、坏身は底部を下に、蓋は天井部を上にした状態であった。

(4) の遺物分布範囲 (4) の遺物分布範囲では、遺物が散在する。須恵器の坏身・蓋片、土師器の坏身・高坏片、刀子が出土した。

遺物の接合状況　Ⅲ層出土遺物の接合状況は、Ⅳ層とほぼ同じ状況を呈する。遺物分布範囲の (1) と (2) の遺物が、また、(2) と (3) の遺物が接合する。これら以外の遺物の殆どは、遺物分布範囲内で接合する。接合する破片の直線距離（2点以上の接合がある場合は、最も離れている破片間の距離）を測り、その平均値をだすと次のようになる。

須恵器の蓋（1.05m）・高坏（1.24m）・坏（1.26m）・甕（1.40m）である。須恵器の坏身（1.30m）、土師器の坏身（3.70m）・蓋（1.20m）・高坏（0.70m）は、接合資料1点だけの数値である。1点だけの数値を除くと、最も離れた距離で接合するのが須恵器の甕で、その次に、須恵器の高坏・坏がほぼ同じ距離で接合する。須恵器の蓋が最も短い距離で接合している。

Ⅱ層の遺物出土状況（第35図）

Ⅱ層より出土した遺物は、前庭部の調査区全体に広がらない。遺物は49号－c前庭部の北側の段上から49号－b前庭部にかけてまとまる。この遺物のまとまりは、次の二つに細分できる。(1) 49号－b前庭部より出土した遺物。(2) 49号－c前庭部の北側の段上や段の斜面部に流れ込んだ状態で出土した遺物。

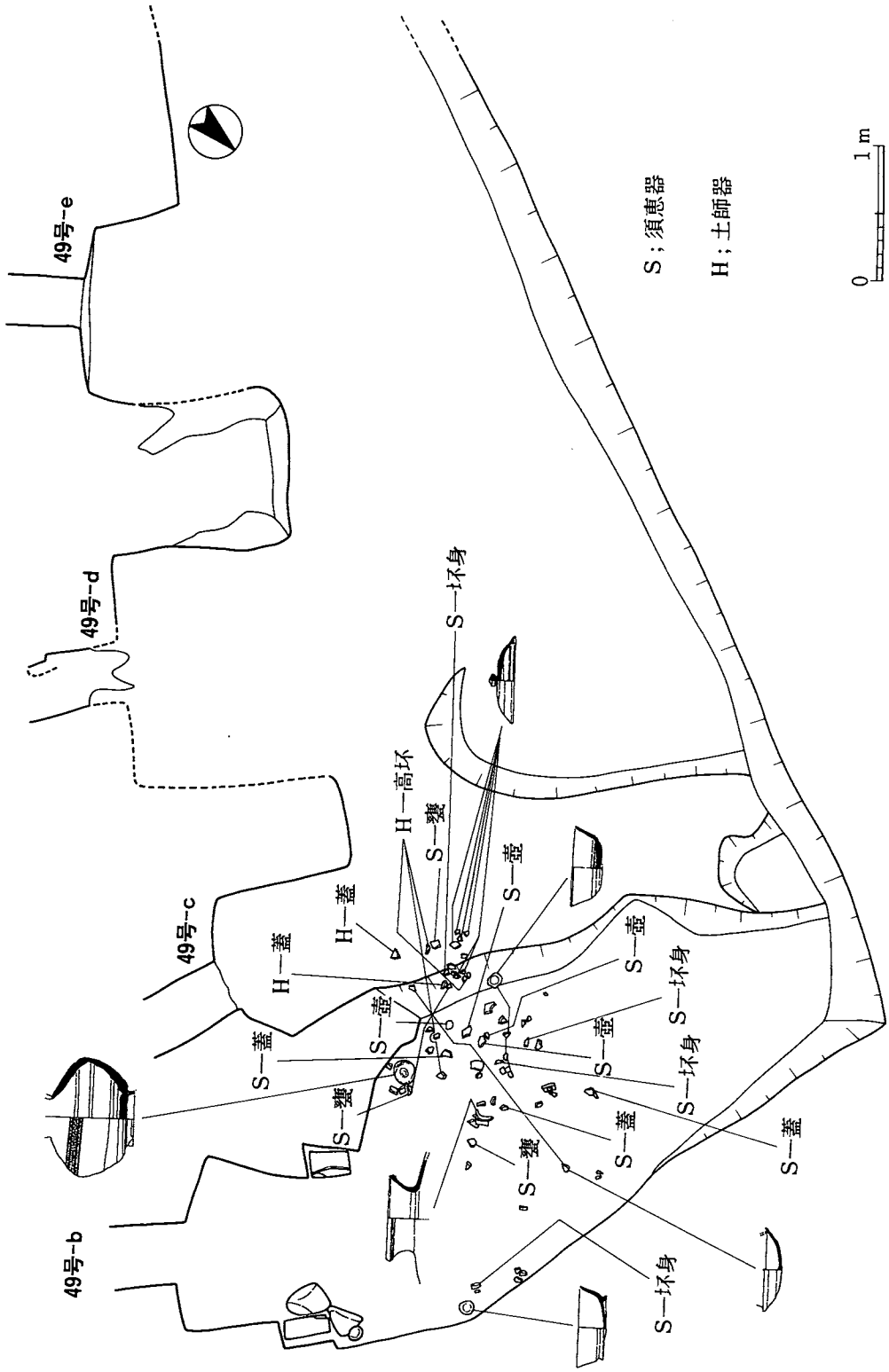
二つの遺物分布範囲での出土状況は、下記の通りである。

(1) の遺物分布範囲　49号－b横穴墓の羨道部右側壁より49号－c横穴墓の羨道部左側壁にのびる壁の前面に、口縁部から口頸部を欠いた須恵器の壺が据えられた状態で出土した。この壺と対応するかのように、羨道部左側壁の前面に須恵器の坏身が据えられていた。この壺と坏身の西側に須恵器の壺・甕・坏身・蓋の破片が分布する。

(2) の遺物分布範囲　ここでは、須恵器の坏身・蓋・甕・壺の破片、土師器の蓋・高坏が出土した。

遺物の接合状況　須恵器の甕1点、土師器の高坏1点を除くと、Ⅱ層出土の遺物は、同じ遺物分布範囲内で接合する。接合する破片の直線距離（2点以上の接合がある場合は、最も離れている破片間の距離）を測ると、次のようになる。

須恵器の坏身（0.78m・1.80m）・蓋（0.34m）・甕（0.84m）、土師器の高坏（1.0m）である。



第35図　Ⅱ層遺物出土状況実測図

（3） 遺物について

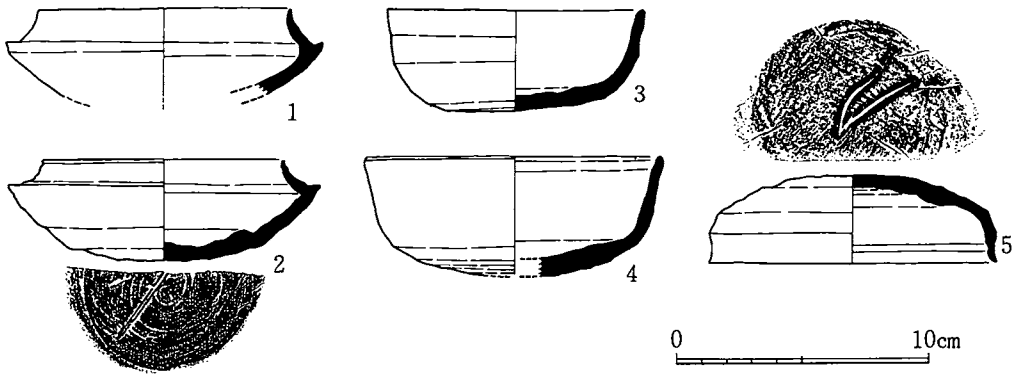
V層出土の須恵器

蓋坏（第36図）

1・2のたちあがりは、内傾し端部付近で細くなり屈曲して上方に短くのび、端部はやや尖る。受部は、1が斜め上方に、2がほぼ水平に短くのびる。2の底部は、中央部がほぼ平らで外に開きながら、ほぼ直線的にのび受部にいたる。2の底部の外器面には、ヘラ記号がある。

3・4の口縁部は、やや外反し、丸い端部にいたる。体部は、外方に開きながら直線的にのび、底部との境は緩やかな曲線をなす。3の底部は、中央部がほぼ平らで丸くなりながら体部にいたる。4の底部も3と同様になると思われる。

5の蓋は、口縁部がほぼ垂直に下り、内器面に段を有し、やや尖る端部にいたる。天井部は、中央部が水平に近く、緩やかに屈曲しながら口縁部までのびる。天井部と口縁部との境には、稜がある。天井部の外器面にヘラ記号が刻まれる。



第36図　V層出土須恵器実測図

第3表　V層出土須恵器観察表

No.	器種	法量(cm)	胎土	色調 外/内	焼成	ロクロ回転	ヘラ記号	調整	備考
1	坏身	A(10.0) B(3.4) C(12.6) D 1.5	混入物なし	暗赤褐／明褐	良			底体部½回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
2	〃	A(9.6) B(4.0) C(12.4) D 1.1	〃	灰赤褐／褐	〃	逆時	○	回転ナデ	
3	〃	A(10.4) B 4.0	〃	青灰	〃			底部回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
4	〃	A(9.9) B(4.8)	〃	灰白	やや良			底部切り離し痕残る、他は回転ナデ	
5	坏蓋	A(11.8) B 3.5	細砂・微	灰	良		○	天井部ヘラ削り、他は回転ナデ	

遺物観察表凡例

〈法量〉 A；口径，B；器高，C；受部径，D；立ちあがり高，E；高台径，F；高台高，G；かえり径，H；つまみ高，I；脚底径　J；脚高，K；胴部最大径　※かっこは復元値・現存値

Ⅳ層出土の須恵器

蓋坏（第37図・第38図－18・19）

1・2のたちあがりは、内傾しながら中程までのび、そこで弱い段をなし上方にほぼ垂直に立ち上がり、やや尖る端部にいたる。受部は、斜め上方に短くのびる。2の底部は、丸底で内湾しながら外に開き、受部にいたる。1・2の底部外器面には、ヘラ記号がある。

3～7・19は、たちあがりが短く内傾しながら立ち上がる。受部は、どれも短く、凹みをもちながら斜め上方にのびるもの（4・5）、斜め上方に直線的にのびるもの（7・19）、ほぼ水平にのびるもの（3・6）がある。底部は、中央部が水平で、内湾しながら外に開き、受部にいたるもの（4・7）、丸底のもの（6）、ほぼ水平で体部との境に稜をもつもの（3・19）がある。3～7・19の底部外器面には、ヘラ記号がある。

8・9・10は、体部が内湾しながら外に開き、口縁端部は丸くなる。8・9の底部は、ほぼ水平にのび、体部との境に段をもつ。10の底部は、中央部が平らで丸くなりながら体部とつながる。8・9の底部外器面には、ヘラ記号がある。

11・18は、天井部から口縁部までが外に丸くなり、段をもたない。口縁端部は、11がやや尖り、18が丸くなる。11は橙色を呈し、酸化焔焼成の須恵器である。18の天井部外器面には、ヘラ記号がある。

12・13の口縁部は、やや外に開きながら下方にのび、口縁端部が丸くなる。口縁直下の内器面は、12が浅い凹みをもち、13が弱い段をもつ。12の天井部は、全体が丸くなり口縁部にいたる。13の天井部は、ほぼ水平にのび、口縁部と丸くなりながらつながる。12・13の天井部外器面には、ヘラ記号がある。

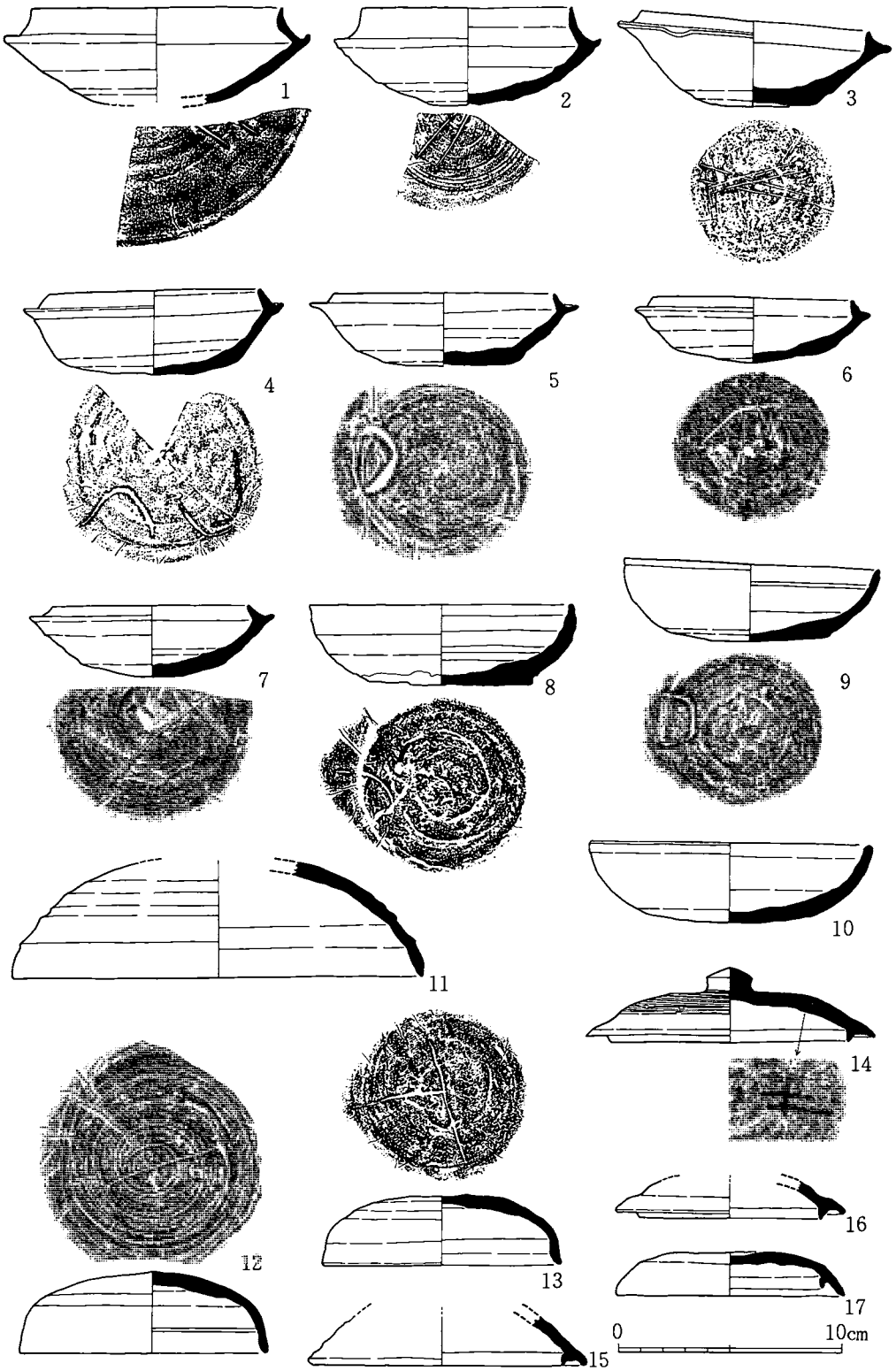
14～17は、蓋の内面にかえりをもつ。14・16のかえりは、口縁端部よりも下方にのびる。14の天井部中央には、宝珠様つまみが付き、天井部内器面にヘラ記号がある。15・17のかえりは、口縁端部よりも外に出ず、内側におさまる。17の天井部は、中央部が僅かに凹む。

甕（第38図　20）

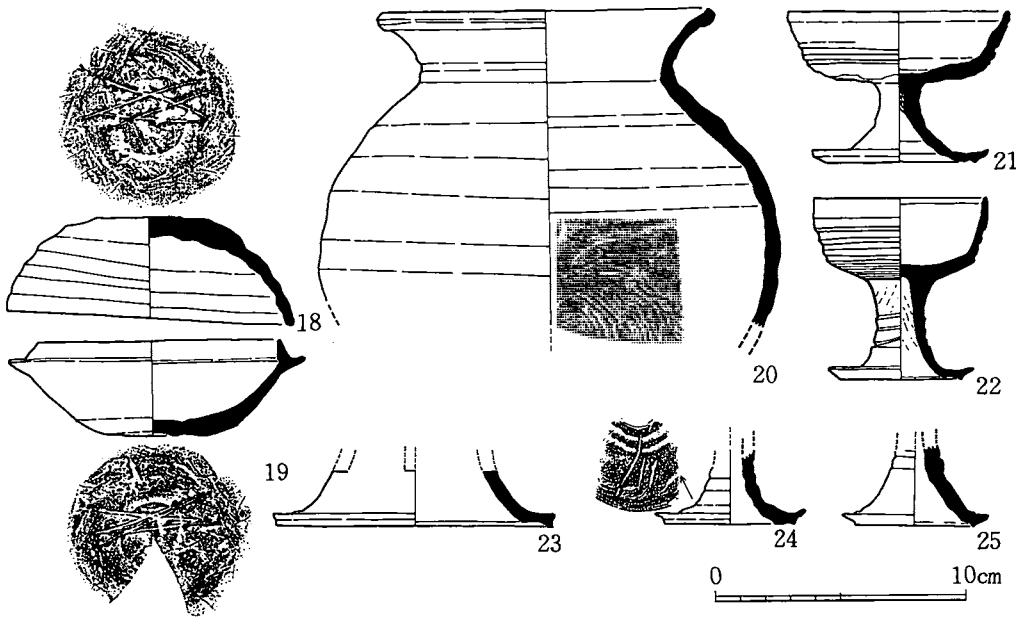
口縁部は、短く外反してのび、端部に段をもつ。胴部は、全体が丸くなり、ほぼ中央部で最大径となる。胴部の中央部より下の内器面に、同心円タタキがある。

高坏（第38図－21～25）

21・22・24・25は、短脚な小型の高坏であり、脚端部が斜め上方にはねあがる。21・22は、坏部が直線的に外反して立ち上がり、端部が丸い。坏部外器面には、21が2条、22が3条の沈線をもつ。坏部との接合部で、21の脚部が短くほぼ垂直に、22の脚部がやや外反しながら下り、端部近くでさらに強く外反する。22の脚部外器面に3条の沈線がある。24の脚部外器面には、浅い沈線が2条巡り、端部近くにヘラ記号がある。25は橙色を呈した酸化焔焼成の須恵器であり、脚部外器面には、浅い沈線が2条ある。



第37図　Ⅳ層出土須恵器実測図



第38図　Ⅳ層出土須恵器実測図

23は、脚部に長方形を呈すると思われるスカシをもつ大型の高坏である。脚部は、端部付近で強く外反し、短くほぼ水平にのび、方形を呈する端部にいたる。

第４表　Ⅳ層出土須恵器観察表

No.	器種	法量(cm)	胎土	色調 外/内	焼成	ロクロ回転	ヘラ記号	調整	備考
1	坏身	A(11.3) B(4.3) C(13.8) D 1.3	細砂・微	暗赤褐／褐	良		○	底体部½回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
2	〃	A(9.6) B 4.4 C(12.2) D 1.5	砂・微	青灰	〃		○	底体部½回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
3	〃	A 10.2 B 3.9 C 12.2 D 0.7	砂・中	暗紫灰	〃		○	底部回転ヘラ切り後、丁寧なナデ、他は回転ナデ	完形
4	〃	A 9.5 B 3.8 C 11.7 D 0.9	細砂・少	灰白	やや良		○	底部回転ヘラ切りの後、軽いナデ、他は回転ナデ	
5	〃	A 10.0 B 3.4 C 12.3 D 0.6	砂・微	灰白	〃		○	底部切り離し後ナデ、他は回転ナデ	完形
6	〃	A 9.0 B 3.0 C 10.1 D 0.6	砂・少	青灰白	良		○	底部切り離し痕残る、他は回転ナデ	完形
7	〃	A(8.7) B 3.3 C(11.0) D 0.5	砂・中	暗青灰	〃		○	底部切り離し後ナデ、他は回転ナデ	
8	〃	A 12.0 B 3.7	細砂・微	白灰褐／白灰	やや良		○	底部回転ヘラ切りの後、軽いナデ、他は回転ナデ	
9	〃	A(11.5) B 3.5	細砂・微	明灰／灰白	〃		○	底部回転ヘラ切りの後、軽いナデ	
10	〃	A 12.6 B 3.6	砂・中	灰白	〃			底部回転ヘラ切りの後ナデ、他は回転ナデ	
11	〃	A(18.5) B(5.2)	砂・黒微粒・微	橙	良			天井部⅓回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
12	〃	A(10.8) B 3.7	白微粒・微	紫灰／灰白褐	〃	時	○	回転ナデ、底部渦巻状の沈線様調整痕あり	
13	坏蓋	A(10.8) B 3.2	細砂・微	灰赤／灰褐	〃		○	底部回転ヘラ切りの後ナデ、他は回転ナデ	

No.	器種	法量(cm)	胎土	色調 外/内	焼成	ロクロ回転	ヘラ記号	調整	備考
14	〃	A 13.0 B 3.3 G 10.7 H 1.0	砂・多	黒灰／褐灰	〃	時	○	天井部½カキ目、他は回転ナデ	
15	〃	A(12.4) B(2.2) G(10.8)	混入物なし	灰白	やや良			回転ナデ	
16	〃	A(10.4) B(1.7) G(8.2)	混入物なし	緑灰	良			回転ナデ	
17	〃	A(10.2) B 2.0 G(8.3)	砂・多	白灰／灰	〃			天井部⅔回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
18	〃	A 11.4 B 4.0	砂・白粒・多	紫灰／灰赤褐	〃		○	天井部回転ヘラ切り離し他は回転ナデ	19とセット
19	坏身	A 9.7 B 3.8 G 11.9	細砂・微	紫灰	〃		○	底部回転ヘラ切りの後軽いナデ、他は回転ナデ	18とセット
20	甕	A(13.5) B(12.5) K 18.5	細砂粒・少	灰白／黒灰	〃			外器面胴部上半粗いカキ目の後ナデ、下半平行タタキ後ナデ消、内器面胴部下半同心円タタキ後ナデ消	
21	高坏	A(8.8) B 6.0 I 6.0 J 3.2	砂・少	灰赤褐／茶褐	〃			坏部底部回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
22	〃	A 6.9 B 7.2 I 4.8 J 4.0	白粒・微	灰／暗赤灰	〃			坏部底部粗いカキ目、他は回転ナデ、脚部の沈線は渦巻状	
23	〃	B(2.2) I(11.2)	細砂・微	灰白／灰	〃			回転ナデ	透孔あり
24	〃	B(3.0) I 6.1	混入物なし	灰白／灰	〃		○	回転ナデ	
25	〃	I 5.8 J(3.2)	混入物なし	橙	〃	逆時		回転ナデ	

Ⅲ層出土の須恵器

蓋坏（第39図・第40図－16～27）

1～6のたちあがりは内傾する。2のたちあがりは、短く中程で上方に屈曲する。6のたちあがりは、2のたちあがりがさらに短く退化した形態を呈する。1・3・4・5のたちあがりは、2・6のものに比べて長い。1・3・4のたちあがりは、ほぼ直線的にのび、5のたちあがりはやや反る。たちあがりの端部は、4・5がやや尖り、1・2・6が丸く、3が内側に弱い段をもつ。受部は、4・5が凹みをもち短く斜め上方に、2・3・6が屈曲して短く斜め上方に、1がほぼ水平にのびる。5の底部は丸底で、6の底部は中央部がほぼ平らで、丸くなって体部とつながる。4・5・6の底部外器面には、ヘラ記号がある。

7・8・9は、体部全体が外反し、丸くなる口縁端部につながる。9の体部には、4条の沈線がある。7の底部は、ほぼ水平にのび、体部と丸くなってつながる。9の底部は、中央部が僅かに突出し、斜め上方に体部までのび、体部との境で丸くなる。7・9の底部外器面に、ヘラ記号が刻まれる。

10は小型で、口縁端部が短く斜め上方にのびる。底部は丸底で、全体に丸みをもって体部にいたる。

12～15は底部に高台が付く。12の高台は、体部との境付近にあり、13・14・15の高台は、体部との境より内側にある。高台端部は、12が丸く、13・14が平らになり、15が細くなりやや尖る。13・14の体部は、内湾ぎみに立ち上がり口縁部で外反して、丸い口縁端部につづく。12の

体部は、全体が直線的に外に開きながらのび、口縁端部は丸くなる。12は11とセットになると思われる。15の体部は、直立ぎみに立ち上がり、丸い口縁端部にいたる。14の体部外器面、12・15の底部内器面に、ヘラ記号がある。

16・17は、口縁部が外反しながら下り、口縁部内器面に段を有し、丸い口縁端部につながる。天井部は、16がほぼ水平にのび、17が全体に丸い。

19・20・25～27は、蓋の内面に短いかえりが付く。かえりはすべて口縁端部より内側におさまり、外に出ない。25は中央部が凹んだ釦状の、26は宝珠様の、27は中央部が僅かに凹んだ釦状のつまみが、天井部の中央に付く。20の天井部は、ほぼ平らで丸くなって口縁部につながる。25・26の天井部は、水平にのび口縁部との境に稜をもつ。27の天井部は、全体的に低く、口縁部との境に稜をもたず曲線を描きながら口縁部とつながる。

21～24は、蓋内面にあるかえりがなく、口縁端部が下方に屈曲し、天井の中央部につまみが付く。21・24の口縁端部の屈曲部は、ほぼ垂直である。23は口縁端部の屈曲部から天井部までにさらに段を設ける。22・23の口縁端部の屈曲部は、やや外に開きながら下がる。天井部は、21がほぼ平らで、22が中央部で僅かに凹み、23が平らな中央部から丸くなって口縁部にいたり、24が緩やかに上方に曲がりながら口縁部までのびる。つまみは、22・24が宝珠様つまみで、21・23が擬宝珠つまみである。

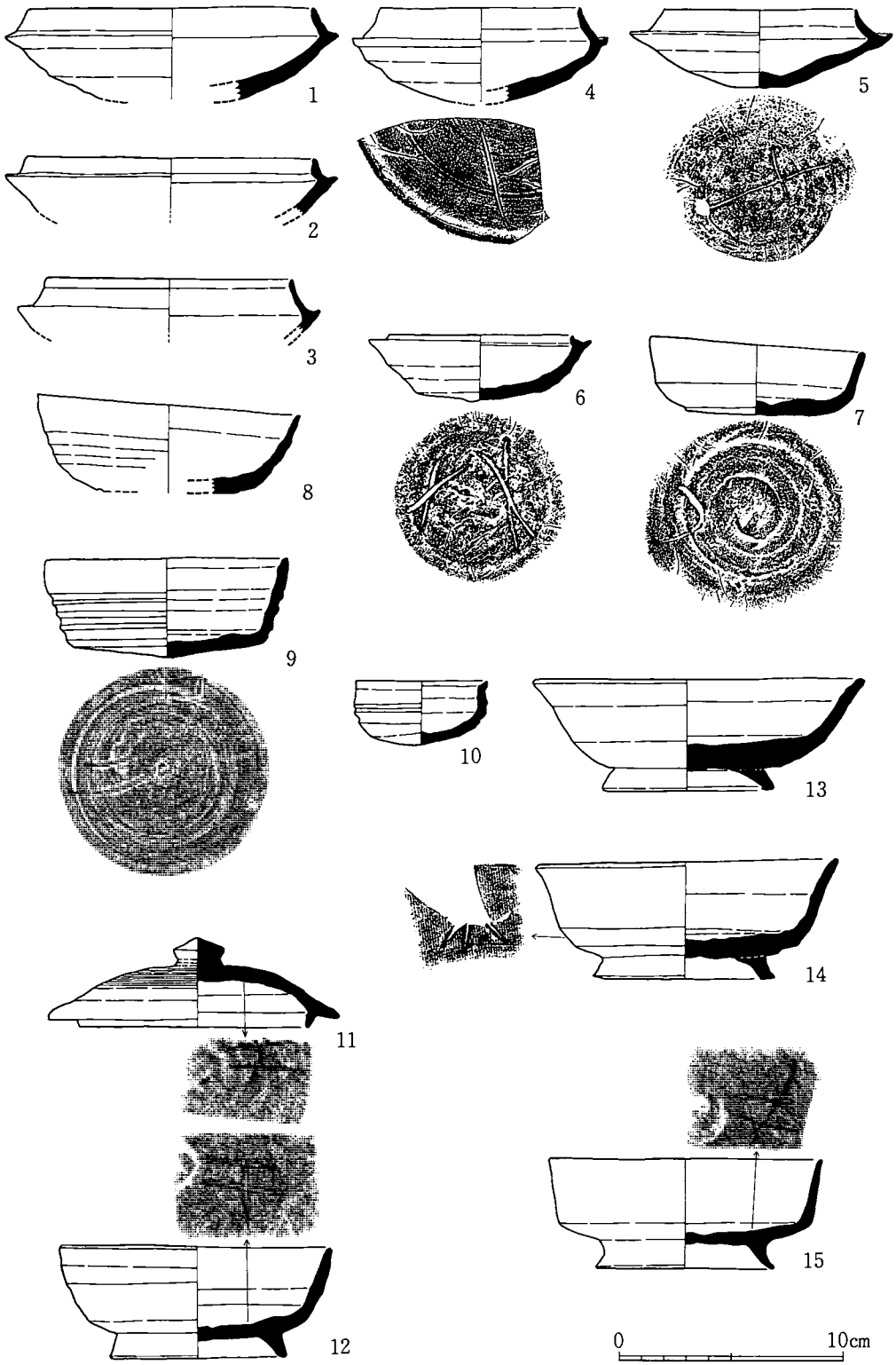
高坏（第40図－28～35）

28・29・30は、短い脚部が強く外反し、脚端部が外に開きながら短く下方に屈曲する。34・35の脚端部は、短く斜め上方にはね上がる。28・29・32の坏体部は、直線的に外に開きながらのび、口縁端部は、丸くなる。31・33の坏体部は、底部との境付近に弱い段をもつ。31の口縁部は、外湾ぎみに立ち上がり丸い端部までのびる。33の口縁部は、直線的に外に開きながら丸い端部まで立ち上がる。35の長い脚部には、長方形のスカシが二段あり、スカシの間に沈線が２条巡る。

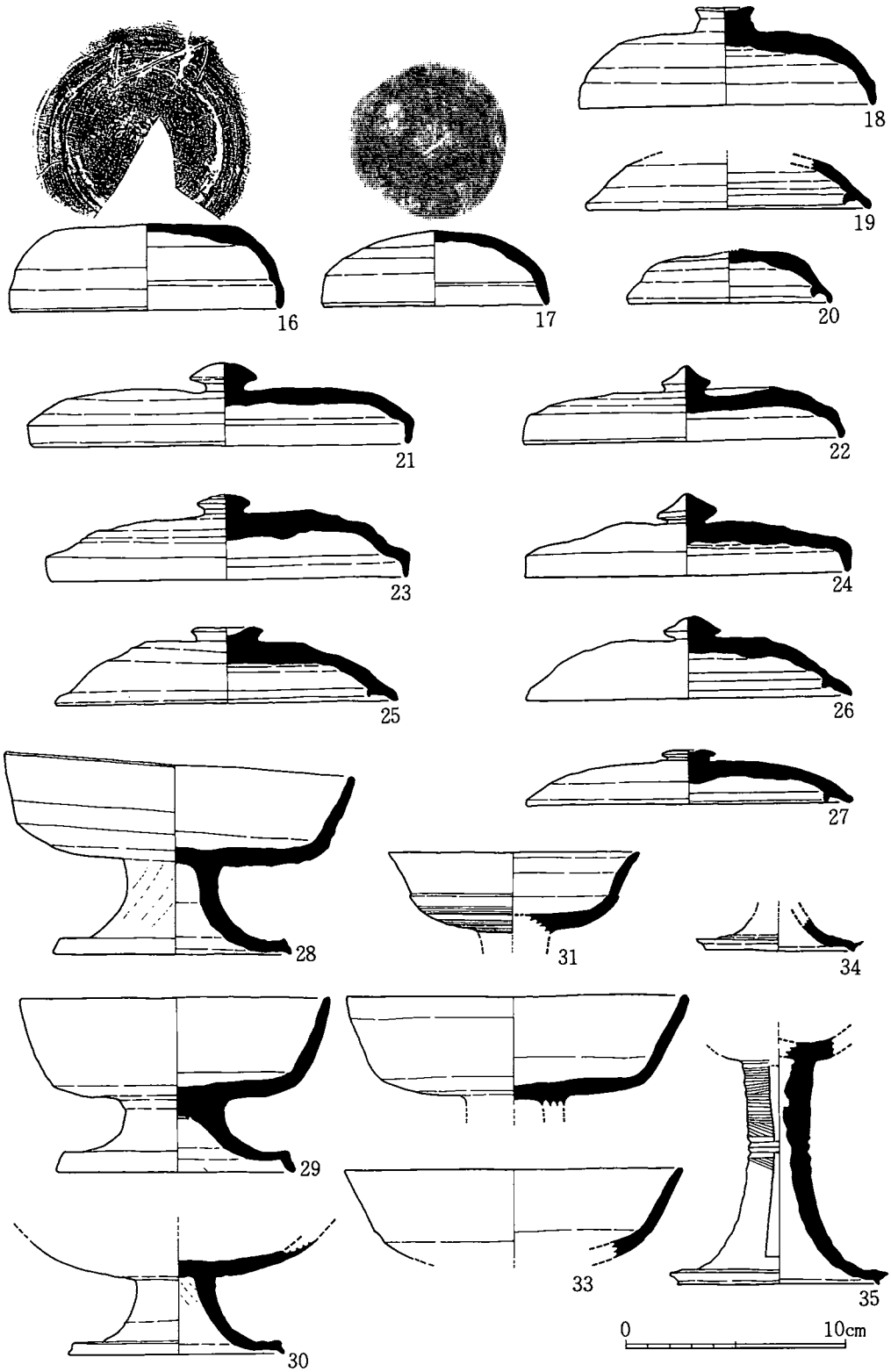
壺（第41図－36～40）

36～39は長頸壺である。36・37・38の口頸部は、基部より短く直立ぎみに立ち上がり、さらに外反しながら直線的にのびる。36・38の肩部は、緩やかに曲がりながら胴部まで下り、37の肩部は、ほぼ水平にのび胴部との境で丸くなる。38の肩部外器面には、４条の沈線がある。胴部の最大径は、37・38が肩部付近にあり、36が胴部の中程にある。36の底部は、中央部が僅かに凹む。37の底部は、胴部との境から中央部まで全体が凹み、中央部が最も凹む。38の底部は、丸底である。39の口頸部は、ほぼ直線的に外反しながら丸い端部までのびる。口頸部外器面に３条の沈線が巡る。

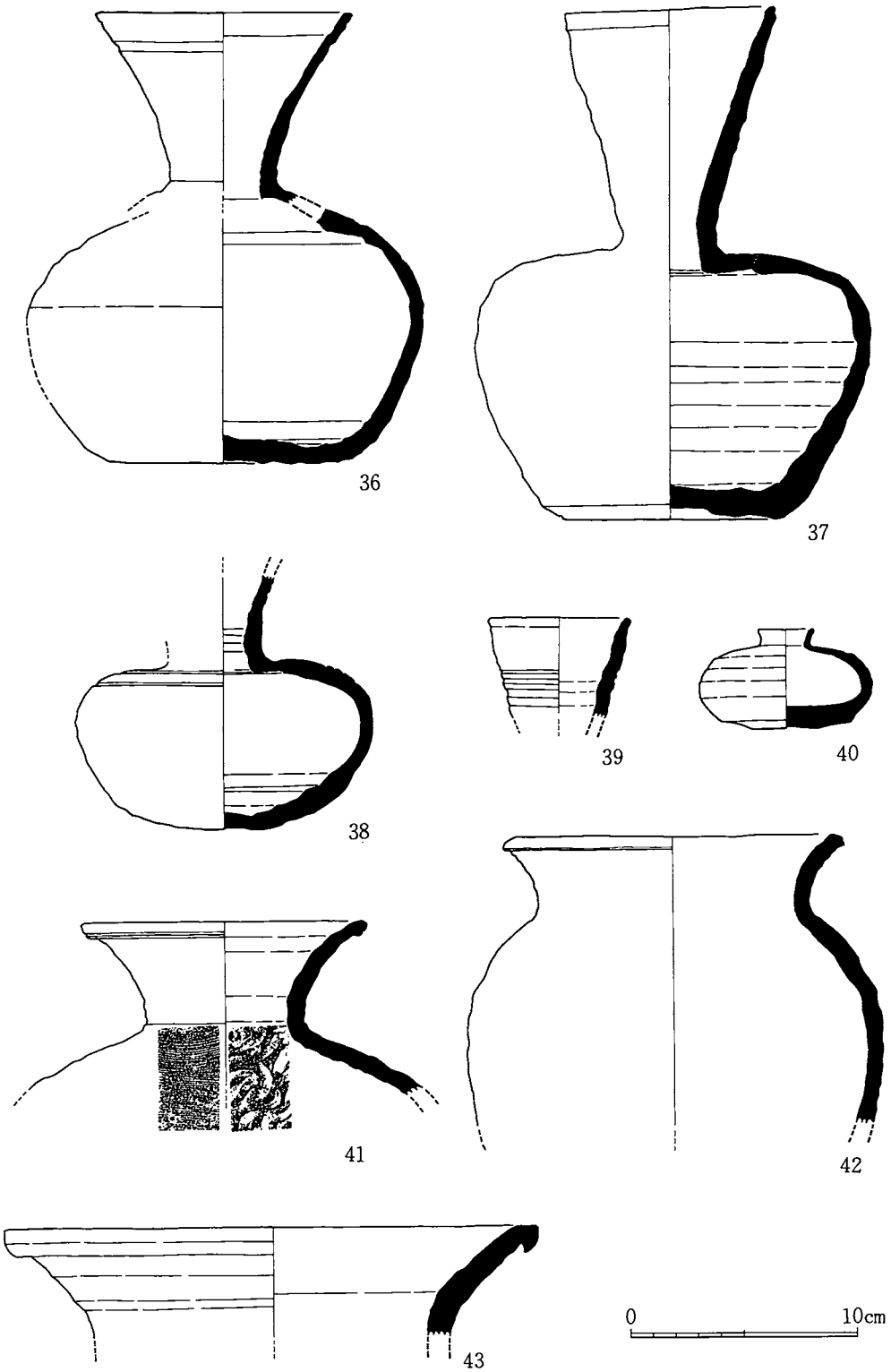
40は短頸壺である。口縁端部は丸くなり、肩部は短い胴部まで丸くなって下りる。底部はほぼ水平にのび、胴部との境に段を形成する。



第39図　Ⅲ層出土須恵器実測図



第40図　Ⅲ層出土須恵器実測図

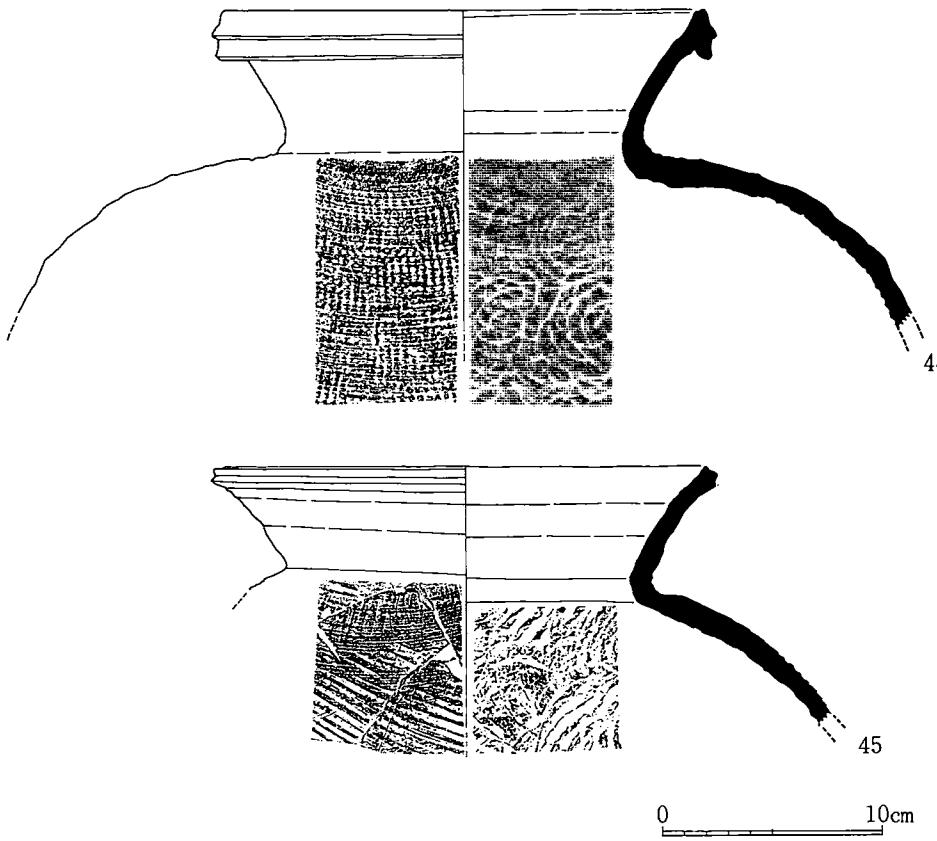


第41図　Ⅲ層出土須恵器実測図

甕（第41図－41～43・第42図）

41・42は、小型の甕である。41の頸部は、短くほぼ垂直に立ち上がり、外反して口縁部にいたる。口縁端部は、肥厚し斜め下方に短く下がり、段を形成する。肩部は、胴部に向けて緩やかに下がる。肩部より下位の外器面には、ハケ目調整痕があり、内器面には、同心円タタキが施される。42の口頸部は、頸部より外に開きながら口縁部までのびる。口縁端部は、上方が三角形を呈し、僅かに斜め下方に突出する。胴部は、全体が丸みを呈して下がり、胴部上位で最大径となる。

43・44・45は、大型の甕である。43の口縁部は、外反しながら直線的にのびる。口縁端部は、上位が平らで、短く垂直に下がり、三角形に突出した部分につながる。44の口頸部は、外反しながら直線的にのび、口縁端部にいたる。口縁端部上位は、中央部が僅かに凹んで内側に傾く。口縁端部の下位は、肥厚し中程に１条の凸帯が巡り、下端が三角形を呈する。肩部は、緩やかに下がりながらのび、胴部と丸くなってつながる。肩部より下位の外器面には、格子目タタキが、内器面には、同心円タタキが施される。45の頸部は、内傾して短く立ち上がり、口縁部は、



第42図　Ⅲ層出土須恵器実測図

外反しながらほぼ直線的にのび、端部近くでさらに外側に開く。口縁端部には、三角形を呈する凸帯が1条巡る。

第5表　Ⅲ層出土須恵器観察表

No.	器種	法量(cm)	胎土	色調 外／内	焼成	ロクロ回転	ヘラ記号	調整	備考
1	坏身	A(12.8) B(4.1) C(15.0) D 1.1	砂・微	暗灰／紫灰	良			回転ナデ	
2	〃	A(13.0) B(2.5) C(15.0) D 0.9	砂・微	灰	〃			回転ナデ	
3	〃	A(11.8) B(2.3) C(13.6) D 1.4	砂・微	灰	〃			回転ナデ	
4	〃	A(9.2) B(4.2) C(11.6) D 1.5	混入物なし	暗緑灰／緑灰	〃		○	回転ナデ	
5	〃	A 8.6 B 3.5 C 11.8 D 1.2	砂・多	灰	〃	逆時	○	底体部½回転ヘラ削り、他は回転ナデ	完形
6	〃	A 8.3 B 3.0 C 10.2 D 0.3	砂・多	灰	〃		○	底部切り離し後、粗いナデ、他は回転ナデ	完形
7	〃	A 9.6 B 3.1	細砂・白粒・微	暗赤褐／橙	〃	時	○	底部回転ヘラ切り、他は回転ナデ	完形
8	〃	A 11.9 B 4.0	白粒・砂・中	灰白	〃			底部回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
9	〃	A 10.8 B 4.4	砂・微	灰赤／赤褐	〃	時	○	底部回転ヘラ削り、他は回転ナデ	完形
10	〃	A 6.0 B 2.9	砂・微	灰／褐灰	〃	時		底部回転ヘラ削り、他は回転ナデ	完形
11	坏蓋	A 13.1 B 4.0 G 10.3 H 1.2	白粒・砂・中	赤褐	〃		○	天井部⅓カキ目、他は回転ナデ	12とセット
12	坏身	A 12.3 B 5.0 E 7.8 F 1.1	砂・微	赤褐	〃	逆時	○	高台貼付、底体部⅓回転ヘラ削り、他は回転ナデ	完形 11とセット
13	〃	A(15.0) B5.0 E 7.7 F 1.0	細黒粒	灰白	〃			高台貼付、底部切り離し痕残る、他は回転ナデ	ほぼ完形
14	〃	A 13.6 B 5.3 E 8.2 F 1.1	白粒	灰白	〃		○	高台貼付、底体部½回転ヘラ削り、他は回転ナデ、底部切り離し痕残る	
15	〃	A 12.2 B 5.0 E 7.8 F 1.2	細砂・多	紫灰／暗紫灰	〃	時	○	底体部½回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
16	坏蓋	A 12.4 B 3.9	混入物なし	緑灰	〃		○	天井部½回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
17	〃	A 10.4 B 3.4	砂・微	暗赤灰	〃	時	○	天井部½回転ヘラ削り、他は回転ナデ	完形
18	〃	A(13.4) B 4.5 H 1.1	白・黒石粒・多	暗紫灰／紫灰	〃			つまみは貼付、天井部の⅔回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
19	〃	A(12.8) B(2.3) G(10.6)	細黒粒・多	灰白	やや良			天井部⅔程度回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
20	〃	A 9.3 B 2.4 G 7.6	砂・少	黒灰	良			天井部⅔回転ヘラ削り、他は回転ナデ	つまみ欠失 ほぼ完形
21	〃	A 17.7 B 3.8 H 1.3	細黒粒・微	青灰	〃			回転ナデ	
22	〃	A 14.5 B 3.4 H 1.1	細白粒・少	灰	〃			天井部½ヘラ削り、他は回転ナデ	ほぼ完形
23	〃	A 16.1 B 4.8 H 0.9	細白粒・少	白灰／灰白	〃	時		天井部½ヘラ削り、他は回転ナデ	完形
24	〃	A 14.8 B 3.7 H 1.2	細白粒・少	灰白	〃			回転ナデ、外器面全体に灰がかぶり調整不明	
25	〃	A 15.6 B 3.5 G 12.9 H 0.6	細白粒・少	暗灰黄褐／暗黄灰	〃	時		天井部½ヘラ削り、他は回転ナデ	完形
26	〃	A 14.8 B 3.7 G 12.2 H 1.0	混入物なし	灰／灰白	〃			天井部⅔回転ヘラ削り、他は回転ナデ	

No.	器種	法量(cm)	胎土	色調 外/内	焼成	ロクロ回転	ヘラ記号	調整	備考
27	坏蓋	A 14.8 B 2.4 G 12.4 H 0.4	細砂・少	灰	良	時		つまみは貼付、天井部¾回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
28	高坏	A 14.1 B 8.0 I 10.9 J 3.3	細白粒・細砂・微	紫灰／灰	〃			坏部底部回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
29	〃	A 16.0 B 9.2 I 10.9 J 4.2	白粒・砂・中	灰／白灰	〃			坏部底部回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
30	〃	B(5.3) I 9.8 J 3.5	砂・微	灰白	〃			回転ナデ	
31	〃	A(11.5) B(3.8)	白粒・砂・多	青灰	〃	時		底部½ヘラ削り、その後カキ目、他は回転ナデ	
32	〃	A 15.7 B(5.0)	砂・微	白灰／灰白	やや良			坏部底部回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
33	〃	A(15.5) B(4.1)	細黒粒・微	灰白	〃			坏部底部回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
34	〃	B(1.6) I(6.6)	混入物なし	黒灰／白灰	良			回転ナデ	
35	〃	B(11.3) I(9.2) J 10.1	細砂・多	赤灰	〃			回転ナデ、外器面上半は丁寧なカキ目、下半は粗いカキ目	方形二段透孔
36	壺	K 17.7	細白粒・細砂・微	灰／黒灰	〃			底部ナデ、底端部ヘラ削り、他は回転ナデ	口縁部ひずむ
37	〃	A 9.3 B 22.2 K 17.6	細砂・多	白灰／灰	〃			底部端ヘラ削り、他は回転ナデ	
38	〃	B(11.2) K 13.3	白粒・細砂・少	灰白／白	〃			底部は切り離し後、粗いナデ、他は回転ナデ	
39	〃	A(6.4) B(4.5)	白粒・少	灰白	〃			回転ナデ、口縁下に沈線	
40	〃	A 2.5 B 4.4 K 7.6	細砂・微	白灰 底部灰黒	〃			底部回転ヘラ切りの後、荒いナデ、他は回転ナデ	完形
41	甕	A(12.8) B(7.4)	混入物なし	黒灰／白灰	〃			外器面ごく荒いカキ目、胴部内器面、同心円タタキの後、軽くナデ	
42	〃	A(15.1) B(12.9)	混入物なし	灰	〃			回転ナデ、胴部、部分的にタタキをナデ消したあとがある	
43	〃	A(23.8) B(5.0)	砂・黒粒・多	淡緑灰／淡青灰	〃			口唇部折り曲げ、外器面平行タタキの後、丁寧なナデ消	
44	〃	A(22.0) B(13.7)	白石粒・多	灰	〃			胴部、外器面平行タタキの後、軽いナデ、内器面、同心心円タタキ、他は回転ナデ	
45	〃	A 23.2 B(11.3)	混入物なし	褐灰白	〃			胴部、外器面平行タタキの後軽いナデ、外器面同心円タタキ、他は回転ナデ	

Ⅱ層出土の須恵器

蓋坏（第43図－１～４）

１のたちあがり基部は、内傾する。受部は、短く斜め上方にのびる。底部は、丸底で、外器面にヘラ記号がある。２の口縁部は、外反しながら直線的にのび、端部で丸くなる。底部は、厚く直線的にのび、丸くなって口縁部とつながる。３の底部と口縁部との境部分には、高台が付く。高台は、外側に短く斜めにのび、端部はほぼ平らである。口縁部は、外反しながら直線的にのび、端部でさらに外側に開き丸くなる。底部は、口縁部との境部分より底部中央部に向かって緩やかに下がる。４の蓋内側のかえりは、短く口縁端部より外側に出ない。天井部は、中央部がほぼ水平で、丸くなって口縁部とつながる。天井部中央には宝珠様のつまみが付く。

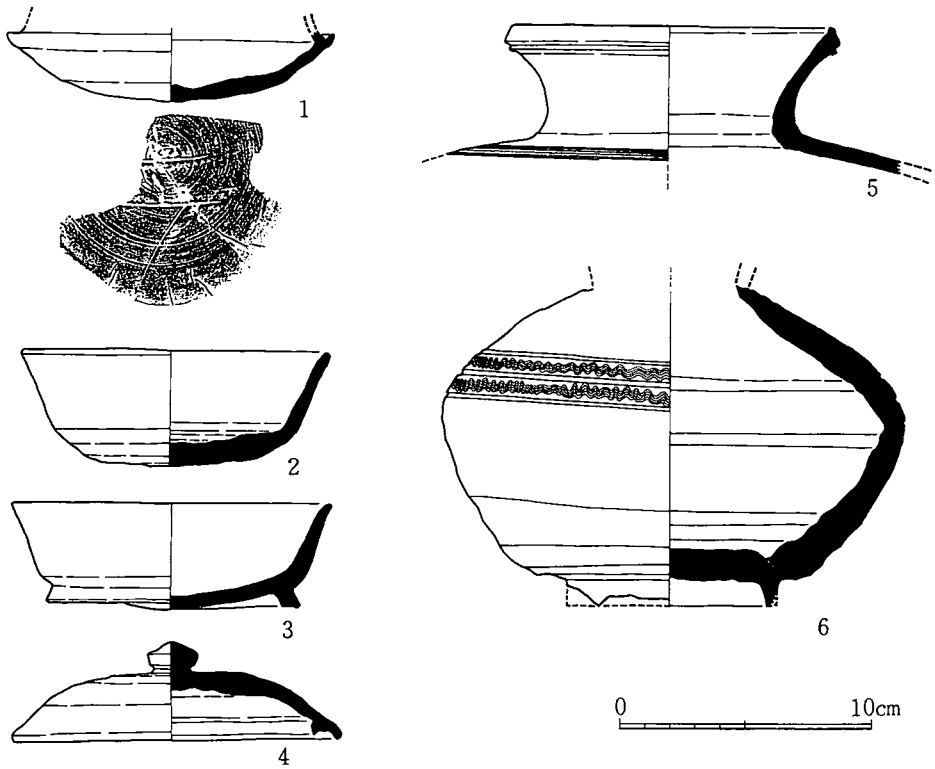
甕（第43図－５）

５の頸部は、短く内傾して立ち上がり、外湾しながらのびる口縁部につながる。口縁端部は、

僅かに肥厚し、中程に三角形の凸帯が1条巡る。肩部は直線的に胴部に向かって下がる。

壺（第43図－6）

6は頸部より上位を欠く。肩部は、僅かに丸くなりながら胴部に向かって下がる。肩部下位には、櫛描文様帯が二つある。胴部は、内湾ぎみに立ち上がり、肩部と弱い稜を形成する。胴部の最大径は、肩部との境にある。底部は、ほぼ水平にのび、胴部との境に弱い稜を形成し、その内側に断面形が方形を呈する高台が付く。



第43図　Ⅱ層出土須恵器実測図

第6表　Ⅱ層出土須恵器観察表

No.	器種	法量(cm)		胎土	色調 外/内	焼成	ロクロ ヘラ 回転 語号	調整	備考
1	坏身	B(3.9)	C 13.0	細砂・微	灰白	やや良	時 ○	底体部⅓回転ヘラ削り、あとは回転ナデ	
2	〃	A 12.2	B 4.6	混入物なし	灰白	〃		底体部½回転ヘラ削り、あとは回転ナデ	
3	〃	A 12.8 E 10.1	B 4.1 F 0.5	細砂・微	灰	良		高台部貼付、回転ナデ	ほぼ完形
4	坏蓋	A 13.2 G 11.4	B 4.0 H 1.3	混入物なし	灰白	やや良		天井部½ヘラ削り、あとは回転ナデ	
5	甕	A(12.6)	B(5.3)	砂粒・中	暗青灰 一部暗紫灰	良		内器面口縁一部タタキナデ消、外器面肩部荒いカキ目	
6	〃	K 18.5 F 1.0	E(8.4)		明灰白	やや良		高台貼付、底部回転ヘラ削り、底部貼付	

表採の須恵器

蓋坏（第44図－１～14）

１のたちあがりは、斜め上方に立ち上がり、端部直下の内側で段をつくり、丸い端部にいたる。受部は、ほぼ水平に短くのびる。底体部の残存部は、外側に僅かに丸くなる。

２・３・４のたちあがりは、内傾しながら立ち上がり、端部が先端ほど細くなり丸くなる。３・４のたちあがりは、端部よりの所で、上方に屈曲する。受部は、２がほぼ水平に、３・４が斜め上方に短くのびる。２の底部は、中央部がほぼ平らで、丸くなって受部にいたる。３の底体部の中位には、弱い稜がある。４の底体部の残存部は、僅かに外側に丸くなる。

５・６・７のたちあがりは、短く内傾しながら立ち上がり、中程で屈曲してほぼ垂直にのびる。たちあがり端部は、丸くなる。受部は、５・６が斜め上方に、７がほぼ水平に短くのびる。５の底部は、中央部がほぼ平らで、丸くなって受部につづく。

８の体部は、外反しながら直線的に丸い口縁端部までのびる。底部は、ほぼ平らで、中央部ほど厚くなる。

９・10の底部には、端部が方形を呈する高台が付く。９の高台は角の所で、10の高台は平坦面で接地する。

11・12の口縁部は、やや外に開きながら下がる。11の口縁部内器面には、沈線が１条巡る。11の天井部は、緩やかに丸くなりながら口縁部に向かって下がる。12の天井部は、全体が丸くなって口縁部までのびると思われる。

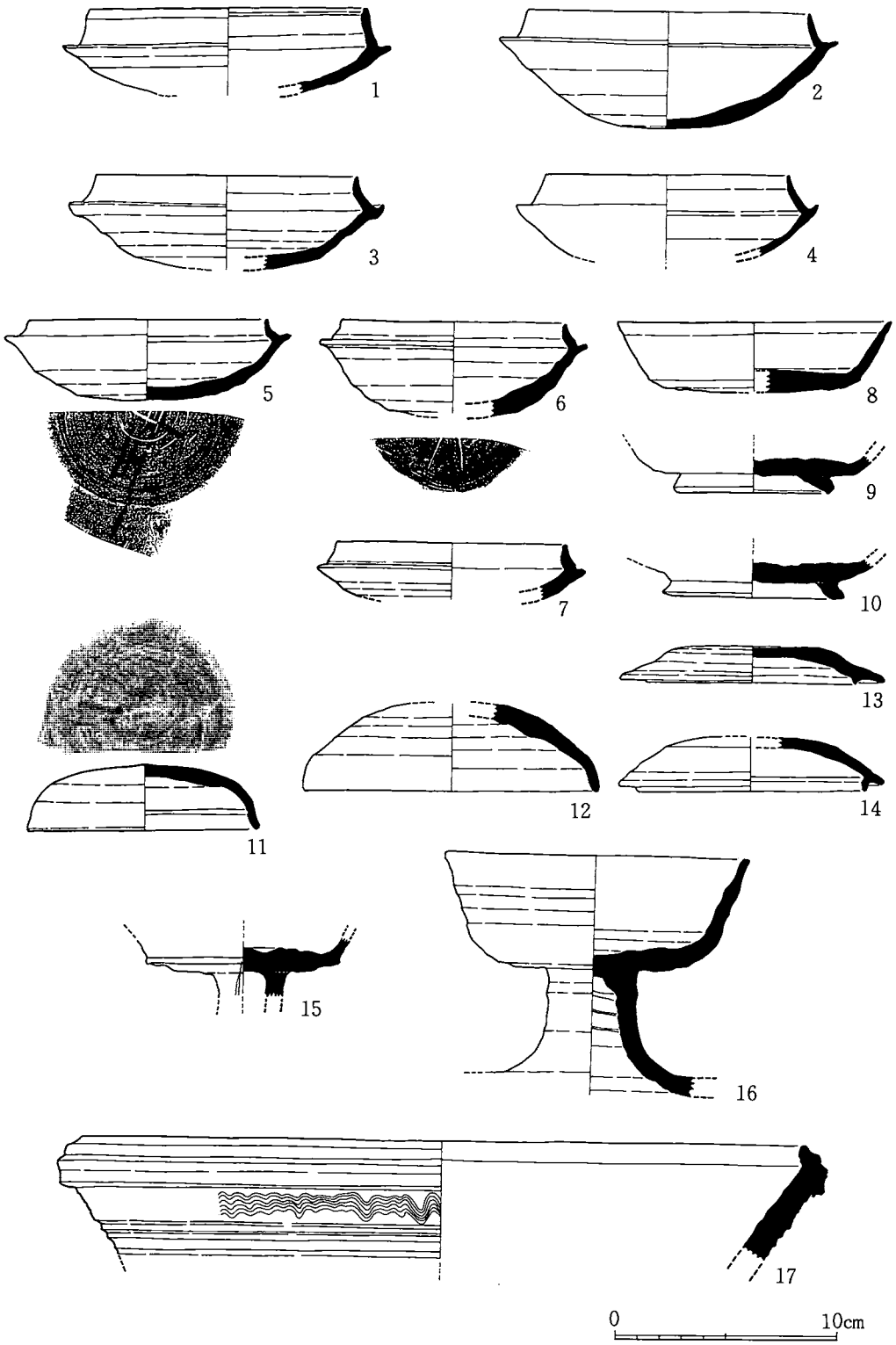
13・14は、蓋内面にかえりが付き、そのかえりは口縁端部より僅かに下方に出る。13の天井部は、中央部が少し凹み口縁部までのびる。14の天井部は、ほぼ平らになると思われる。

高坏（第44図－15・16）

15は坏部・脚部の一部である。坏底部と体部との境に稜があり、脚部はほぼ垂直に下がりはじめている。16の口縁部は、外反しながら直線的にのび、方形の端部にいたる。底部は厚く、口縁部との境で丸くなり、中央部に向かって少し傾斜する。脚部は、外に開きながら下がり、下位で大きく屈曲する。

甕（第44図－17・第45図）

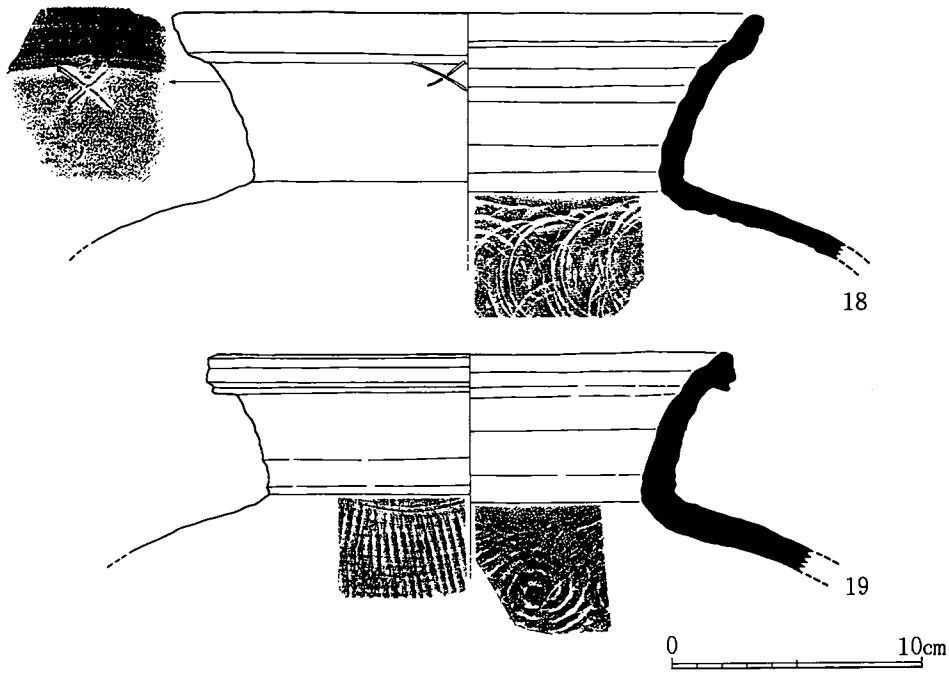
17の口縁部は、外反しながら直線的にのびる。口縁端部は、肥厚し端部上位で内傾して短くのび、端部下位で斜め下方に下がる。肥厚部の中央には、三角形を呈した凸帯が２条巡る。肥厚した口縁部直下に、櫛描文が施される。18の口縁部は、外反しながら直線的にのび、端部近くで内湾ぎみに外に開き、丸い端部にいたる。肩部は、胴部に向けて緩やかに下がる。口縁部直下の外器面には、ヘラ記号がある。肩部より下位の内器面に同心円タタキが施される。19の口縁部は、外反しながらほぼ直線的にのび、端部近くでさらに外に開く。肥厚した口縁端部下



第44図　表採須恵器実測図

位には、三角形を呈した凸帯が二つ巡る。肩部は、胴部に向けて僅かに丸くなりながら緩やかに下がる。肩部より下位には、内器面に同心円タタキが、外器面に平行タタキが施される。

他に図化できないが、横に数条の沈線を施し、沈線間に縦のカキ目を施す広口壺がある。



第45図　表採須恵器実測図

第７表　表採須恵器観察表

No.	器種	法量(cm)	胎土	色調 外／内	焼成	ロクロ回転	ヘラ計号	調整	備考
1	坏身	A(12.7) B(3.9)	砂・微	灰／白灰	良			底体部¾回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
2	〃	A(12.7) B(5.3) C(15.4) D 1.3	細砂・微	暗青灰	〃	時		底体部½回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
3	〃	A(11.8) B(5.2) C(14.3) D 1.4	細黒粒・砂・微	緑灰／灰白	やや良	時		底体部½回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
4	〃	A(11.0) B(3.7) C(13.6) D 1.6	混入物なし	青灰／緑灰	良			回転ナデ、底部はヘラ削りと思われる	
5	〃	A(10.8) B 3.7 C(13.0) D 0.8	細砂・微	暗紫灰／暗褐灰	〃		○	底体部½回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
6	〃	A(10.3) B(4.3) C(12.3) D 1.0	細砂・中	灰	〃		○	底体部½回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
7	〃	A(10.5) B(2.5) C(12.3) D 1.1	混入物なし	暗灰／白灰	〃			回転ナデ	
8	〃	A(12.3) B(3.2)	砂・黒粒・微	灰／淡灰褐	〃			底部回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
9	〃	B(2.0) E 7.2 F 0.6	混入物なし	灰／灰白	〃			高台貼付、回転ナデ	
10	〃	B(1.8) E 8.2 F 0.7	混入物なし	赤灰白	〃			高台貼付、底部切離しの後軽いナデ、他は回転ナデ	

No.	器種	法量(cm)	胎土	色調 外／内	焼成	ロクロ回転	ヘラ計号	調整	備考
11	坏蓋	A 10.6 B 3.0	細砂・微	青紫灰／紫灰	〃	時	○	天井部⅔回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
12	〃	A(13.4) B(3.9)	細砂・中	青灰	〃			天井部¾回転ヘラ削り、他は回転ナデ、内器面頂部中心に渦巻くように多数のヘラきず	
13	〃	A(12.0) B 1.7 G(9.4)	白粒・細砂・中	暗紫灰／紫灰	やや良	時		天井部½回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
14	〃	A(11.9) B(2.4) G(10.3)	砂・中	紫灰／淡青灰	良	時		天井部½回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
15	高坏	B(2.5)	白粒・石粒・多	灰黒／灰白	〃			回転ナデ、脚部つけ根に¼回転毎に切り込み有	
16	〃	A(13.9) B(10.9)	白粒・少	黒灰／灰	〃			坏部底部回転ヘラ削り、他は回転ナデ	
17	甕	A(32.6) B(5.4)	混入物なし	紫灰／淡青灰	〃			口縁部折返し、回転ナデ	
18	〃	A(23.8) B(9.8)	細砂・微	灰黒	〃		○	外器面口縁下、90度毎に×印、肩部灰がかぶり調整不明、内器面同心円タタキの後ナデ、他は回転ナデ	
19	〃	A(21.1) B(7.8)	混入物なし	灰／黒赤灰	〃			外器面口縁下平行タタキの後丁寧なナデ消、肩部平行タタキの後ナデ、内器面肩部同心円タタキの後ナデ、他は回転ナデ	

土師器・土製品

ここでは、II層～IV層より出土した土師器、IV層より出土した土製品、表採の土師器を一括して扱う。

蓋坏（第46図－１～８）

IV層出土のものが３・５～８、III層出土のものが１・２、表採したのが４である。

１・３は、蓋内面にかえりが付く。１のかえりは、口縁端部より内側におさまり、３のかえりは、口縁端部より僅かに外側に出る。１の天井中央部には、宝珠様のつまみが付き、天井部から口縁部までは、緩やかに丸くなりながら下がる。４・５の口縁部は、外に開きながら下がり、端部は丸くなる。４の器壁は厚い。

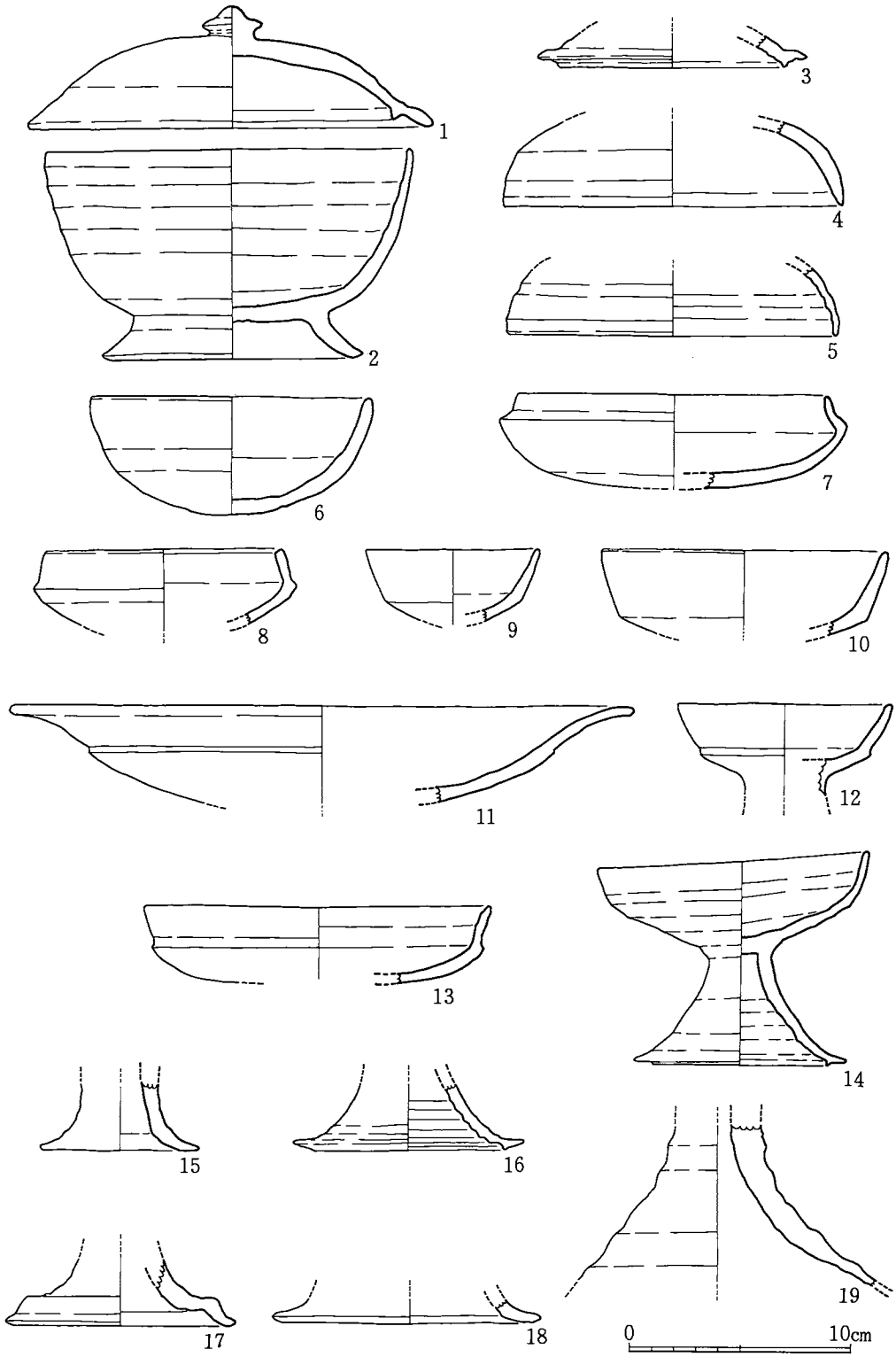
２は大きく外に開いた端部が方形を呈する高台が付く。高台は、方形の角の部分で接地する。体部は、内湾しながら外に開き丸い端部にいたる。６は丸底で、内湾しながら外に開く体部が丸い端部までのびる。７・８は、内傾するたちあがりをもつ。７のたちあがりは、中程で屈曲し、斜め上方にのびる。８のたちあがりは、直線的である。８の受部は、短くほぼ水平にのびる。７の底部は、中央部が平らで、丸くなって受部にいたる。

高坏（第46図－９～19）

IV層出土のものが９・11・12・13、III層出土のものが14・15・17、II層出土のものが16、表採したのが10・18・19である。

９・10・12・13の口縁部は、坏底部との境に段をもち、端部は丸くなる。９・10の口縁部は、直線的に立ち上がり、12の口縁部は、内湾ぎみに立ち上がる。13の口縁部は、短くほぼ垂直に立ち、外反して端部にいたる。

11の底体部は、内湾しながら丸く立ち上がり、口縁部との境で弱い段をなし、強く外反して



第46図　土師器実測図

丸い端部にいたる。

14の底体部は、ほぼ直線的に斜め上方にのび、口縁部との境で弱い段を形成する。口縁部は、内湾ぎみに立ち上がり、丸い端部にいたる。脚部は、外に開きながら下がり、脚端部は、ほぼ水平と垂直に短く突出する。垂直に突出した部分は、脚端部より僅かに下方に出る。

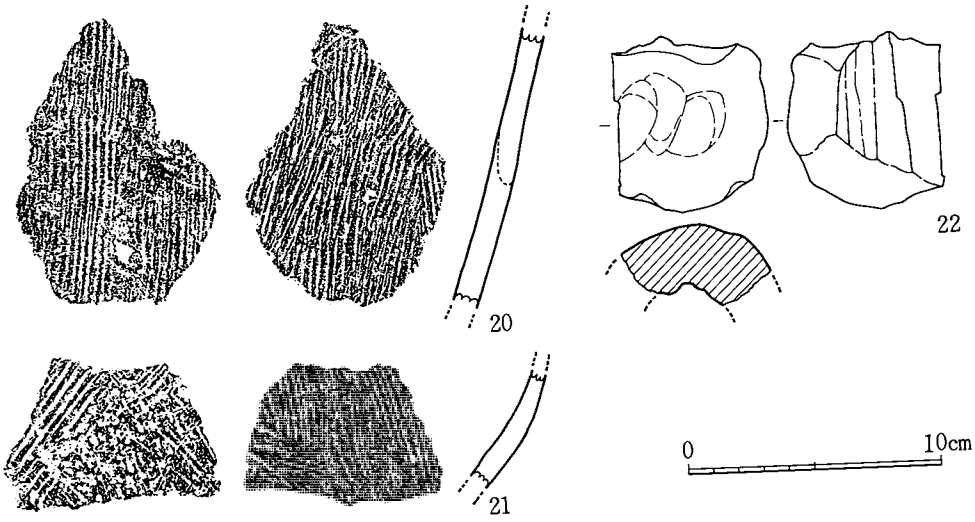
15～19は、外に開いた脚部である。15は斜め下方に下がり、端部近くで強く外反し、丸い端部にいたる。16の脚端部は、斜め上方にはねあがり、下端部は、短く突出する。この脚端部の形態は、須恵器のものに類似する。17の脚部は、端部付近で斜め下方に屈曲し、さらに、端部で短くほぼ水平に折れる。18の脚部は、強く外に開き、端部が丸くなる。19の脚部は、ほぼ垂直に下がり、強く外反しながらのびる。坏底部近くの脚部は、器壁が厚い。

甕（第47図－20・21）

土師器の甕片は、他のものに比べると出土数が少ない。20・21は、Ⅲ層出土の胴部片であり、内外器面とも粗いハケ目調整痕がある。20の外器面には、ススが付着している。

筒状土製品（第47図－22）

22は筒状をした土製品の破片である。外器面に指オサエの痕が残っている。推定径は、約7.7cmである。割れ口の器壁を観察すると、火を受けた痕跡が認められる。22はふいごの羽口の可能性がある。



第47図　土師器・土製品実測図

第8表　土師器・土製品観察表

No.	層	器種	法量(cm)	胎土	色調 外/内	焼成	ロクロ回転 ヘラ記号	調整	備考
1	Ⅲ	坏　蓋	A 14.6　B 5.5 G 18.4　H 1.3	雲母・細砂・微	淡橙	良		天井部½回転ヘラ削り、他は回転ナデ	つまみ有 2とセット
2	Ⅲ	高台付坏	A 16.7　B 9.4 E 11.8　F 1.6	雲母・白砂・中	淡橙	〃		底部は回転ヘラ削り、他は回転ナデ	1とセット

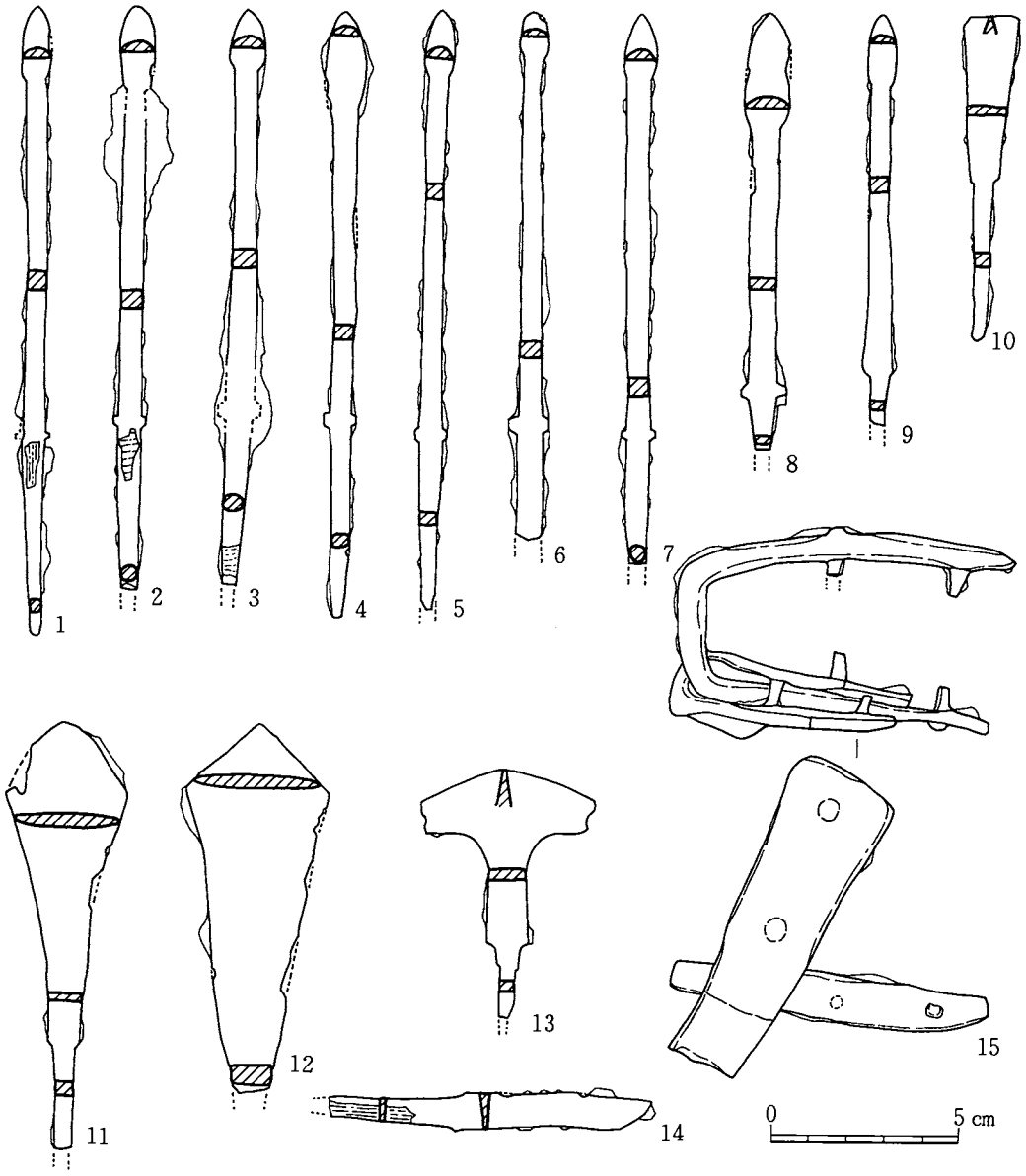
No.	層	器種	法量(cm)	胎土	色調 外／内	焼成	ロクロ回転 ヘラ記号	調整	備考
3	Ⅳ	坏蓋	A(10.1) B(1.5) G(12.1)	雲母・細砂・微	橙	〃		回転ナデ	
4	表	〃	A(15.2) B(3.8)	黒粒・白粒・砂・中	橙	〃		ヘラみがき	
5	Ⅳ	〃	A(15.0) B(3.0)	雲母・細砂・微	淡橙	〃		回転ナデ	
6	Ⅳ	坏	A 12.6 B 5.4	雲母・細砂・少	淡茶褐	〃		ヘラみがき	
7	Ⅳ	〃	A(13.9) B(4.3)	雲母・砂・微	黄橙／黒	〃		ヘラみがき	内黒
8	Ⅳ	〃	A(10.6) B(3.3)	雲母・赤色粒	黄橙／淡褐	〃		内器面ヘラみがき、外器面横ナデ	
9	Ⅳ	高坏	A(8.0) B(3.2)	雲母・砂・微	赤褐	〃		ヘラみがき	丹塗
10	表	〃	A(13.0) B(3.8)	黒粒・白粒・細砂・微	淡褐／黒褐	〃		ヘラみがき	
11	Ⅳ	〃	A(28.3) B(4.3)	雲母・細砂・微	淡褐	〃		ヘラみがき	
12	Ⅳ	〃	A(9.7) B(4.2)	雲母・砂・少	赤褐／淡茶褐	〃		ヘラみがき	丹塗
13	Ⅳ	〃	A(15.7) B(4.5)	混入物なし	暗褐色	〃		ヘラみがき	
14	Ⅲ	〃	A 12.6 B 18.3 I 8.6 J 5.4	雲母・砂・少	橙	〃		坏部底体部⅔ヘラ削り、他は回転ナデ	
15	Ⅲ	〃	I(7.0) J(3.0)	雲母・細砂・少	赤褐／淡茶褐	〃		外器面ヘラみがき、外器面、内器面脚底端丹塗	丹塗
16	Ⅱ	〃	I(8.7) J(3.1)	雲母	橙	〃		回転ナデ	
17	Ⅲ	〃	I(10.4) J(3.1)	混入物なし	淡黄橙	〃		回転ナデ	
18	表	〃	I(12.3) J(1.2)	雲母・白色粒・微	橙	〃		回転ナデ	丹塗
19	表	〃	J(7.3)	雲母・細砂・微	淡黄橙	〃		回転ナデ	
20	Ⅲ	甕	壁厚 1.0	雲母・角閃石・石英・石粒・中	淡黄褐／淡橙	〃		ハケ目	スス付着
21	Ⅲ	〃	壁厚 0.8	雲母・角閃石・砂・多	淡黄褐／淡灰褐	〃		内器面ハケ目、外器面平行タタキ	
22	Ⅳ	筒状土製品	推定径 7.7	雲母・角閃石・砂・多	茶褐色／赤褐色	〃		外器面指押さえ	火を受ける。ふいごの羽口？

鉄器

鉄鏃（第48図－1～13）

鉄鏃はすべて前庭部から出土した。1・4・8・9・11はⅢ層、2・3・5～7・10・12・13はⅣ層から検出した。

1～8は棘箆被片丸造鑿箭式の鉄鏃である。4・8の坏身部は、長く幅広で(坏身部長約2.5・2.9cm、坏身部最大幅約1.1・1.2cm)、1～3・5～7の坏身部は、短く幅狭い（坏身部長約1.6～2.2cm、坏身部最大幅約0.8～0.95cm)。箆被部の長さは、8が短く約6.9cmを測り、2～7はほぼ同じで10cm前後である。1の箆被部長は、約11.4cmを測り最大である。箆被部の最大幅は約0.6～0.75cmを測る。完形の茎部をもつものが1・4である（茎部長約5.2・5.1cm、茎部最大幅約0.55・0.5cm)。1・4以外の茎部残存長約1.3～4.4cm、茎部最大幅約0.5～0.7cmを測る。



第48図　前庭部出土鉄器実測図

1・2の茎部上位には、木質部が残存している。9は片丸造鑿箭式の鉄鏃であり、茎部の殆どを欠く（坏身部長約1.9cm、坏身部最大幅約0.7cm、篦被部長約7.5cm、篦被部最大幅約0.7cm、茎部残存長約1.3cm、茎部最大幅約0.5cm）。10は方頭広根斧箭式の鉄鏃である（坏身部長約4.4cm、坏身部最大幅約1.4cm、茎部長約4.2cm、茎部最大幅約0.55cm）。11・12は圭頭広根斧箭式の鉄鏃である。11は坏身部・茎部の一部を欠く（坏身部長約8.5cm、坏身部最大幅約3.2cm、茎部長約2.6＋αcm、茎部最大幅約0.55cm）。12は坏身部だけ残存している（坏身部長約9.7＋αcm、坏身部最大幅約3.3cm）。13は異形飛燕式の鉄鏃である。全体の形状はT字形を呈し、坏身部の左右

端部が半円状に抉られる（坏身部長約5.2cm、坏身部最大幅約4.7cm、茎部長約1.3＋αcm、茎部最大幅約0.4cm）。

刀子（第48図－14）

刀子は前庭部のⅢ層より出土し、茎部の先端を欠損している。茎部には木が部分的に残る。

刃部がやや内側にくぼむのは、刃部の磨研によるものと思われる（刃部長約5.2cm、刃部幅約0.8～0.9cm、茎部長約3.2＋αcm、茎部幅約0.5～0.7cm）。

馬具（第48図－15）

馬具は前庭部のⅣ層より出土した。15はU字形をした4個の鋲をもつ金具とそれに繋がる2個の鋲をもつ鉄板をまげた金具よりなる。U字形をした金具の内側には、鋲の周囲に木が付着している。U字形をした金具は、木心鉄張壺鐙の上部金具で、2個の鋲をもつ鉄板をまげた金具は、鐙鞦を固定するための金具であろう。

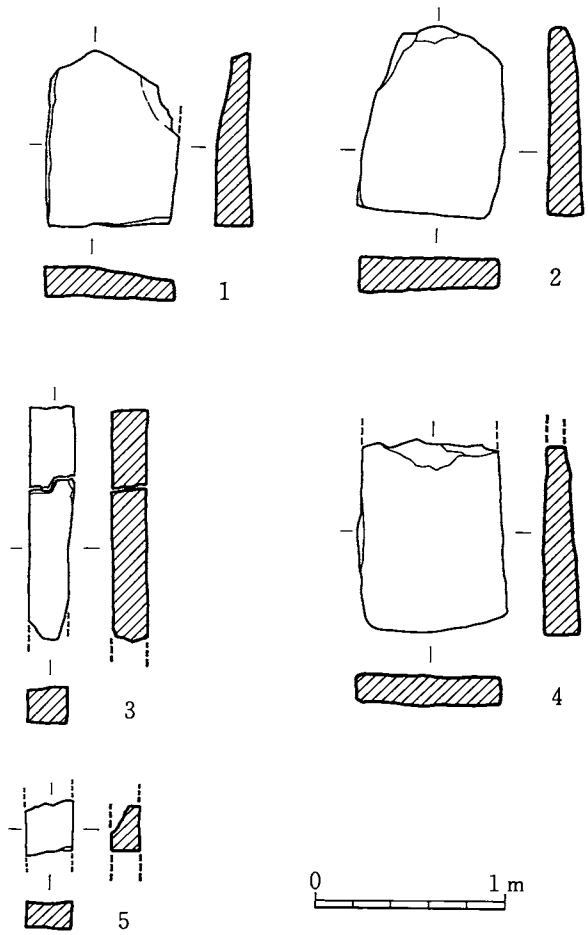
参考文献　後藤守一　「上古時代の鉄鏃の年代研究」『人類学雑誌』　第54巻第4号　1939年

（4）　石材について

1は前庭部出土で、閉塞石であろうと思われる（第49図）。両面に赤い彩色の跡が認められる。

2～5は重機により横穴墓入口が破壊された際の石材残欠である。2は49号－dの、4は49号－eの閉塞石である。3は49号－bの入口両側の角柱石である。5も3と同様の角柱石の破片であろうが、どの横穴墓に付属するものかは不明である。3・5とも全面丁寧な調整が施されている。

1～5はすべて凝灰岩製であるが、横穴墓の穿たれた崖の凝灰岩とは石質が異なり、きめが細かく緻密で、硬質である。横穴墓用の石材は、良質の物を選んで切り出したのであろうか。



第49図　石材実測図

7．小　　結

（1）前庭部より出土した須恵器の時期について

Ⅴ層出土の須恵器（第36図）

5の蓋には、他の須恵器よりも古い様相がある。天井部と口縁部との境には、外器面に稜がある。また、口縁端部の内側には段がある。5は、6世紀中葉の時期に考えられる。

1・2の坏身は、口径が小型化し、たちあがりが短く内傾しており、6世紀後半の時期に比定できる。

Ⅴ層出土の須恵器は、6世紀中葉～後半の時期である。

Ⅳ層出土の須恵器（第37・38図）

坏身には、(1) たちあがりが短く内傾するものと、(2) 器高が低く小型化し、たちあがりがさらに短くなるものとがある。(1) は6世紀後半、(2) は6世紀末～7世紀前半の時期に比定できる。

蓋には、(1) 天井部と口縁部との境が僅かにあるもの、(2) 蓋内面にかえりが付き、口縁端部より下方にのびるもの、(3) 蓋内面のかえりが短く、口縁端部より下方にのびず、内側におさまるものがある。(1) は6世紀後半、(2) は7世紀前半、(3) は7世紀中葉～後半の時期に考えられる。

高坏は、(1) 長脚で、スカシがあるものと、(2) 短脚で、脚端部が短く跳ね上がるものがある。

脚端部が短く跳ね上がる特徴は、八女古窯跡群の中で、塚ノ谷4号窯のものに酷似する[1]。(1) は6世紀中葉、(2) は6世紀後半の時期に比定できる。

Ⅳ層出土の須恵器は、6世紀中葉～7世紀前半の時期幅があるが、出土量が多く、中心になるのは、6世紀後半～7世紀前半の時期の須恵器である。

Ⅲ層出土の須恵器（第39～42図）

坏身は、(1) たちあがりが短く内傾するもの、(2) たちあがりがさらに短く内傾するもの、(3) 底部の中央部よりに比較的高い高台が付くものがある。(1) は6世紀後半、(2) は6世紀末～7世紀前半、(3) は7世紀後半の時期に比定できる。

蓋には、(1) 天井部と口縁部との境が僅かにあるもの、(2) 蓋内面にかえりが付き、そのかえりは短く、口縁端部より下方に出ないもの、(3) 蓋内面のかえりが消失し、口縁端部で下方に折れ曲がるものがある。(1) は6世紀後半の時期、(2) は7世紀中葉～後半の時期、(3) は7世紀後半～8世紀前半の時期に考えられる。

高坏は、(1) 長脚で2段のスカシがあるもの、(2) 短脚で、脚端部が短くのびるもの、(3) 短い脚部が大きく開き、脚端部で下方に屈曲するものがある。(1) は6世紀中葉の時期、(2)

は6世紀後半の時期、(3) は7世紀前半～後半の時期に比定できる。

長頸壺は、7世紀代のものであろう。

Ⅲ層出土の須恵器の時期は、6世紀中葉～7世紀後半の幅がある。その時期幅の中で、出土量より、中心となるのは、7世紀前半～後半の時期の須恵器である。

Ⅱ層出土の須恵器（第43図）

蓋坏には、6世紀後半から7世紀後半の時期幅がある。

長頸壺は、7世紀後半～8世紀初頭の時期であろう。49号－bの羨道部より出土した長頸壺は、7世紀後半～8世紀前半の時期に考えられる（第18図)。

Ⅱ層出土の須恵器は、6世紀後半～8世紀前半の時期幅があるが、7世紀後半～8世紀前半の時期の須恵器が殆どである。

表採した須恵器（第44・45図）

表採した須恵器の中で、最も古いものは1である。たちあがりが、比較的長く、強く内傾しない。時期としては、6世紀中葉が考えられる。

他の須恵器は、6世紀後半～7世紀後半の時期幅におさまる。

(2) 前庭部より出土したその他の遺物の時期について

土師器は、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層より出土した。土師器の時期は、各層に包含される須恵器の時期を大幅に前後するものでなく、ほぼ同時期である。

鉄鏃は、Ⅲ・Ⅳ層より出土した。鉄鏃の中で多数を占めるのは、頸部が長く、棘箆被をもつものである（棘箆被片丸造鑿箭式の鉄鏃)。この鉄鏃は、6世紀後半～7世紀前半の時期に考えられる[2]。

また、他の鉄鏃は、6世紀後半～7世紀後半の時期幅の中におさまる[3]。

註（1）　小田富士雄　「第3節　福岡県・八女古窯跡群の須恵器」『九州考古学研究　古墳時代篇』学生社　1979年

（2）　飯塚武司　「後期古墳出土の鉄鏃について」『研究論集　Ⅴ』　東京都埋蔵文化財センター1987年

（3）　註（2）に同じ。

参考文献　中村　浩　『和泉陶邑窯の研究』　柏書房　1981年
松本健郎　『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』　熊本県文化財調査報告　第48集　1980年
小田富士雄　註（1）に同じ。

（3）　横穴墓の築造時期と追葬期間について（第50図）

横穴墓の玄室内からは、時期を判断する遺物が出土していない。それで、横穴墓の築造時期と追葬期間については、前庭部出土の遺物を中心にして、横穴墓の構造を補足的に考える。この時期判断は、埋葬の度に遺物が伴ったことが前提となる。

前庭部・羨道部では、Ⅰ層～Ⅴ層を確認した。Ⅰ層は攪乱層で、Ⅱ層～Ⅴ層がプライマリーな遺物包含層である。Ⅱ層～Ⅴ層出土の遺物については、追葬時の攪乱による遺物の混入が認められ、遺物の時期幅がある。しかし、遺物の出土状況や出土量より、各層に包含される遺物の時期には、下位層が古く、上位層ほど新しくなる傾向がある（小結の(1)）。

最下層であるⅤ層は、49号－ｂの前庭部・羨道部だけに限って見られる。調査した４基の横穴墓の中で、49号－ｂ横穴墓は、このⅤ層の存在から、最初に築造されたと判断できる。その築造時期は、Ⅴ層出土の遺物より、６世紀中葉頃である。６世紀中葉頃の築造時期は、表採資料の中で、最古のものが６世紀中葉頃の時期であることからも頷ける。

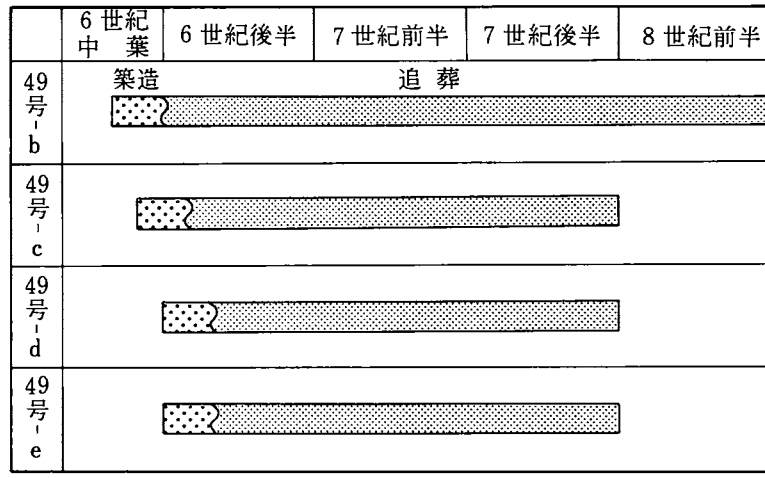
Ⅳ層より出土した遺物は、調査区のほぼ全面に広がる。その分布範囲は、49号－ｂの前庭部、49号－ｃの前庭部、49号－ｄの前庭部から49号－ｅ前庭部にかけての部分である。このⅣ層の遺物出土状況より、49号－ｃ・ｄ・ｅ横穴墓は、Ⅳ層形成段階で築造されたと考えることができる。また、Ⅳ層より出土した遺物は、６世紀中葉～７世紀前半の時期幅があり、その中心になるのは、６世紀後半～７世紀前半の時期である。

横穴墓の構造より見ると、49号－ｂ・ｃ横穴墓は、類似構造であり、また、49号－ｄ・ｅ横穴墓も似た構造をもつ。49号－ｂ・ｃ横穴墓と49号－ｄ・ｅ横穴墓との玄室構造と比べると、49号－ｄ・ｅ横穴墓の玄室構造には、簡略化現象が認められる。壁と天井の境、天井の棟線・軒先線、天井の棟から軒先へのびる線、玄室四隅の床面から壁にのびる線、これらの箇所でその簡略化現象が観察できる。49号－ｄ・ｅ横穴墓では、これらの境や線の表現が弱かったり、消失したりする。また、熊本県山鹿市に所在する湯の口横穴群では、簡略化した屍床の仕切りをもつ横穴墓が後出のものであることが、築造時期差に起因する玄室と羨道部の主軸がずれる現象より把握されている[1]。玄室構造面から、49号－ｂ・ｃ横穴墓が49号－ｄ・ｅ横穴墓より先に築造されたと考えられる。

Ⅳ層出土遺物の分布状況・時期や玄室構造の簡略化現象より、49号－ｃ横穴墓は、49号－ｄ・ｅ横穴墓よりやや先行して、６世紀の中葉～後半頃に築造されたと考えられる。また、49号－ｄ・ｅ横穴墓は、６世紀後半頃に築造されたと判断できる。

既に築造された49号－ｂ横穴墓に伴うと考えられるⅣ層出土の遺物は、追葬時のものである。また、49号－ｃ・ｄ・ｅ横穴墓の築造以後は、Ⅳ層出土遺物の時期幅と出土状況より、追葬があったと想定できる。

ここで、問題になるのが、追葬期間の終わりである。この問題を考えるには、Ⅲ層・Ⅱ層の出土遺物を検討しなければならない。



第50図　横穴墓の築造時期と追葬期間の想定模式図

Ⅲ層の遺物出土状況より、49号－b・c・d・eの4基の横穴墓に追葬があったと考えられる。Ⅲ層出土遺物の中心になるのは、7世紀前半～後半のものである。

この7世紀前半～後半の時期に、4基の各横穴墓で、追葬が行われたと判断できる。

Ⅱ層より出土した遺物は、49号－c前庭部の北側の段上から49号－b前庭部にかけて分布する。この遺物分布は、49号－b前庭部を中心にしたものであり、Ⅱ層出土の遺物は、49号－b横穴墓に伴うものと考えられる。

Ⅱ層の出土遺物は、7世紀後半～8世紀前半の時期に中心があることより、49号－b横穴墓に限って、8世紀前半まで追葬が行われていることとなる。

上記の築造時期と追葬期間についてまとめると次のようになる。調査を行った4基の横穴墓の中で、まず最初に49号－b横穴墓が6世紀中葉頃に、その次に僅かに遅れて、6世紀中葉～後半頃に49号－c横穴墓が、最後に、49号－d・e横穴墓が6世紀後半頃に築造された。追葬については、49号－c・d・eの横穴墓が7世紀後半で、49号－b横穴墓が8世紀前半で、終了している。追葬の回数については、層序・遺物の面から、把握できなかった。埋葬人骨は、49号－b横穴墓が3体、49号－c横穴墓が6体検出できた。また、49号－d横穴墓については、歯や丸玉の出土状況より、3～4体が埋葬されたと考えられる。1基の横穴墓で、1回の埋葬に1体を埋葬し、埋葬人骨が風化しないで残っていると仮定して、埋葬人骨より埋葬の回数を推察すると、3～6回の埋葬を行ったと思われる。

註（1）　中村幸史郎　『湯の口横穴群（Ⅰ）』 山鹿市立博物館調査報告書　第5集　1986年

中村幸史郎　『城横穴群』 山鹿市立博物館調査報告書　第6集　1987年

（4） 前庭部について

遺物の接合状況について（第51図・第９表）

前庭部出土の遺物については、玄室内にあったものが掻き出され、その時に破砕したとも考えられる。しかし、玄室内を精査し、玄室内の排土を水洗した結果、玄室内での出土遺物に須恵器・土師器は、含まれない。元々、玄室内に遺物があったのであれば、少なくとも数片の遺物が残るはずである。前庭部の遺物は、当初から前庭部にあったものと考える。

前庭部のII層～V層より出土した遺物には、接合関係が多く見られる。接合状態は、完形になるものから、小破片の２個体だけが接合するものまである。完形で出土したのは下記の通りであり、この中には、接合して完形になったものは、含まない。

II層　須恵器－坏身１点

III層　須恵器－坏身９点・蓋４点

IV層　須恵器－坏身３点・蓋２点

完形で出土したものは、須恵器の坏身・蓋に限られ、その数は遺物の出土量からすると、非常に少ない。また、前庭部より出土した遺物は、小破片が多く、完形で出土するものと比べると、大きな違いがある。

そこで、II層～V層で出土した遺物の接合状況を調べた。接合した破片の分布状況・接合関係は、次のようになる（第51図）。

(1) 49号－ｂ前庭部より出土した破片が接合する。

(2) 49号－ｂ・ｃ前庭部より出土した破片が接合する。

(3) 49号－ｃ前庭部より出土した破片が接合する。

(4) 49号－ｂ・ｃ・ｄ前庭部より出土した破片が接合する。

(5) 49号－ｄ前庭部より出土した破片が接合する。

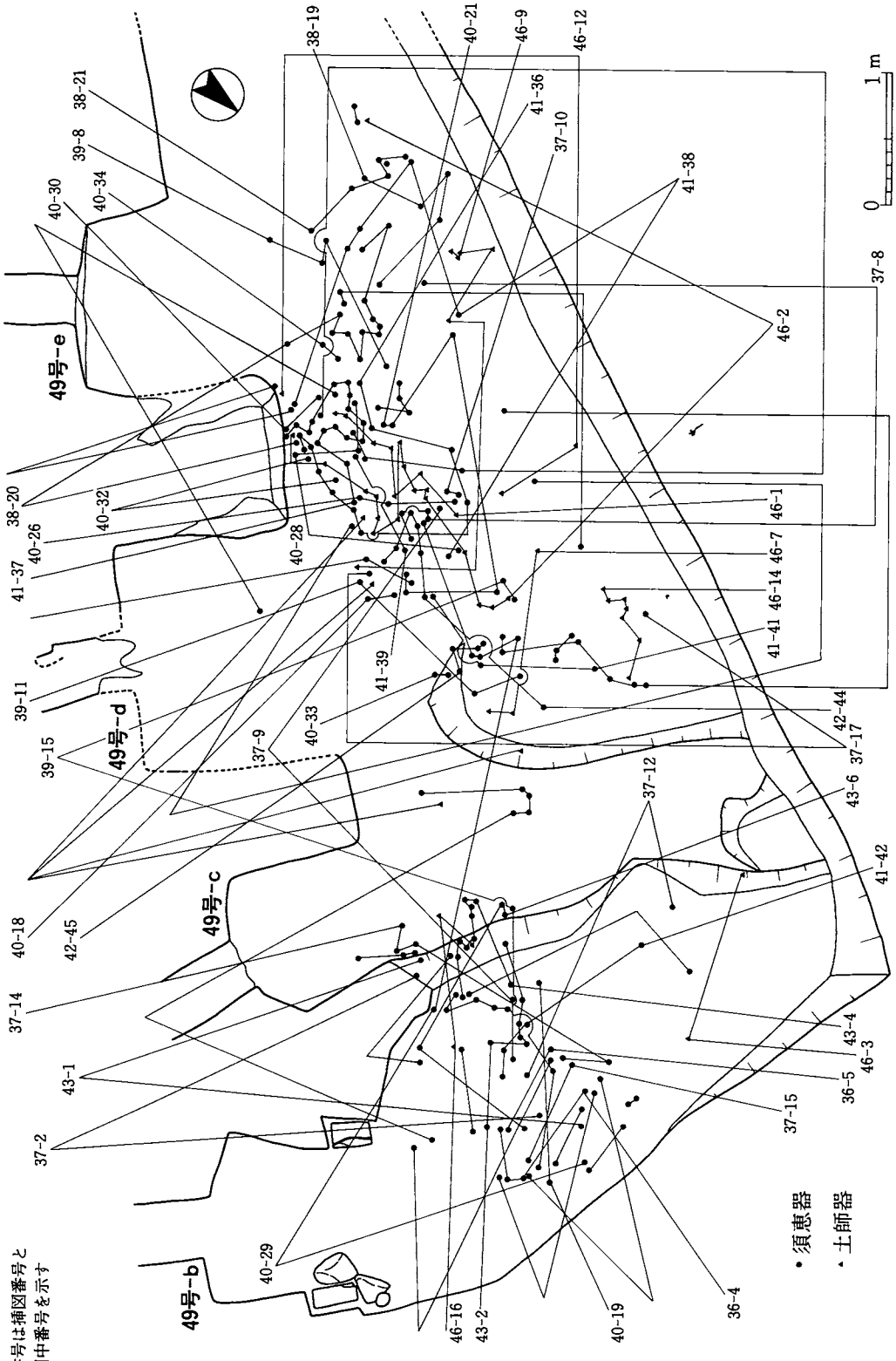
(6) 49号－ｄ前庭部と49号－ｄ・ｅ前庭部中間地点より出土した破片が接合する。

(7) 49号－ｅ前庭部より出土した破片が接合する。

接合関係が多く見られるのは、(1)・(3)・(5)・(7)で、(2)・(6)は少ない接合関係である。(4)になると、さらに接合関係が少なくなる。要するに、各前庭部の範囲内で出土した破片間で多くが接合し、異なる前庭部より出土した破片は、接合する例が少ない。

次に接合した破片間の距離を検討する。接合する破片間の直線距離（２点以上の破片が接合した場合は、最も離れている破片間の距離）を実測図で測り、その平均値を層と器種とに分けて出してみた（第９表）。

V層　蓋は１点だけの資料であるが、坏身よりも離れた距離で接合している（約1.3m）。坏身の接合距離は、約0.59mを測る。



第51図　Ⅱ層～Ⅴ層での遺物接合関係図

Ⅳ層　須恵器では、甕が最も離れた距離で（約1.67ｍ）、その次に、坏身・蓋がほぼ同じ距離で接合する（約1.36m・約1.34ｍ）。高坏（資料１点）が最も短い距離で接合する（約0.75m）。

土師器では、高坏が最も離れた距離で（約1.50m）、その次に、坏身（資料１点）・蓋がほぼ同じ距離で接合する（約1.30m・約1.29m）。

Ⅲ層　須恵器では、最も離れた距離で接合するのが甕で（約1.40ｍ）、その次に、坏身（資料１点）・壺・高坏がほぼ同じ距離で接合する（約1.30m・約1.26m・約1.24ｍ）。蓋が最も短い距離で接合する（約1.05ｍ）。

土師器の資料は、すべて１点である。坏身が最も離れた距離で接合し（約3.7ｍ）、その次に、蓋・高坏とつづく。（約1.20m・約0.70ｍ）。

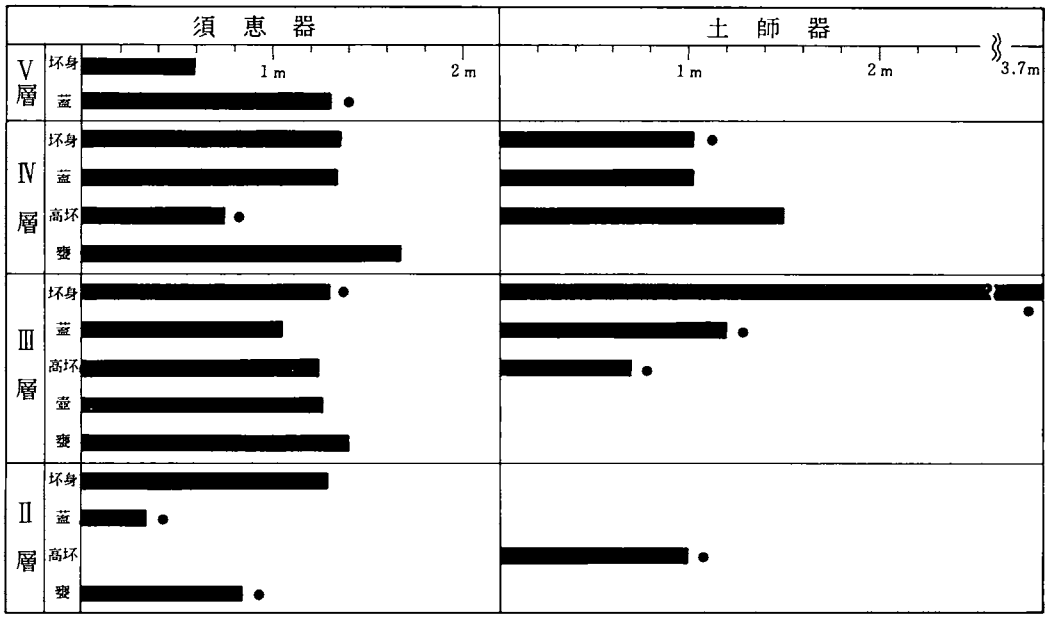
Ⅱ層　須恵器では、坏身が最も離れた距離で接合し（約1.29ｍ）、その次に、甕（資料１点）・蓋（資料１点）が接合する（約0.84m・約0.34ｍ）。

土師器では、高坏（資料１点）が接合している（約1.0ｍ）。

以上の結果をまとめると、須恵器では、甕が最も離れた距離で接合する。甕以外の多くの須恵器は、１ｍ前後の距離で接合する（Ⅴ層の坏身、Ⅳ層の高坏、Ⅱ層の蓋を除く）。

土師器では、接合距離の長短が著しい。Ⅲ層の坏身・高坏を除けば、他のものは、１ｍ前後の距離で接合するものが多い。

第９表　遺物間の接合平均距離測定表



●印は、資料が１点のみのもの

前庭部の調査は、採土箇所に限って行ったために、前庭部全体を調査していない。けれども、前庭部調査区の西側では、出土遺物が少なくなる傾向にある。前庭部は調査区の西側に少しのびる程度であると思われる。それで、調査範囲で出土した遺物の分布や出土状況は、前庭部全体の状況とあまり大差ないものと考える。

ここで一つの実験を試みた。それは、前庭部の床面と同じような場所で、須恵器に近い陶器を破砕する実験である。この実験は、設備が整った実験室で行ったものでなく、実験回数も充分なものでない。ただ、この実験では、割れたものと故意に割ったものとの破片間の距離差を見るのを主目的としたものである。その結果は、下記のようになった。

実験（1）　土圧が加わるのと同じ状態で、陶器の上に圧力をかけた。

結果　陶器の破片は、径約24cmの範囲内に広がった。

実験（2）　陶器を地面に力いっぱい投げつけ破砕させた。破片間の距離は、1個の破片を起点にして測定した。

結果　破片間の距離は、次の通りである。

4・5・6・10・14・16・19・25・45・50・190・210・330（単位cm）

実験（3）　実験（2）の時より少し力をぬいて陶器を投げ破砕させた。破片間の距離は、1個の破片を起点にして測定した。

結果　破片間の距離は、次の通りである。

19・22・26・28・40・78・82・112（単位cm）

実験（2）・実験（3）で得られた結果の中で、最も離れている破片間の距離は、実験（2）で330cm、実験（3）で112cmである。この数値と第9表の測定結果とを比較すると、112cmの破片間の距離は、前庭部出土遺物の殆どが1m前後の接合距離をもつことに対応し、330cmの破片間の距離は、Ⅲ層出土の土師器の坏身の接合距離に対応する。

この実験（2）・実験（3）の結果と第9表の測定結果との比較、さらに、実験（1）の結果を合わせて考えると、前庭部より出土した遺物の破片は、故意的に割った可能性が高い。完形で出土した須恵器の坏身・蓋は、故意的破砕の対象にならなかったと思われる。また、須恵器の中で、甕が最も離れた距離で接合するのは、甕が他の器種より大型であるため割れやすく、故意的破砕の際に、遠くに破片が飛んだことによるものと考えられる。

遺物の配置状況の復元について

遺物の接合状況を検討し、完形で出土した須恵器の坏身・蓋以外の遺物は、故意的破砕を受けた可能性が高いと考えた。ここで問題となるのが、完形で出土した須恵器の坏身13点・蓋6点である（前庭部Ⅱ層・Ⅲ層・Ⅳ層出土）。

7．小　　結

完形で出土した須恵器の坏身・蓋は、すべて前庭部に置いた状態で出土した。坏身はすべて底部を下にした状態で、蓋は天井部を上にしたものが殆どで、１点が天井部を下にした状態であった。これらの須恵器の坏身・蓋は、前庭部で故意的破砕行為が行われた時、破砕対象にならず、前庭部に据えられたままであったと考えられる。

また、前庭部出土遺物の分布・接合状態を細かく見ると、ある程度まとまった状態で、破片が分布しそれらが接合している例がある。さらに、破片の分布・接合状態は、器種ごとにいくつかのグループに分けることができる。

完形で出土した須恵器の坏身・蓋と遺物破片の分布・接合状態を合わせて考えると、前庭部より出土した遺物は、一度前庭部に据えられ、その後に故意的破砕を受けた可能性が高いと思われる。ここでは、遺物が多く出土したⅢ層・Ⅳ層で、前庭部出土遺物の配置状況の復元を試みてみる。復元については、破片の分布・接合状況を検討し、破砕を受ける以前に遺物が据えてあったと思われる箇所を判断した。

Ⅲ層出土遺物の配置状況の復元について（第33・34・52図）

Ⅲ層出土遺物の中では、遺物が密集する49号－ｄ前庭部から49号－ｅ前庭部にかけての部分について、遺物の配置状況の復元を試みる。この部分は、遺物の出土状況から、大きく次の二つグループに細分できる。(1) 49号－ｃ・ｄ前庭部の境にある段の下にある遺物分布グループ。(2) 49号－ｄ・ｅ前庭部の中間地点を中心とし、その周囲の北・西・南側部分に広がる遺物分布グループ。

第52図　Ⅲ層出土遺物配置状況復元図

(1) の遺物分布グループ

49号－ｃ・ｄ前庭部の境にある段がなくなる付近に、須恵器の甕があり、甕を中心にして、その周囲に須恵器の坏身・蓋・高坏を配置したと思われる。その箇所より西側に少し離れた地点に、土師器の高坏を据えたと考えられる。

(1) グループの遺物群は、その配置場所より、49号－ｄ横穴墓に伴うものと思われる。

(2) の遺物分布グループ

49号－ｄ・ｅ前庭部の中間地点に壺（４個体）が置かれ、それらの壺を中心にして周りに壺以外の器種の須恵器・土師器、鉄製品が据えられたと思われる。壺の北側には、須恵器の甕・坏身・蓋、土師器の坏身・蓋（セットと考えられる）、鉄鏃が置かれたのであろう。壺の西側には、須恵器の坏身・蓋・高坏、鉄鏃が据えられたと考えられる。また、壺の南側には、須恵器の坏身・蓋・高坏、鉄鏃が配置されたと思われる。さらに、壺の南側に配置された遺物群より南側に少し離れた箇所には、須恵器の坏身・蓋と刀子が置かれたであろう。

(2) グループの遺物群は、49号－ｄ・ｅ前庭部の中間地点にある壺を中心に分布することより、49号－ｄ・ｅの２基の横穴墓に伴うものか、２基のうち１基の横穴墓に伴うものではあるが、どちらの横穴墓に伴うかが現状では判らないか、の何れかである。

Ⅳ層出土遺物の配置状況の復元について（第31・32・53図）

Ⅲ層の (2) 遺物分布グループと同様に、Ⅳ層出土遺物では、49号－ｄ前庭部から49号－ｅ前庭部にかけての遺物集中出土部分について、遺物の配置状況の復元を試みる。

第53図　Ⅳ層出土遺物配置状況復元図

7．小　　結

この遺物集中部分では、49号－d・e前庭部の中間地点から49号－e前庭部の北側寄りの箇所にかけて置かれた甕を中心にして、周囲に鉄鏃・馬具が配置されたと思われる。さらに、鉄鏃・馬具の周りに、甕以外の器種の須恵器・土師器が置かれたであろう。まず、甕の南・北側からみると、中心の甕寄りに、須恵器の坏身・蓋が、それらのさらに外側に、須恵器の高坏が据えられたと思われる。甕の西側では、土師器の坏身・蓋・高坏が置かれたであろう。

この49号－d前庭部から49号－e前庭部にかけての遺物群は、Ⅲ層の場合と同様に、49号－d・eの2基の横穴墓に伴うものか、どちらか1基の横穴墓に伴うものではあるが、現状では判断がつかないか、の何れかである。

まとめ

前庭部より出土した遺物について、今まで検討したことをまとめると、次のようになる。

Ⅲ層・Ⅳ層の49号－d前庭部から49号－e前庭部にかけての部分で、遺物配置の復元を試み、その結果、ある程度規則性のある遺物配置をする行為があったと考えた。また、復元を試みた箇所以外の前庭部やⅡ層・Ⅴ層の前庭部でも、遺物を配置する行為が行われたと思われるが、遺物の出土状況・接合状態を判断すると、Ⅲ層・Ⅳ層の復元箇所のような規則性のある遺物配置は行わなかったと考えられる。ただし、Ⅱ層の49号－b前庭部では、羨道部の前面で、須恵器の坏と坏身が対応するかのような配置状況がある。

つまり、前庭部では、遺物を配置する行為が行われ、その後、遺物を故意的に破砕する行為が行われたと想定することができる。

ここで、熊本県鹿本郡植木町に所在する亀甲東第23号横穴墓の例を取り上げる。この横穴墓の前庭部では、多くの遺物が出土し、墓前祭があったと考えられている[1]。

亀甲東第23号横穴墓の前庭部の場合と同様に、今回、復元を試みた前庭部での遺物配置から遺物破砕までの行為は、埋葬儀礼である墓前祭の一過程ではなかろうか。この墓前祭が、Ⅱ層～Ⅴ層の前庭部で行われたと考えられる。Ⅱ層～Ⅴ層の各層より出土した遺物は、時期幅をもつことより、一度の墓前祭に伴うものばかりでなく、複数の墓前祭に伴う可能性もある。

この墓前祭については、次のことが課題となっている。黄泉国の人々との共食や共用を禁忌し、黄泉国の人々と同族となることを防ぐために、現国の人々は、どのような方法をとったかということである。例えば、食物などを盛った容器は、目的が終わった時、破砕したり、穿孔して液体を流してしまうとかの具体的な例を求めることが重要であるとされている[2]。ここで、瀬戸口横穴墓群の前庭部で想定した遺物の故意的破砕行為は、現国の人々が黄泉国の人々と同族となることを防ぐために行った墓前祭での一行為であると位置付けることができるであろう。

註（1）　国分直一　「西南日本の複葬」『環シナ海民族文化考』　慶友社　1976年
　（2）　斉藤　忠　「総括2　日本の葬・墓制の概観」『東アジア葬・墓制の研究』　第一書房　1987年

（5）　横穴墓の閉塞状況について

今まで述べた前庭部の遺物出土状況と異なるのが、49号－b横穴墓の閉塞石の前面より出土した直刀と長頸壺である。直刀と長頸壺は、羨道部・前庭部のII層より検出し、最後の埋葬に伴うものである。直刀は、ほぼ完形で、羨道部の側壁と並列し、横位の状態で出土した。長頸壺は、羨道部の右側壁と接して、つぶれた状態で出土した。長頸壺は、据えてあったものが横倒しになったと思われる。直刀と長頸壺の出土状態をそれらの周囲も含めて検討すると、直刀と長頸壺は、閉塞石の前面を覆う安山岩の礫と同時に置かれたものであり、閉塞行為に伴うものと考えられる（第14図）。

閉塞行為に伴って、安山岩の礫と同時に置かれた直刀と長頸壺は、前庭部で行われたと考えられる故意的破砕に伴う遺物片とその性格が異なるものと思われる。

ここで、横穴式石室で行われる埋葬儀礼の一過程で、閉塞行為に伴うものである「コトドワタシ」の儀礼[1]を考えてみる。横穴式石室と横穴墓とは、類似の構造・空間をもち、両者で行われる埋葬儀礼には、同じものや共通するものがあると考える。

つまり、この49号－b横穴墓の閉塞石の前面で行われた閉塞に伴う行為は、「死者に対し現世との別処を宣し、死霊を黄泉国すなわち石室内に封じこめる呪的儀礼」である「コトドワタシ」の儀礼の一種ではなかろうか[2]。

註（1）　白石太一郎　「ことどわたし考」『橿原考古学研究所論集』創立35周年記念　吉川弘文館　1975年
（2）　註（1）に同じ。

（6）　横穴墓の構造について

壁と天井部について

今回、調査した4基の横穴墓の構造は、大きく次の二つに分けることができる。（a）玄室内が家形構造になるもの（49号－b・c横穴墓）。（b）玄室内の家形構造が簡略化したもの（49号－d・e横穴墓）。

（a）家形構造について

玄室内の壁から天井部分にかけて、家形表現が見られる。壁と天井は、異なる角度をもつ面で表現され、壁と天井との境には凹線がある。天井部分では、棟線や軒先線、棟から軒先へのびる線が凹線で表現される。家形構造を表現した線は、すべて断面形がV字形を呈した明確な線である。

玄室の横断面形を見ると、壁は外に膨らみ、内傾しながら立ち上がり、天井部との境までのびる。天井部は、僅かに外に膨らみながら、壁より強く内傾して、棟部にいたる。

（b）簡略化された家形構造について

玄室内に、凹線で表現された明確な棟線や軒先線、棟から軒先へのびる線が見られない。壁と天井の境も不明瞭であり、角ばらない。

玄室の横断面形は、壁から天井の最高部まで、外に膨らみながら、内傾して丸くのびる。

玄室の横断面形に見られる（a）・（b）の壁・天井部の構造は、肥後型横穴式石室内の割石を持ち送りにした穹窿形の天井構造に類似するものであり、肥後型横穴式石室の天井構造を規範にしたものと考える。

熊本県鹿本郡鹿央町岩原大野原に所在する桜ノ上横穴群の第Ⅰ－2号横穴墓は、特異な天井構造をもつ。第Ⅰ－2号横穴墓は、複室構造であり、前室の天井構造は、まさに横穴式石室の天井構造を規範にしたものである。前室の入口側の天井部は、下半分が凝灰岩を加工したものであり、上半分が加工した凝灰岩の上面に自然石を持ち送りにして積み、その上部に自然石の天井石を載せる。前室の羨門部側の天井部は、凝灰岩を加工して、石積みの状態を模倣している[1]。

註（1）高木正文『熊本県装飾古墳総合調査報告書』　熊本県文化財調査報告　第68集　1984年

屍床区分について

今回調査した4基の横穴墓の屍床は、三つに区分され、「コ」の字形に配置される。屍床の仕切は、凝灰岩を加工して、造り出されている。小田富士雄氏は、「コ」の字形に三つの屍床を配置するのは、肥後型横穴式石室の屍床構造を直写したものであり、石室墓と同義であるとされた[1]。

熊本県山鹿市城付城に位置する付城横穴群の第67号横穴墓は、三つの屍床をもち、左右屍床の仕切の一部は、硬質の凝灰岩の切り石や割り石を用いて築造している。また、奥屍床にある石屋形も凝灰岩の切り石を使って組み立てている[2]。

熊本県鮑託郡北部町大字貢字扇田にある扇田横穴群の第7号横穴墓は、玄室の床面全体に安山岩を主体とする板石を敷き、安山岩の板石を用いて、三つの屍床を仕切っている。奥屍床の仕切には6枚、左屍床の仕切には4枚、右屍床の仕切には3枚の板石を使っている[3]。

扇田横穴群の第7号横穴墓の屍床区分については、肥後型横穴式石室と同じであり、付城横穴群第67号横穴墓の屍床区分は、肥後型横穴式石室の屍床構造を規範にしたものである。また、付城横穴群第67号横穴墓の石屋形も横穴式石室の石屋形を規範にしたものである。

この2基の横穴墓の屍床構造をみると、板石や切り石を使わずに、凝灰岩を加工して造り出された屍床の仕切も、小田氏が説くように、肥後型横穴式石室の屍床構造を規範にしたもので

あると考えることができる。

註（1）　小田富士雄　「九州の横穴墓序説」『九州考古学研究　古墳時代篇』　学生社　1979年
（2）　隈　昭志　「付城横穴群」『五ッ穴横穴群』　熊本県文化財調査報告　第34集　1979年
　　高木正文　『熊本県装飾古墳総合調査報告書』　熊本県文化財調査報告　第68集　1984年
（3）　富田紘一　『扇田横穴群発掘調査報告書』　熊本市教育委員会　1983年

羨道部の角柱について

49号－b横穴墓の羨道部には、加工された凝灰岩の角柱が据えられていた。この角柱は硬質で、横穴墓が穿たれた凝灰岩とは石質が異なり、別地点の凝灰岩を用いている。調査箇所に隣接する横穴墓の羨道部には、二本の角柱が据えられ、その上部に角柱が載せられていた痕跡（スタンプ）がある。散在する石材の量より判断すると、49号－b横穴墓の角柱の上部にも、角柱が載せられていた可能性がある。

角柱が据えられている箇所には、横穴墓から凝灰岩が続いており、角柱が凝灰岩の不足を補う形で使われたのではない。角柱を据えることに意味があると思われる。玄室内の壁や天井、屍床区分が横穴式石室の構造を規範にしたことより、この角柱を据えることも横穴式石室の構造に関連があると思われる。横穴墓の羨道部に据えられた角柱とその角柱の上部に載せられた角柱は、横穴式石室の羨門の両脇にある袖石・楣石を表現したものであろうか。

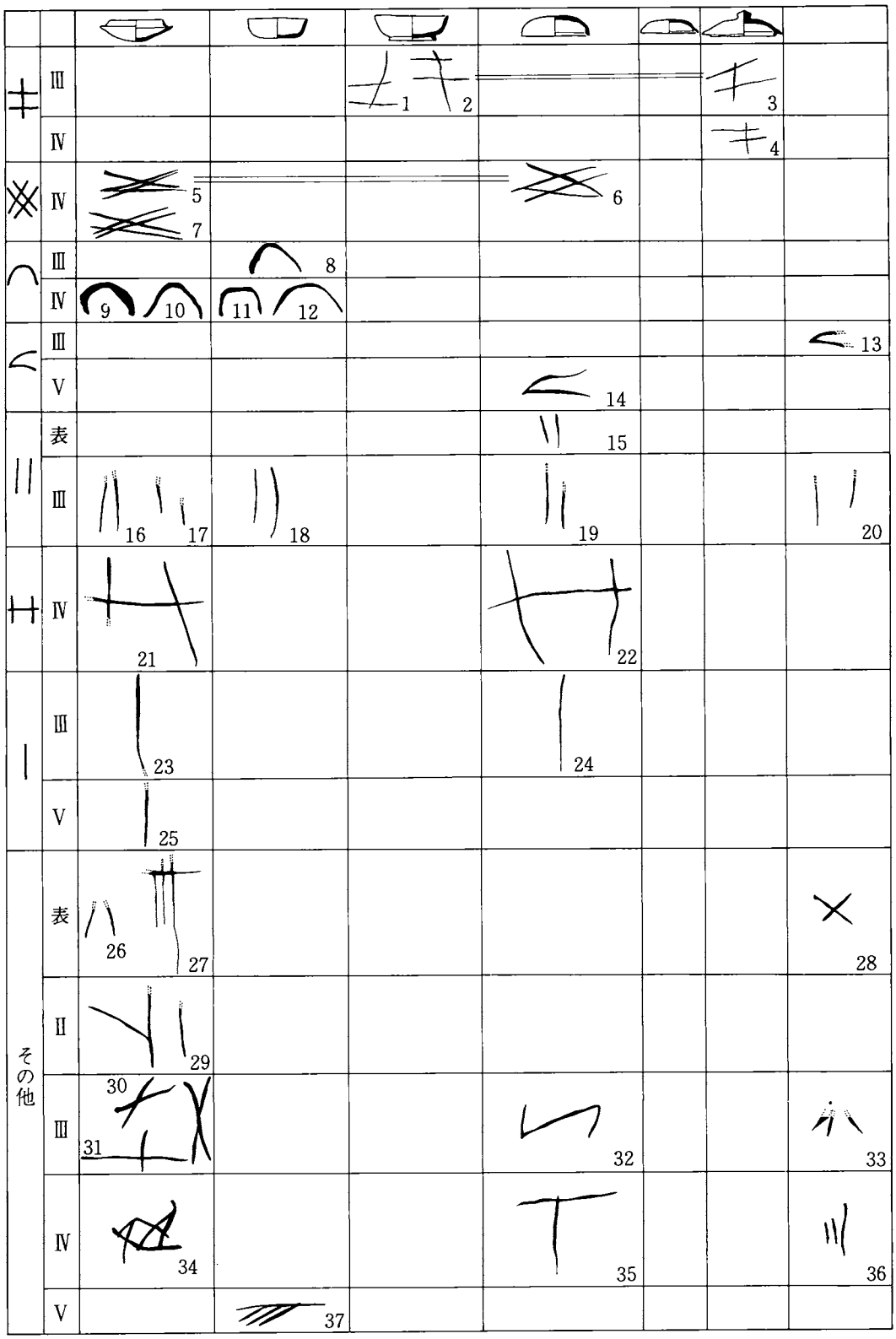
（7）　ヘラ記号について（第54・55図）

ヘラ記号の記された須恵器は、実測不可能な破片も含めて37点であった。

ヘラ記号を有する須恵器を器種別に分類すれば、坏身が最も多く22点、坏蓋が10点、器種不明を含むその他5点である。また、坏身の中では受けを有するものが、坏蓋の中ではかえりのないものが多い。坏身と坏蓋でセット関係になると思われるものが2組ある。

37個のヘラ記号を形態から分類したのが第43図、その記号の記された土器の出土状況を平面的に追ってみたのが第44図である。ただし、これは便宜的なもので、必ずしも同種のヘラ記号であると判定できるわけではない。同種のヘラ記号として認定してよいと思われるのは𐌷・✡・∩の三種である。

𐌷は土器の内器面隅にごく細い鋭利な線で記されている二本の平行線をひいたのち、もう一本の線を交差させている。1～3はⅢ層、4はⅣ層出土であるが[1]、宝珠つまみを持ちかえりを有する蓋と高台付の坏という器種、器形、蓋の天井部のみかき目を施すという手法、焼成、胎土とも近似しており、又、2・3はセットになると考えられ、1～4は、同時に作られたと思われる。出土地点は近接している。



第54図　ヘラ記号集成図（原寸の約30％大）

✲は先端が細目のヘラを用い、土器底部、あるいは天井部の真中に記されている。5・6はセットになると思われ、7も5と器形、色調、焼成、胎土とも近似し、同一層から出土していることから、同一窯の産である可能性はかなり高い。出土地点はかなり離れており、各々の破片も広い範囲に散っている。

∩は先が丸いヘラで底部と体部の境目付近に力強く描かれている。使用されたヘラの太さには若干の違いが認められる。Ⅲ層より出土した8のみは、器形、色調、調整手法が他の4点と異なり、出土地点も離れている。Ⅳ層より出土した9～12は、いずれも明灰色を呈し、やや脆弱な焼成で、器形、胎土、調整手法も類似し、同一時に製作された可能性がある。出土地点は近接している。10は2ヶ所に同様のヘラ記号が認められる(第37図－4)。一つは線が細く弱く、記号の端部が底部に向かって開いている。他は、記号の端部は体部に向かって開いており、くっきりと記されている。8・9・11・12のヘラ記号の向きは後者と同じであることを考えれば、後者は前者のヘラ記号を訂正したものではなかろうか。

//については短いもの（11）と長くなるもの（16・18・20）がある。15・18・19・20は天井部、底部の端に記されている。20は二本の線の間隔が広く線も細く、他のヘラ記号の一部であるかもしれない。15は表採、あとはすべてⅢ層の出土である。

++は天井部、底部の中央に大きく記されており、一本線を先に、のちに二本の平行線を引いている。21は太目の鋭利なヘラを用いて、鮮やかに記されている。

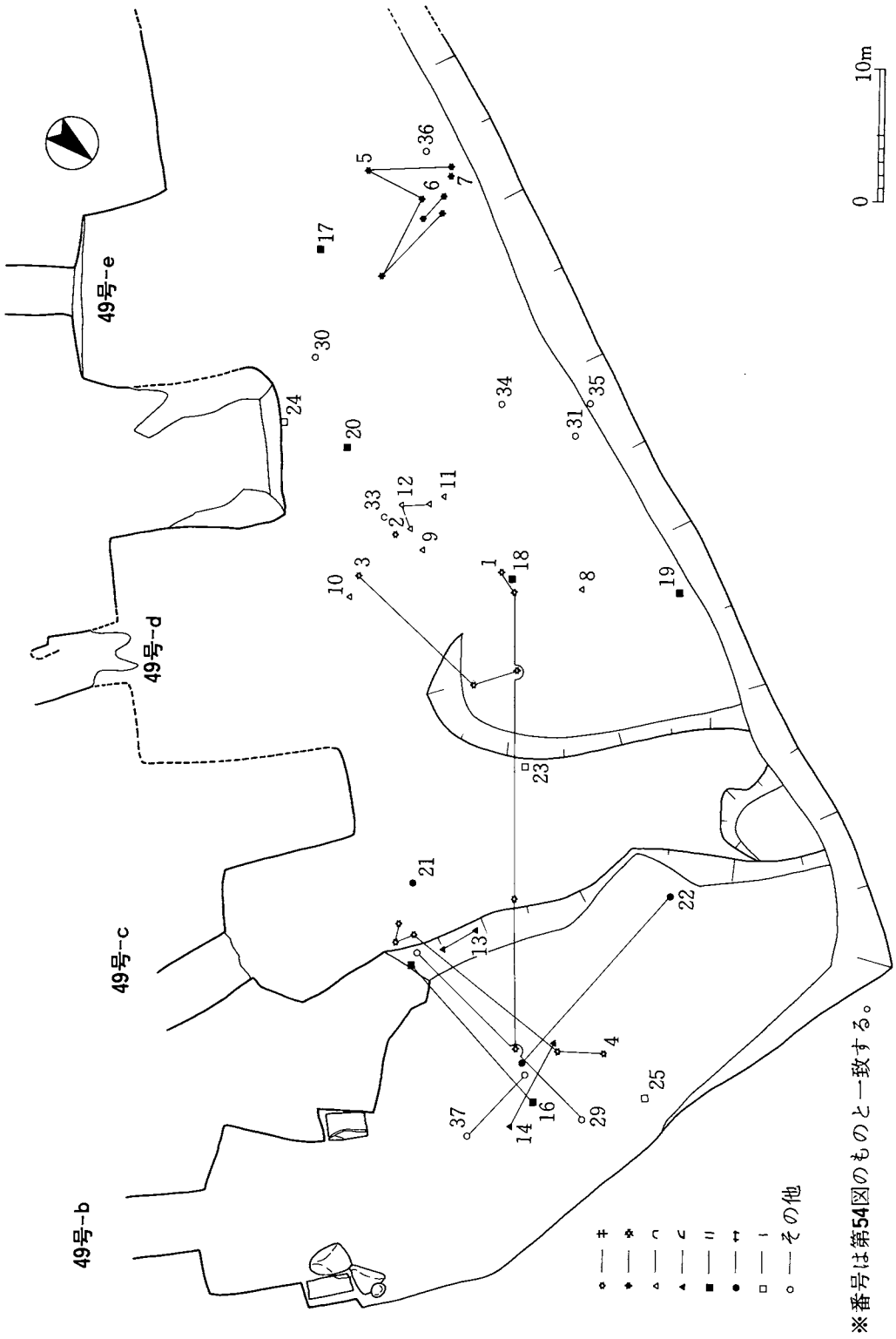
∠のうち14は静止ヘラ削りされた天井部のほぼ中央に記されている。13は破片であり蓋になると思われる。回転ヘラ削りの調整が施されている。

|はⅢ層出土のもの（23・24）は長く、Ⅳ層出土のもの（25）は短い。また、記入場所も中央部のもの(24・25)と、端のもの(23)があり、使用されたヘラも鋭利であるが異なる。

上記以外に同一形態のものが認められないヘラ記号を、その他の項に層ごとに並べた。27はごく浅く記されている。30・34はヘラ切り未調整の底部中央に荒く描かれている。29・31・32・35・37は鋭利なヘラでシャープに描かれており、37は長線をひいた後に三本の斜線を入れている。33は高台付坏の外器面に36は高坏の脚部外器面に記されている。28は坏の頸部に文様風にヘラで記されており、復元すれば90度ごとに4ヶ所の×が並ぶと思われる。

以上、37個のヘラ記号について簡単に説明を加えた。これらのヘラ記号を持つ土器の分布状況を見ると、✲と∩がより近接して出土していることがわかる。この二種は同時に製作した可能性のあることは前述したが、✲はⅣ層から∩は器形の異なる1点を除いてⅣ層から出土しており、同一窯で焼いた同一の器種をひとまとめに並べた様子が観察できる。∩は49号－dに✲は49号－eに伴うものと思われる。

これに対して、ナはⅢ層出土で[1]、✲・∩とは様相を異にしており、かなり破片が散乱しており、元位置の想定が困難である。これはⅣ層とⅢ層という層、つまり時期による違いであろう



第55図　ヘラ記号をもつ須恵器分布図

か。あるいは４は49号－ｃに、１・２・３は49号－ｄに伴うものであろうか。

それ以外のヘラ記号については、同一のヘラ記号と認定するのが困難であり、またその分布状況にも今のところ際立った規則性は見られない。

今回の調査で出土した土器のうち、ヘラ記号を有するものは37点で、点数に比して記号の種類も多く、全体的に資料不足で充分な分析を加えるに至らなかった。

註（１）　４はⅣ層であるが、必ずしも層序は信用できない。本文P43参照。
※この「(7)ヘラ記号について」は、本山が執筆を担当した。

８．４９号－ｃ横穴墓の彩色について（第56・57図）

今回調査された横穴墓４基のうち、４９号－ｃ横穴墓に赤色顔料が塗られていることが確認された。壁面がもろく、また雨水の浸透などにより、保存状態は良くなったが、四つの壁面とも認められた。また各壁面を細かく観察すると、全面塗られていたのではなく、明らかに塗られた部分と塗られていない部分があることが分かった。従って、本来は赤色顔料で図文が描かれていたものと判断した。しかしその図文の復元は極めて困難である。ここでは赤色顔料の残存状態をそのまま記録した図とそれに若干復元を試みた図とを示して、推定の糸口にしておきたい。

奥壁の図文（第56図）

軒の線より上下図文とも描かれている。軒より上には中央に固まった図文があり、その図文の左側から下部にかけてそれをすくうように帯状の彩色がみられる。またその左側と下の軒にかけても彩色が点在している。軒より下には、軒の直下中央部に幅広で帯状の図文がやや右下がりの横方向に描かれているようで、その下に左側の跳ね上がったソリ状の図文がみられる。

軒より下の右端は空白のようであるが、左側には彩色の残りが点在している。

入口壁の図文（第56図）

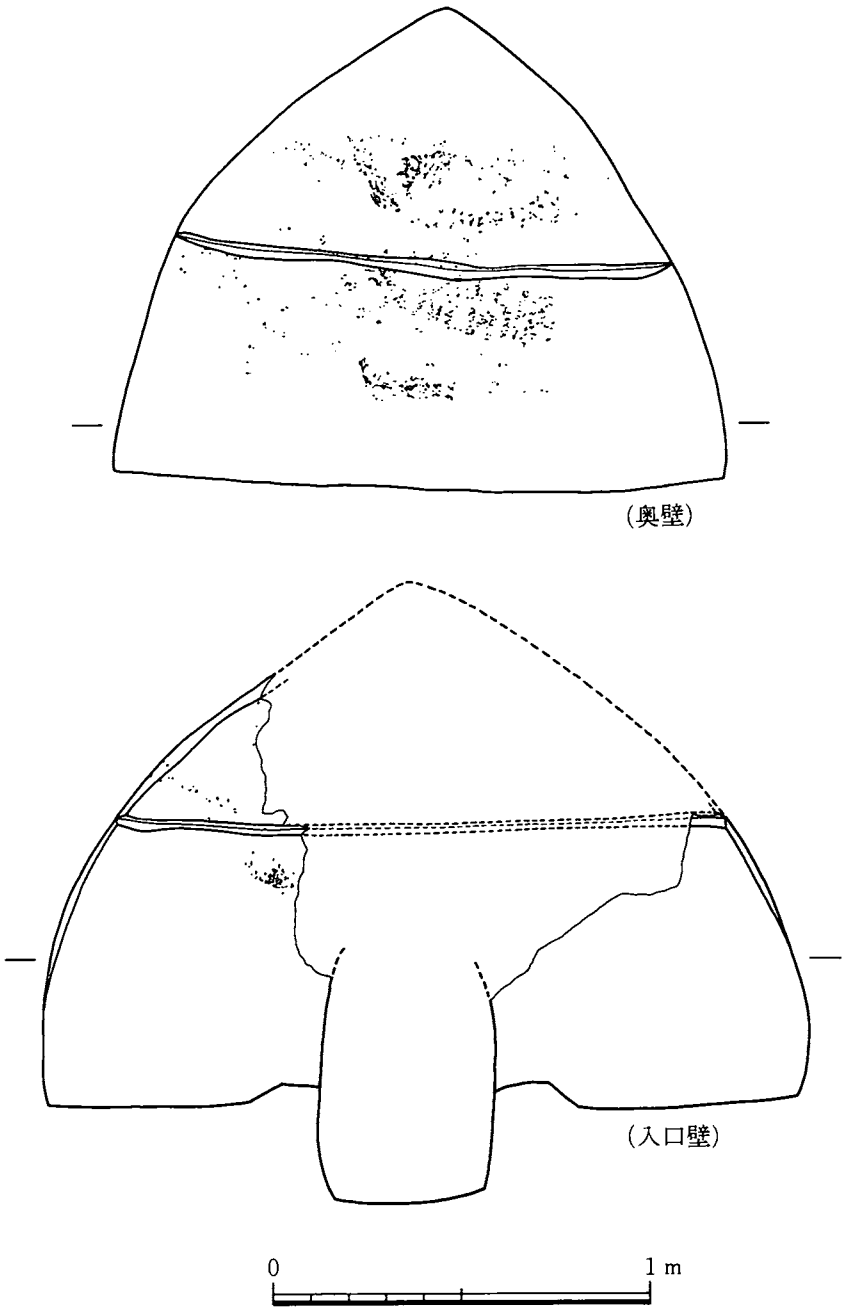
中央上部が崩れ落ちているが、 左寄りの軒の直下に鉤手状の図文があり、 軒より上に斜めに直線状に彩色が認められる。

左壁の図文（第57図）

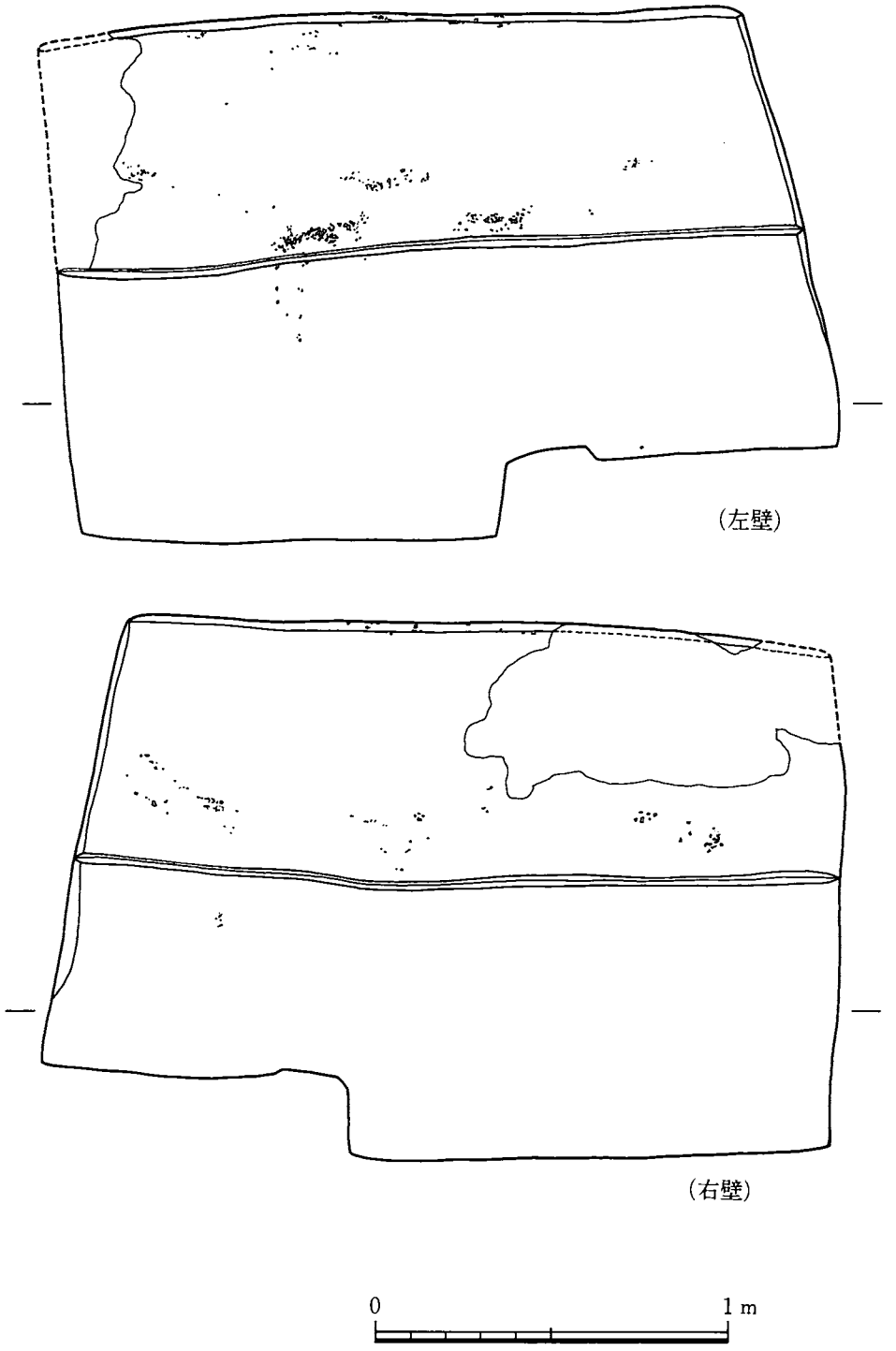
軒より上の中央近くに３つの彩色の固まりがあり、いずれも横方向に長く、見方によっては動物の群れのようにもみえる。その他、それらの両側や上方にも若干彩色が残っている。また棟の線全体が塗られていた可能性もある。軒の直下、やや左寄りにも彩色が認められる。

右壁の図文（第57図）

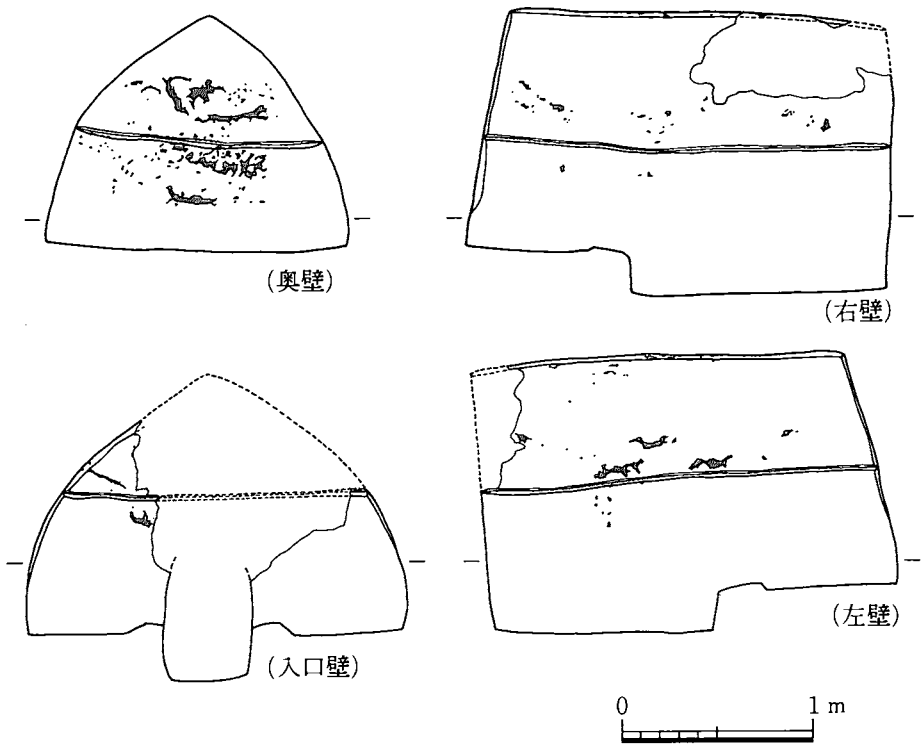
軒の下の２カ所と軒の上の３カ所に彩色が点在しているが、形状は不明である。その他、棟の線刻の中にも彩色が認められる。



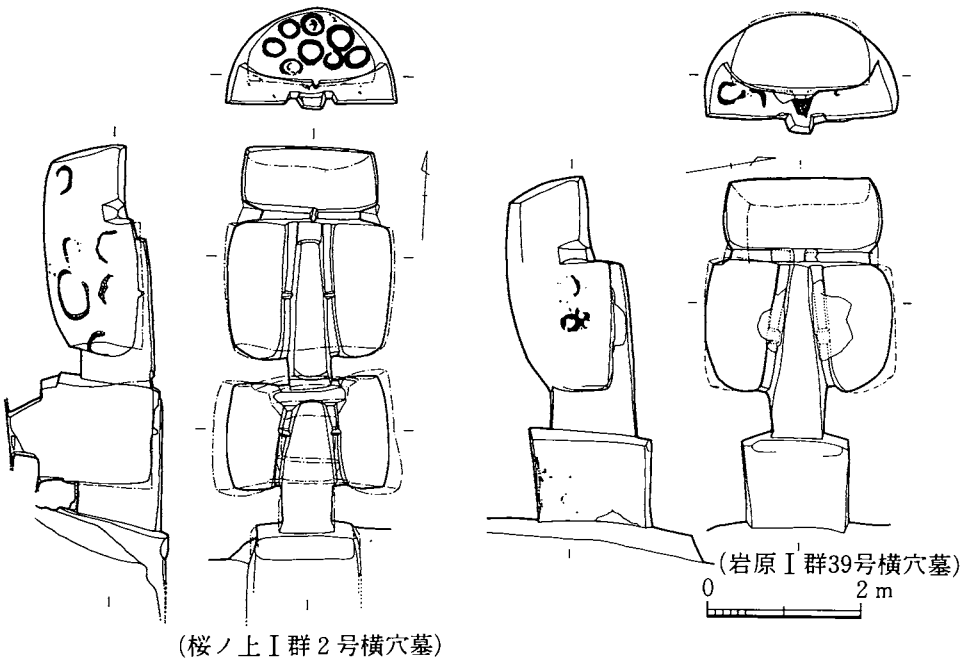
第56図　49号－C横穴墓彩色実測図(1)



第57図　49号－C横穴墓彩色実測図(2)



第58図　49号－C横穴墓彩色復元図



第59図　桜ノ上横穴墓と岩原横穴墓の彩色実測図

以上各壁の彩色の残存したものについて説明を加えたが、現状では描かれていた図文についての推定は困難な状態である。参考のために、周辺の横穴墓のうち、内壁に赤色顔料で図文を描いたものを探すと、鹿央町桜ノ上横穴墓群[1](第59図)のⅠ群2号に多数の円文とC字状やU字状の図文が描かれた例があり、同町岩原横穴墓群[2](第59図)のⅠ群39号にも同類の図文がみられる。また山鹿市弁慶が穴古墳[3]の横穴式石室の内壁には、赤色顔料で馬の群れ・騎馬人物・ゴンドラ形の船に乗った馬などが描かれている。瀬戸口横穴墓49号－cの図文は、幾何学的な図文と絵画的な図文のいずれとも決めがたいが、この横穴墓群は総数300基以上あり、詳細に観察すればさらに装飾が発見されるものと考えられる。その時には、この図文についての推定もより可能になるものと期待しておきたい。

註（1）～（3）『熊本県装飾古墳総合調査報告書』　熊本県教育委員会　昭和59年（1984）

V　熊本県七城町瀬戸口横穴墓出土の古墳時代人骨

松下孝幸*・分部哲秋*・佐伯和信*

【キーワード】：熊本県七城町、横穴墓、古墳時代人骨、低身長

はじめに

熊本県菊池郡七城町大字台字城の下に所在する瀬戸口横穴墓の発掘調査が1987年(昭和62年)11月に行なわれた。調査されたのは4基の横穴墓であるが、人骨はそのうちの3基から検出された。

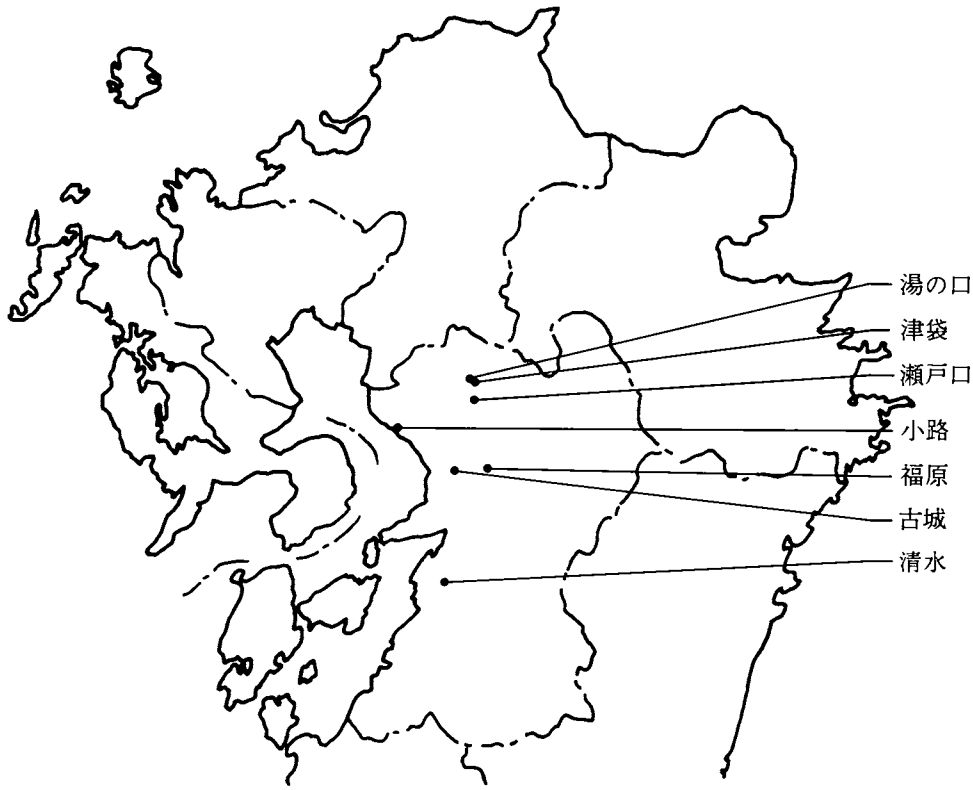
この横穴墓には雨水が以前から流入していたらしく、人骨は相当水分を含んでおり、見かけ以上に保存状態は悪かった。現場での状況から、人骨の取り上げは著しく困難と考えられたので、現場でできる限りの観察と計測を行なった。中には四肢骨の最大長が計測できるものが存在し、ある程度この古墳時代人骨の特徴を知ることができたので、その結果を報告しておきたい。

資　料

人骨は49号－b墓、49号－c墓、49号－d墓の3横穴墓に残存していたが、最後の49号－d墓は奥床に遊離歯冠が残っていたにすぎない。49号－b墓では、奥床、右床、左床のそれぞれに人骨が残存しており、奥床には1体、右床には2体分の人骨が残存していたが、左床にはごく一部の骨片しか残存していなかったので、これは他からの混入と考えられる。従って、49号－b墓からは合計3体分の人骨が出土したことになる。また、49号－c墓では、奥床に5体分の歯が検出されたことから、奥床に5体分の人骨が、左床には1体分の人骨が残存しており、49号－c墓からは合計6体分の人骨が出土したことになる。すなわち、今回の発掘調査で出土した人骨は表1に示すとおり、総計10体である。

この10体の人骨は、別稿で述べられているように、考古学的所見より古墳時代後期に属する

*Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE, Kazunobu SAIKI
Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University
〔長崎大学医学部解剖学第二教室（主任：内藤芳篤教授）〕



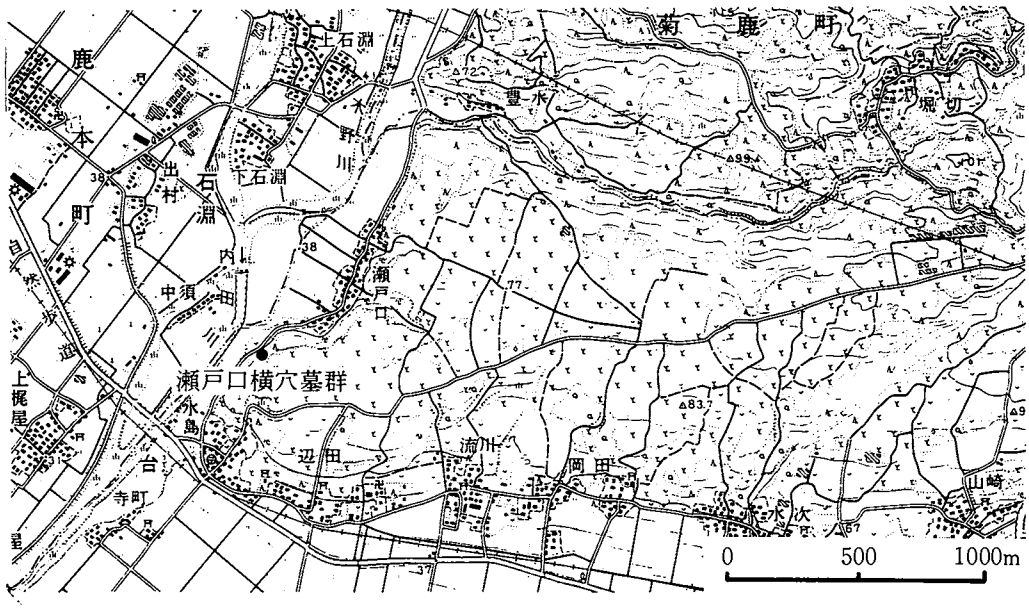


図１．遺跡の位置(Fig.1. Location of Setoguchi Tunnel-Tombs, Shichijo-cho, Kumamoto Prefecture)

人骨群である。

計測方法は、Martin－Saller（1957）によった。

表1　人骨の体数（Table 1.　Number of materials）

墓番号	死床	個体数	備　　考
49号－b墓	奥床	1	
	右床	2	男、女各1体
	左床		他からの混入と考えられる
49号－c墓	奥床	5	うち3体は幼小児
	左床	1	
49号－d墓	奥床	1	
合　計		10	

所　見

49号－b墓

49号－b墓には死床が3ケ所あり、人骨はこの奥床、右床、左床に残存していたので、各死床ごとに記載していく。

奥床人骨

残存していたのは1体分の人骨である。頭蓋、四肢骨片などである。頭蓋は大きな破片と左右の錐体が残存していた。頭蓋の大片は水分を吸収し、乾燥したために著しく変形を生じているが、おそらく頭頂骨の一部であろう。縫合は矢状縫合の一部が観察できたが、この部分は内外両板とも開離している。四肢骨は大腿骨の後面が一部残存していた。これも変形が著しく、左右を判別することができない。その他、上部腰椎の椎体が1個と左側踵骨の一部が残存していた。

性別は判別できないが、年令は縫合の状態から、高齢ではなかったと思われるので、壮年と推定しておきたい。

左床人骨

残存していたのは、四肢骨片と考えられる小片である。人骨の残存量から、この左床に本当に人が埋葬されていたのかは疑わしい。他の人骨の一部であろう。

右床人骨

頭蓋、寛骨、大腿骨、脛骨が残存していた。

1．頭蓋、歯

頭蓋は図2に示しているほかに頭頂骨、前頭骨が残存していたが、復元することはできなかった。また、下顎骨は2体分あるが、これらはいずれも破損しており、個体ごとに分けることができない。残存遊離歯のみを、歯式で示すと、次のとおりである。

／	／	／	／	／	C	／	／	／	／	C	／	P_2	／	／	／	〔／：不明(破損)〕
／	／	／	／	／	／	I_2	I_1	I_1	I_2	／	／	／	／	／	／	

咬耗度はBrocaの2度である。

2．四肢骨

①寛骨

左右の寛骨臼部が残存していたが、左右は別個体の可能性があり、右側の方は女性寛骨と考えられる。

②大腿骨

現場では右側2本、左側2本、合計4本の大腿骨を確認した。現場で観察したところ、その特徴から個体別に分けることが可能であったので、これら4本の大腿骨は2体分の大腿骨である。水分を含んでいたため保存状態は著しく悪く、取り上げることが困難であった。従って、教室へ持ち帰っても計測はほとんどできないであろうと予想されたので、最大長を現場で計測した。最大長が計測できたのは3本で、それぞれ42cm（左側）、39cm（右側）、39cm（左側）であった。この長さから前者は男性大腿骨、後二者は女性大腿骨と考えられる。

この最大長から推定身長値を算出してみると、男性は160.27cm（Pearson）、158.56cm（藤井）、女性は147.70cm（Pearson、右、左）、148.40cm（藤井、右）、148.71cm（藤井、左）となり、男性は160cm程度、女性は148cm程度となり、女性は低身長である。

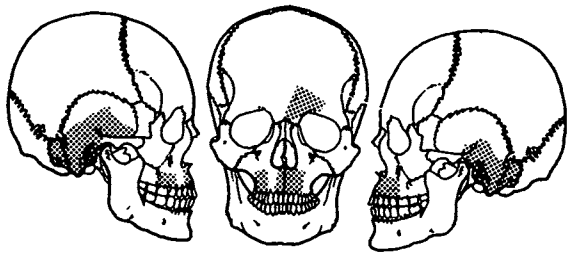
③脛骨

右側が残存していた。これも計測はできないが、観察したところでは、その径は大きそうである。従って、男性脛骨と推定した。

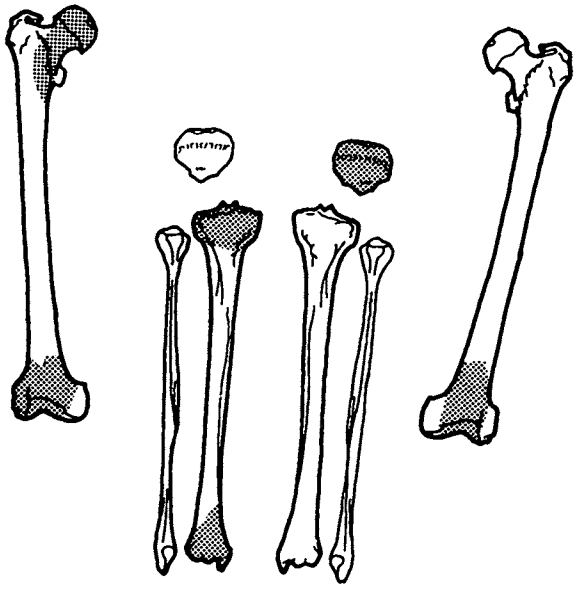
④膝蓋骨

左側の膝蓋骨が残存していた。径は著しく大きい。男性膝蓋骨である。

以上の所見から右床には少なくとも、2体分の人骨が存在した（1体は男性＝1号人骨、もう1体は女性＝2号人骨）。しかし、これらの人骨は攪乱されていたので、2体がともに右床に安置されていたのかどうかはわからない。



49号－ｂ墓右床人骨(頭蓋、性別不明)



49号－ｂ墓右床人骨(四肢骨・男性)

49号－ｂ墓右床人骨(女性)

図２．人骨の残存部、アミかけ部分
(Fig. 2. Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)

49号－c墓

左床人骨

頭蓋、大腿骨などが残存していたが、かなり取り上げが困難であった。頭蓋は頭頂骨などで、その特徴は不明である。また、大腿骨の保存状態も不良で、左右の別も判断できない。

人骨の残存状態とその量から、これはおそらく1体分の人骨であると推測される。性別、年令は不明である。

奥床人骨

人骨が一面に破片となって散乱していた。あたかも踏みつぶされた感がする状態であった。人骨は頭蓋片、上腕骨片などの四肢骨片の他に、軸椎片、左側足根骨（舟状骨、中間楔状骨、外側楔状骨）が残存していた。

また、遊離歯が残存していた。この遊離歯は幼小児が3体分、成人が2体分、合計5体分の遊離歯冠である。これらの遊離歯冠を歯式で示すと、次のとおりである。

1号人骨（0.5才～1才、幼児）

／	／	(c)	／	／	／	／	(c)	／	／	［（ ）歯槽内埋伏
／	／	c	／	／	／	／	／	／	／	／不明］

乳犬歯には咬耗が認められない。

2号人骨（2～3才、幼児）

／	／	／	／	／	／	／	／	(I1)	／	／	／	／	／	／	／
／	／	／	／	／	／	(I2)	(I1)	／	／	／	／	／	(M1)	／	／

永久歯の歯冠は形成途中である。

3号人骨（6～9才、小児1期）

／	(M2)		(P2)	(P1)	／	／	／	／	／	／	(P1)	(P2)		(M2)	／
		M1	m2	／	／	／	／	／	／	／	／	／	M1		
		M1	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	M1		
／	(M2)		(P2)	(P1)	(C)	／	(I1)	(I1)	／	／	(P1)	／		(M2)	／

咬耗は、上顎の第二乳臼歯がBrocaの2度、上下両顎の第1大臼歯は1度、下顎の切歯は不明で、その他の歯には認められない。

4号人骨（性別不明、壮年）

／	M2	M1	／	／	C	／	／	／	I2	C	／	P2	／	M2	／
／	M2	M1	P2	P1	C	／	／	／	／	C	P1	P2	M1	M2	／

〔／：不明（破損）〕

咬耗度はBrocaの1度である。

性別は不明であるが、年令は歯の咬耗が著しく弱いことから、壮年の可能性が強い。

5号人骨（性別不明、熟年）

／	M2	M1	／	P1	C	I2	／	I1	I2	C	P1	P2	／	M2	／
／	／	M1	／	／	／	／	／	／	／	／	P1	／	／	／	／

〔／：不明（破損）〕

咬耗度はBrocaの2～3度である。上顎の側切歯は両側とも円錐化している。

性別は不明であるが、年令は歯の咬耗がやや強いことから、熟年の可能性が強い。

49号－d墓（性別不明、壮年）

奥床人骨

遊離歯冠が4個分残存していたにすぎないが、そのうち1個分は粉々になっていたため歯種の同定はできなかった。残りの遊離歯冠を歯式で示すと、次のとおりで、すべて上顎歯である。

／　／　／　／　／　／　／　／｜／　／　／　P_1　／　M_1　M_2　／　〔／：不明（破損）〕

咬耗度はBrocaの1度である。

性別は不明であるが、年令は歯の咬耗が弱いことだけから推定すれば、壮年の可能性が強い。

要　約

熊本県菊池郡七城町大字台字城の下にある瀬戸口横穴墓の発掘調査が1987年11月に行なわれ、3基の横穴墓から人骨が検出された。人骨の保存状態は悪かったが、現場で観察と計測を行ない、次の結果を得た。

1．人骨は49号－b墓、49号－c墓、49号－d墓の3横穴墓に残存しており、49号－b墓には3体、49号－c墓には6体、49号－d墓には1体の人骨（歯）が残存しており、合計10体の人骨が検出された。このうち3体は幼小児で、残りの7体は成人と考えられる。成人のうち性別を判別できたのは2体のみで、男女各1体づつである。

2．頭型や顔面の特徴は明らかにすることができなかった。しかし、男女1例づつ推定身長を算出することが可能で、男性は160.27cm（Pearson）、女性は147.70cm（Pearson）となり、女性は低身長である。

3．熊本県北部地域の古墳時代人骨は、山鹿市の「湯の口横穴墓」、鹿本町の「津袋大塚石棺」などから出土した例が知られている。湯の口古墳人の男性の大腿骨は骨体の径が大きそうであり、津袋古墳人は男女とも短頭型で、「低・広顔」傾向が著しく、四肢骨は短くて細く、男性は低身長であった。本例では男性の推定身長値は約160cm程度で、津袋古墳人ほど低くはないが、また、著しく高いといえるほどでもない。このように、県北地域の古墳人の例数がまだ少ないので、その特徴を依然として明らかにすることができない。

《擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県教育庁文化課ならびに七城町教育委員会の諸先生方に感謝致します。》

表2　大腿骨計測値(mm)(Femur)

	瀬戸口 49－b 右床人骨 男性 右
18. 頭垂直径	39
19. 頭横径	－
20. 頭　周	－

参考文献

1．Martin－Saller, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie. Bd. l. Gustav Fisher Verlag, Stuttugart : 429－597.

2．松下孝幸、他、1985 a :熊本市古城横穴群出土の古墳時代人骨。古城横穴墓群（熊本県文化財調査報告第74集）：129－146.

3．松下孝幸、1985 b ：玉名市小路石棺出土の古墳時代人骨。滑石小路箱式石棺・本堂山遺跡（玉名市文化財調査報告第 6 集）：32－48.

4．松下孝幸、他、1985 c ：熊本県益城町福原横穴墓群出土の古墳時代人骨。福原横穴墓群（熊本県文化財調査報告第77集）：29－42.

5．松下孝幸、他、1986 a ：熊本県鹿本町津袋大塚東側 1 号石棺出土の古墳時代人骨。津袋大塚東側第 1 号石棺出土人骨研究報告書（鹿本町文化財調査研究報告第 2 集）：5 －33.

6．松下孝幸、他、1986 b ：熊本県山鹿市湯の口横穴群出土の古墳時代人骨。湯の口横穴群（菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書(1)）：111－122.

7．松下孝幸、他、1989：熊本県山鹿市湯の口横穴群出土の古墳時代人骨。（印刷中）

8．内藤芳篤、1975：塚原中世墳墓・丸尾 5 号墳出土の人骨。熊本県文化財調査報告、第16集：317－322.

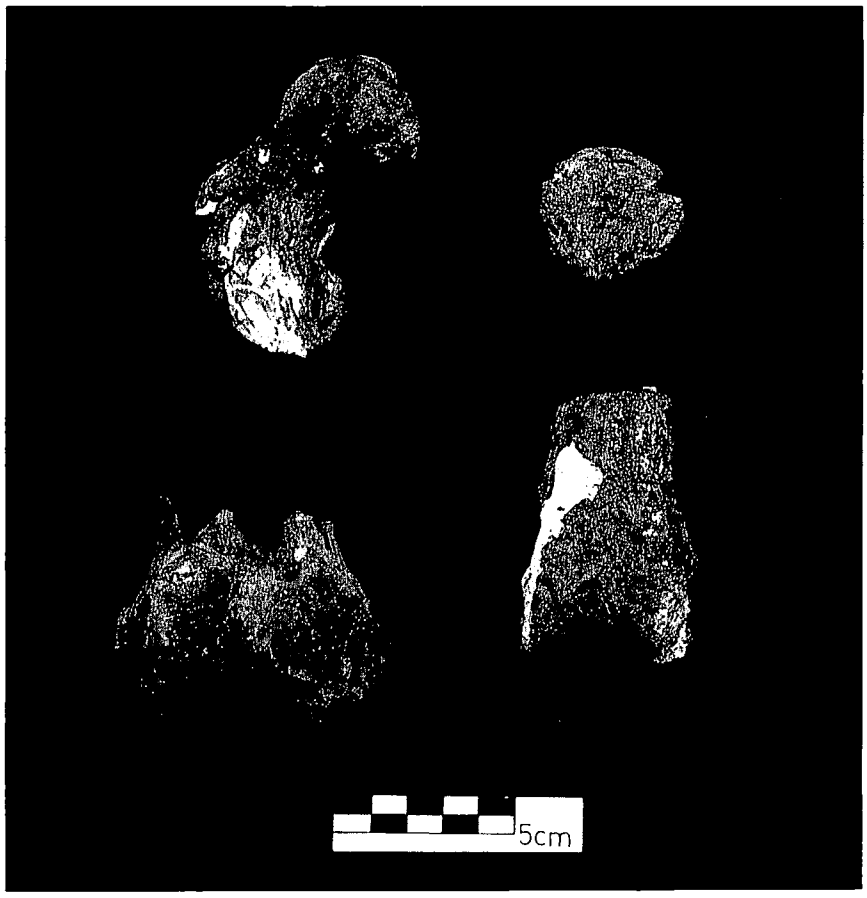
9．内藤芳篤、分部哲秋、1980：清水 1 号古墳出土の人骨について。清水古墳群・野寺遺跡・林源衛門墓(熊本県文化財調査報告第41集）：22－28.

Human Skeletal Remains Excavated from Setoguchi Tunnel−tomb, Shichijo−Cho, Kumamoto Prefecture.

Takayuki MATSUSHITA, Tetsuaki WAKEBE, Kazunobu SAIKI
〔Department of Anatomy, Faculty of Medicine,Nagasaki University〕

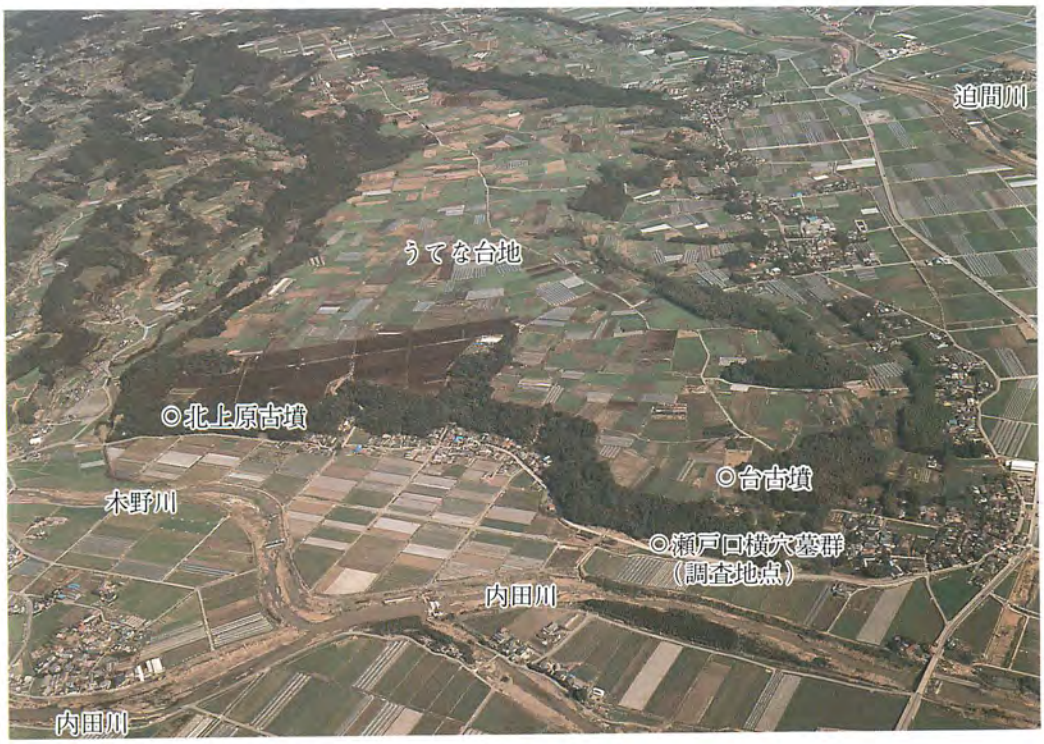
Ten human skeletal remains of the Kofun period were excavated from Setoguchi tunnel−tombs, Shichijo−Cho, Kikuchi−gun, Kumamoto Prefecture, in 1987.

These are in bad preservation, thus can not be observed and measured. But the maximal length of the femora can be measured in the site. The estimated stature is 160.27cm (Pearson) in the male, 147.70cm (Pearson) in the female.



49号-b墓右床1号人骨(男性)
(大腿骨・膝蓋骨)

図　　版



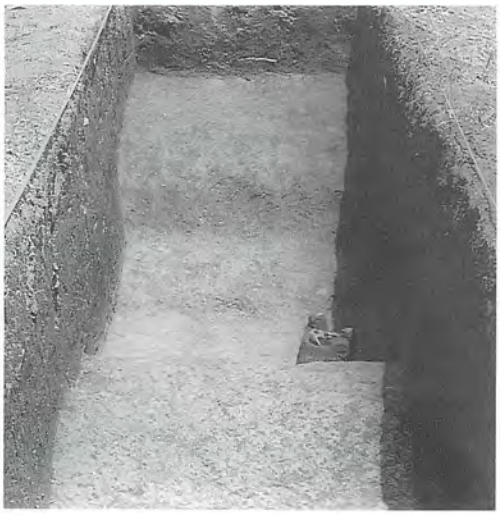
図版１　うてな台地航空写真（西方から）

図版 2　北上原古墳　墳丘断面（上）・舟形石棺（下）

図版 3　北上原古墳の墳丘 北から(上)・南から(下)

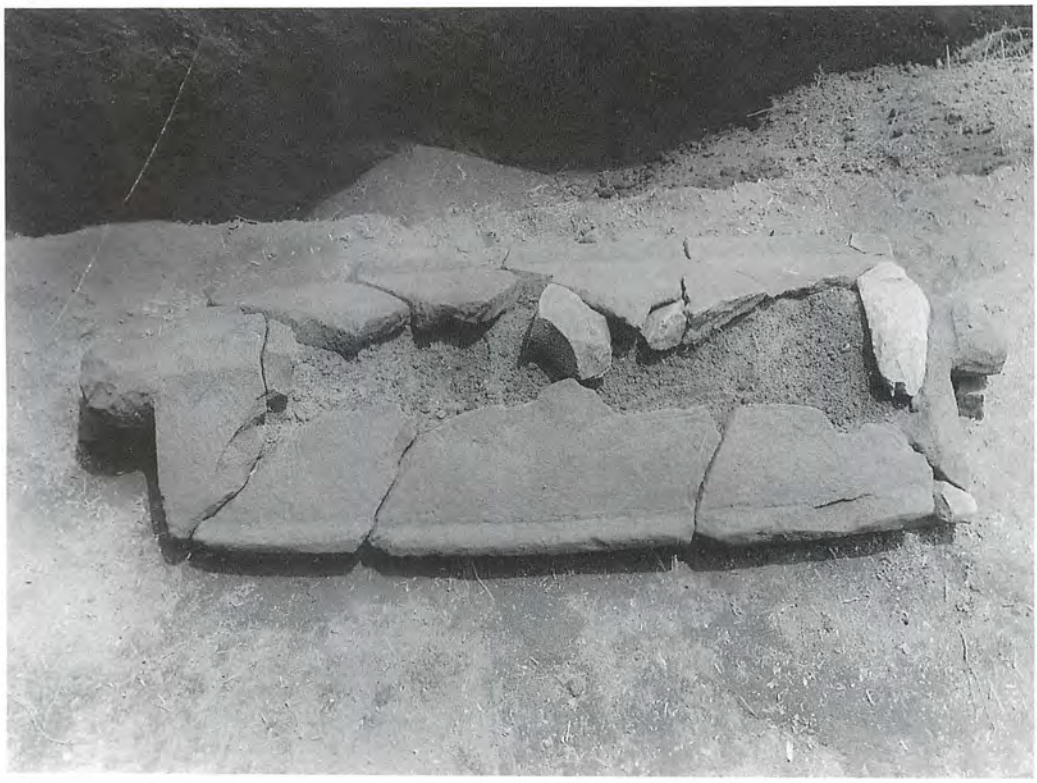
図版 4　北上原古墳　調査前の主体部状況（上）・墳丘東西断面（下）

図版 5　北上原古墳　墳丘南北断面



図版 6　北上原古墳 北側周溝

図版７　北上原古墳 南側周溝



図版 8　北上原古墳 舟形石棺棺蓋

図版 9　北上原古墳 舟形石棺棺身

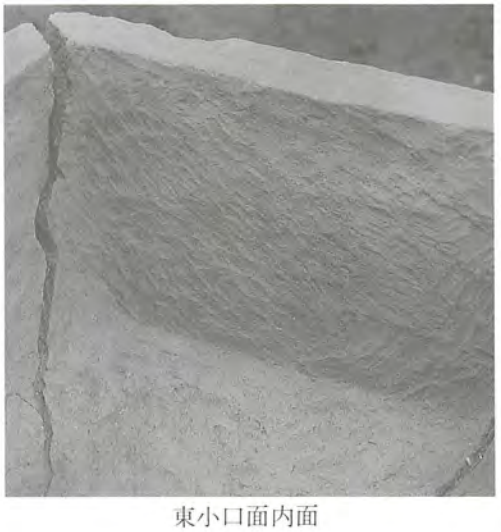
図版10　北上原古墳　舟形石棺棺身　東側小口面（上）・西側小口面（下）

南側面外面

南側面外面

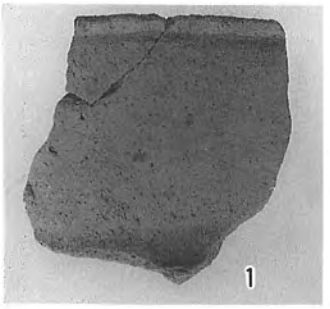
北側面内面

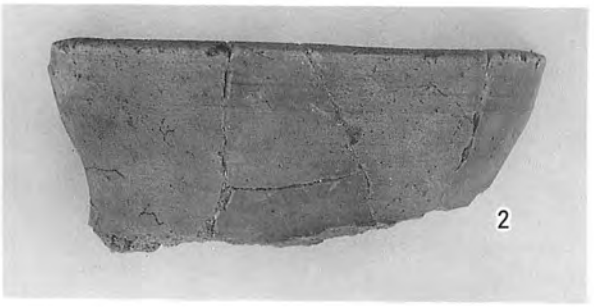
棺　底

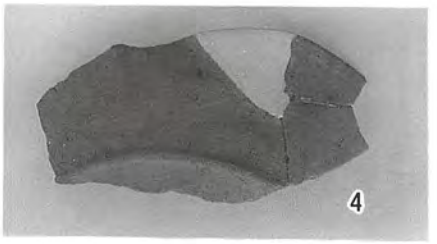


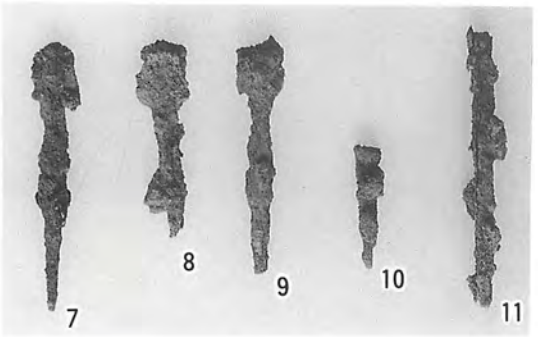
東小口面内面

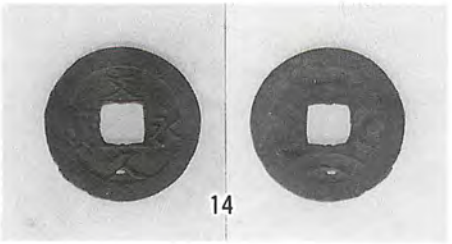
図版11　北上原古墳 舟形石棺棺身加工痕











図版12　北上原古墳　出土遺物

調査地遠景（北西から）

49号-b・c・d横穴墓調査前の状況（西から）

図版13　瀬戸口横穴墓群　調査地遠景・49号-b・c・d横穴墓

玄室調査前の状況（西から）

右屈床人骨出土状況（北東から）

図版14　瀬戸口横穴墓群　49号-b横穴墓

奥屍床人骨出土状況（西から）

左屍床人骨出土状況（南西から）

羨門部付近長頸壺・直刀出土状況（西から）

図版15　瀬戸口横穴墓群　49号-b横穴墓

閉塞状況（西から）

玄室完掘状況（西から）

図版16　瀬戸口横穴墓群　49号-b横穴墓

49号-b横穴墓羨門部完掘状況（西から）

49号-c横穴墓玄室調査前の状況（西から）

図版17　瀬戸口横穴墓群　49号-b・c横穴墓

奥屍床人骨出土状況（西から）

左屍床人骨出土状況（南西から）

図版18　瀬戸口横穴墓群　49号-c横穴墓

閉塞状況（西から）

玄室完掘状況（西から）

図版19　瀬戸口横穴墓群　49号-c横穴墓

玄室調査前の状況（西から）

玄室完掘状況（西から）

図版20　瀬戸口横穴墓群　49号-d横穴墓

左屍床耳環出土状況（南西から）

右屍床玉出土状況（北から）

奥屍床玉・耳環出土状況（西から）

図版21　瀬戸口横穴墓群　49号-d横穴墓遺物出土状況

玄室調査前の状況（北西から）

玄室完掘状況（北西から）

図版22　瀬戸口横穴墓群　49号-e横穴墓

49号-b・c横穴墓前庭部Ⅱ層遺物出土状況（西から）

49号-d・e横穴墓前庭部Ⅳ層遺物出土状況（南から）

図版23　瀬戸口横穴墓群　前庭部

49号-d・e横穴墓前庭部Ⅲ層遺物出土状況（東から）

49号-d・e横穴墓前庭部Ⅲ層遺物出土状況（北から）

図版24　瀬戸口横穴墓群　前庭部

49号-b横穴墓前庭部土層（南から）

完掘後全景（西から）

図版25　瀬戸口横穴墓群　前庭部・完掘後全景

49号-b横穴墓羨門部出土長頸壺

49号-b横穴墓羨門部出土直刀

図版26　瀬戸口横穴墓群　出土遺物

右屍床出土丸玉

奥屍床出土丸玉

49号-d横穴墓出土遺物

奥屍床出土耳環

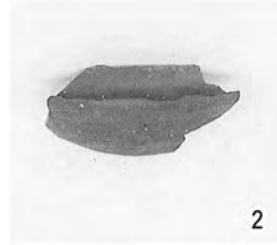
左屍床出土耳環

排土中出土耳環

49号-e横穴墓
通路出土鍔

図版27　瀬戸口横穴墓群　出土遺物

前庭部Ⅴ層出土
須恵器



前庭部Ⅳ層出土
須恵器

図版28　瀬戸口横穴墓群　出土遺物

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18・19

20

21

前庭部Ⅳ層出土須恵器

図版29　瀬戸口横穴墓群　出土遺物

22

23

24

25

前庭部Ⅳ層出土須恵器

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

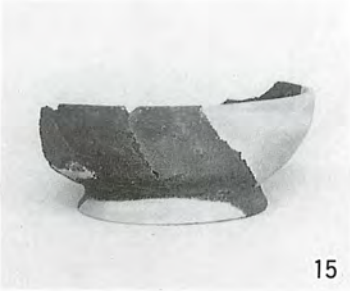
11・12

前庭部Ⅲ層出土須恵器

図版30　瀬戸口横穴墓群　出土遺物

13

14


15

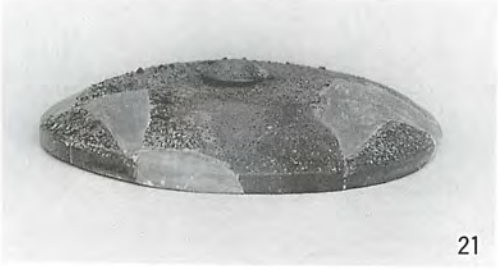
16

17

18

19

20


21

22

23

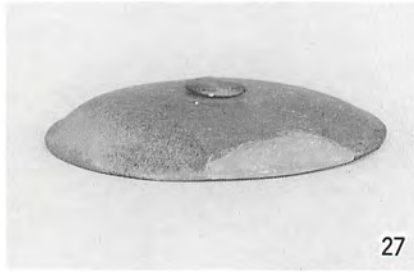
前庭部
Ⅲ層
出土
須恵器

図版31　瀬戸口横穴墓群　出土遺物

24

25

26


27

28

29

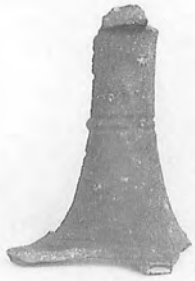
30

31

32

33

34


35

前庭部Ⅲ層
出土須恵器

図版32　瀬戸口横穴墓群　出土遺物

36

37

38

39

40

41

42

前庭部
Ⅲ層出土
須恵器

図版33　瀬戸口横穴墓群　出土遺物

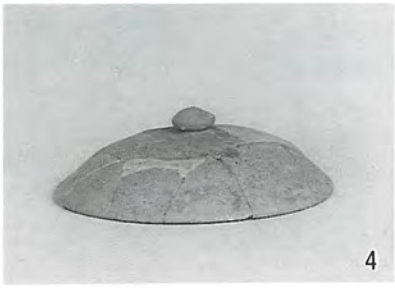
43

44

45

前庭部Ⅲ層出土須恵器

図版34　瀬戸口横穴墓群　出土遺物



前庭部Ⅱ層出土須恵器

表採の須恵器

図版35　瀬戸口横穴墓群　出土遺物

9

10

11

12

13

14

15

16

17

19

18

表採の須恵器

図版36　瀬戸口横穴墓群　出土遺物

前庭部出土
土師器

1・2

3

4

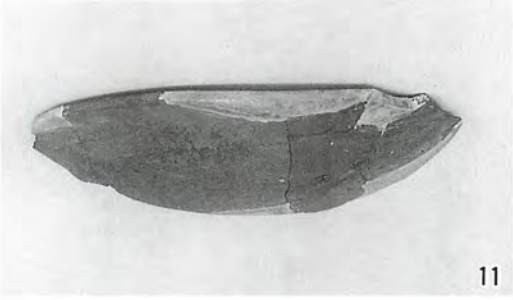
6

7

8

9

10


11

12

15

13

14

16

図版37　瀬戸口横穴墓群　出土遺物

前庭部出土土師器

前庭部出土鉄鏃

図版38　瀬戸口横穴墓群　出土遺物

7

8

9

10

11

12

13

14

前庭部出土刀子

前庭部出土鉄鏃

15

前庭部出土馬具

図版39　瀬戸口横穴墓群　出土遺物

熊本県文化財調査報告　第104集

北上原古墳・瀬戸口横穴墓群

平成元年3月31日

編集
発行　熊本県教育委員会
〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷　印刷協業組合　サン・カラー
〒862 熊本市御領町730

63 教委·教文
② 005

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 104 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：北上原古墳 瀬戸口横穴墓群
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日